

MysPhilia

vol.23



テーマ

バディ

埼玉大学
推理小説研究会

MysPhilia

ミスフィリア

Vol.23

テーマ 「ボディ」

埼玉大学推理小説研究会

今年の MysPhilia のテーマは『バディ』です。

今回のテーマの『バディ』の定義としては、探偵と助手、探偵と探偵、探偵と語り部、探偵とトラブルメーカーなど、「ある一つの謎に協力して挑む二人」と、様々な関係性を取り入れました。

バディと聞いて探偵と助手の関係がパッと浮かぶ人が多いと思います。探偵と助手はひとことでは言い表しがたい関係ではないでしょうか。友達以上は確実ですが、家族以上に信頼し合える関係でもあると思います。時には命の危険にされても相手を信じられるなんて素晴らしい関係だと羨ましくなってしまう。

また、探偵と探偵の関係では、協力関係やライバル関係が、探偵と依頼人は不信感から始まる関係もあります。いろいろな関係性が物語に溢れているから面白いのだと思います。

人と人の関わりは同じものなど一つもなく、どう発展するか予測できないものです。信頼し合える人を見つけられるように、色んな人と関わっていききたいものです。

2021年11月

埼玉大学推理小説研究会

第23・24期会長 長谷川綾音

目次

ブックレビュー テーマ『バディ』	…… 5
十四頁下段七行目による迷宮 とみや	…… 1 1
青崎有吾『ノッキンオン・ロックドドア』	
読書会レポート	…… 4 4
コナン・ドイル『バスカヴィル家の犬』	
読書会レポート	…… 6 1
ヴァンパイアトゥナイト！ 月影星乃	…… 7 6

ブックレビュー

バディ



『アリス殺し』 小林泰三

創元クライム・クラブ・二〇一三年九月初版発行

創元推理文庫・二〇一九年四月初版発行

夢と現実が繋がっているのではないかと思つたことはないだろうか。科学的な視点から考えるとあり得ない話かもしれないが、私は現実で起こつた出来事が前に夢の中で見たものと一致するということが何度かあつた。本作も、現実世界と夢の中の世界である「不思議の国のアリス」の二つの世界が交差しながら物語が展開していく。

最近不思議の国に迷い込んだアリスの夢ばかり見る栗栖川亜里は、ある日ハンプティ・ダンプティが墜落死する夢を見る。その夢を見た日に、彼女の通う大学では玉子と綽名される王子玉子という研究員が墜落死していた。その後、彼女は大学の同級生である井森健が自分と同様に蜥蜴のビルとして不思議の国の夢を見ていることを知る。共通の体験をしている二人は、これまでの事件から不思議の国と現実世界での死が共有されていると考え、不思議の国での数々の事件の容疑をかけられているアリスの死刑を免れるために現実世界と不思議の国との二つの世界で一連の事件の真犯人が誰なのかを捜査していく。

この作品の中で、亜里の協力者である井森は、現実世界では頭が良く、鋭い洞察力から様々な発見、考察を亜里に示してくれる一方で、不思議の国での姿であるビルは作中で最も頭が悪いといつても過言ではなく、度々捜査の妨げになってしまう。不思議の国の住人は奇妙な思考や言動を行うが、それでもビルの頭の悪さ、話の通じない点は際立っている。このように協力者としては頼りになるとは

思えないビルだが、どうしても憎めないキャラクターであり、頭の悪さという大きなハンデを持ちながらもアリスのために行動している彼はどこか愛らしくも思える。本作を読む際には、井森とビルの活躍にぜひ注目して頂きたい。

本作品は不思議の国の世界の奇妙さや、住人の可笑しさが見事に描かれており、不思議の国での事件を違和感なく読者は受け入れられるだろう。一方で残酷な描写も容易に想像できるほどに繊細に描かれているため、そのような描写が苦手な方はご注意ください。

(文責：瀬乃連)

『虚構推理』 城平京

講談社タイガ・二〇一九年一月初版発行

父親殺しの疑惑を掛けられたまま鉄骨の下敷きになり亡くなったアイドル七瀬かりんが、巨大な鉄骨を片手に夜な夜な街を徘徊しているという都市伝説、鋼人七瀬。ネット上では目撃した、襲われた、などの証言があとを絶たず、実際に交番に駆け込む人まで現れる。そして、ついに殺人事件まで起こり、それは柔道の有段者だった警察官が抵抗の跡もなく真正面から撲殺されるという鋼人七瀬によるものとしたか考えられないようなものだった。

「知恵の神」として妖怪達のトラブルの仲裁や解決を行う一眼一足の少女、岩永琴子と、ある妖怪の肉を食べたことで不死身の身体と未来決定能力を得た桜川九朗は、鋼人七瀬が人間の想像力によって作られた怪異だと知り、合理的だが真実ではない虚構の推理によ

り鋼人七瀬を打ち倒そうと考える。

この作品は通常の推理小説とは異なり、謎を解き明かし事件の真相を暴くというような内容ではない。怪異によって引き起こされた事件だと分かった上で、それとは異なる、人が信じたくなるような実際の真相よりも魅力的でかつ合理的な嘘の推理をどのように展開していくのか、これが本作の見どころである。また、あらすじの通り妖怪というオカルト的な要素が多分に含まれてはいるが、ファンタジーに近い雰囲気となっておりホラーチックな話が苦手な方にもぜひ読んでいただきたい作品となっている。

しばしば突拍子もない発言をする主人公の琴子と、それに冷静で冷めたような態度で返す相棒の九朗の二人の掛け合いなどもあつてかテンポ良く読み進めることができ、かなり特殊な設定ではあるが、他の多くの推理小説とは一風変わった作品であるため、新鮮な気持ちで読むことができる。興味のある方はぜひぜひ一読を。

(文責・杉山)

『死亡フラグがたちました！』

『凶器は…バナナの皮!? 殺人事件』

七尾与史

宝島社・二〇一〇年七月初版発行

「死神」と呼ばれる殺し屋のターゲットになると、まずターゲットのもとにジョーカーのカードが送られてくる。するとその人物は二十四間以内に「死神」が仕組んだ「不幸な事故」によって必ず

死んでしまう”。売れない雑誌のライター・陣内は一発逆転の特ダネを求めてこの「死神」の噂を追っているうちに、知り合いからある組長が「死神」に殺されたという情報を得る。型破りだが優秀な頭脳を持つ投資家・本宮と、組長の敵討ちを誓うヤクザ・松重とともに、「死神」の正体に迫っていく。しかし、彼らが事件を調べている間にも、別の場所で事態は動いていた……。

「不幸な事故」は、その通り、「死神」によって殺されたはずの人物は実に都合よく「事故死」あるいは通り魔的人物に殺されてしまう。それは誰が見ても「不幸な偶然の死」にしか見えず、作中では「死神」の仕業だ！と言っている人物に対しては「こじつけだ」「荒唐無稽」などといった言葉が浴びせられ、この物語で探偵役を務める本宮、語り手を務める陣内さえも、自分たちの推理を「ほぼ妄想に近しい」とまで言っている。あまりにも綿密かつ多彩な「死神」の罠を看破していく彼らの姿を、ぜひ楽しんでほしい。

本作のタイトルにある「死亡フラグ」とは、映画や小説、漫画などの良く言えば「王道」、悪く言えば「ありがちな」シナリオにある分かりやすい伏線を指す「フラグ」の一種である。例を出せば、危機的状況の中、「これが終わったら、恋人と結婚するんだ……」などと言っている登場人物はこの後死ぬ確率が高く、結婚は果たせない。「死亡フラグ」となる。

作中の人物（特に本宮）は、よくこの「死亡フラグ」という言葉を用いる。この物語はポップなタイトルとは裏腹にシリアスに進行するのだが、こういった自分たちが物語の登場人物であるかのように俯瞰するコミカルな言葉がたびたび登場し、息の詰まるようなシ

リアスな空気の中、絶妙な雰囲気醸し出している。

(文責…匿名)

『謎解きはデイナーのあとで』

東川篤哉

小学館・二〇一〇年九月初版

「お嬢様の目は節穴でございますか」「クビよ、クビ！」という台詞でご存じの方も多いであろう、世界屈指のお嬢様でもある刑事・宝生麗子と執事・影山コンビが登場するこの作品。私は小学生のときに手に取り、夢中で読んだのを覚えている。続編はもちろん、ドラマや映画も大変面白く、私がミステリ好きになった原点とも言える作品である。

シリーズ第一巻には、六編の短編が収録されている。

第一話 殺人現場では靴をお脱ぎください

第二話 殺しのワインはいかがでしょう

第三話 綺麗な薔薇には殺意がございます

第四話 花嫁は密室の中でございます

第五話 二股にはお気をつけください

第六話 死者からの伝言をどうぞ

どの短編も魅力的な謎はもちろん、麗子や影山、風祭警部など登場人物たちの軽妙なやりとりが描かれ、先へ先へとページをめくる手が止まらない。また、その魅力はタイトルからも溢れている。端

的に事件を表わしているが、一体どういう状況なのか？ どうやって殺されたのか？ など引き込まれるものばかりである。

この六編の中で私が特に好きなのは「第三話 綺麗な薔薇には殺意がございます」である。鋭い棘を持つ「薔薇」と「殺意」という言葉の組み合わせにどうしようもなく惹かれてしまった。意味深な黒猫も登場し、不思議な雰囲気のある作品だった。謎解きは目からうろこ、という感じであるほどそうだったかと驚いたものである。

先述した通り、このシリーズは続編も書かれており、ドラマ化や映画化もされている。登場人物のユーモア溢れるやりとりや魅力的な謎が盛り沢山なので、興味を持った方はそちらも合わせて手に取って頂ければと思う。

(文責…水世絃)

『モルグ街の殺人』

エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe)

一八四一年発表

東京創元社・一九七四年六月初版発行 丸谷才一訳

一八*年*のパリにて、モルグ街に住んでいる母娘が惨たらしく殺される事件が起きた。母親の死体は原型が残らないほど切り刻まれ、特に胴体と首は繋がっておらず、娘の死体は煙突に押し込まれており、死因は絞殺。この異様な事件を新聞で目にした、語り手である「ぼく」とその友人、C・オーギュスト・デュパンという、無気力だが特異的な分析力を持つ紳士が、一緒に捜査に乗り出す……。

近代の文豪、ポーが手掛けた名作。

『モルグ街の殺人』とは、世界初のミステリ小説であり、『シャーロック・ホームズシリーズ』等でよく見られる、名探偵と、その友人の語り手という構図を最初に挑戦した作品でもある。語り手である「ぼく」は名前も出てこず、ワトソン博士などと比べると無個性な存在であるが、彼と同じように、推理の鋭さに驚嘆して見せたり、相槌を打ったりして、探偵の推理をより鮮やかに演出することに貢献している。一方、探偵役であるデュパンのほうは、確実にホームズのモデルであると言い切れる。両者とも鋭い分析力を持つが、時に無気力な状態になることもあり、また、相棒を自分の推理で驚かして楽しむなど、少し子供じみた一面がある。余談だが、『緋色の研究』には、ホームズがデュパンのやり方について、「分析力はあるが別に非凡でもない」とこき下ろし、彼のファンであるワトソン博士を怒らせている場面がある。

ホームズの言葉とは裏腹に、デュパンの推理は非常に理路整然としていて明快で、気持ちの良い推理である。怪奇作家らしく、ポーは殺害状況をいかにもおどろおどろしく描写しているが、この陰惨さと対比するようなデュパンの推理は現実的かつ論理的で、暗い部屋の中に明かりがともされたかのような安心感を覚えることができる。

この事件の犯人は世界一といっても過言ではないくらい知れ渡っているが、デュパンの推理の鮮やかさやポーの情景描写の陰惨さなど、結末だけ知っていても楽しめるところはたくさんあるので、是非犯人を知っているが読んだことがない、という人も読んでみて欲しい。

(文責：匿名)

『ライオンの棲む街——平塚おんな探偵の事件簿1』

東川篤哉

祥伝社文庫・二〇一六年九月初版発行

東京で地味なOL生活を送っていた川島美伽は仕事や恋に疲れ、地元・平塚で人生のやり直しを目論むが、就職難でなかなか社会復帰ができず、また東京に戻るか、地元で主婦業への永遠就職か……の二択を迫られる。そんな中、高校時代の旧友である生野エルザから「暇ならウチの仕事を手伝え」というファックスが届く。当時「ライオン」と呼ばれていた彼女は、平塚署の刑事達も一目置く名探偵になっていた。久しぶりの再会に喜ぶ間もなく、美伽はエルザの探偵助手、そして(依頼人にすらタメ口全開でガサツな雌ライオンの)猛獣使いとして様々な事件に挑んでいくことに……。

今年のテーマが「バディ」ということで色々悩んだが、今まで読んできた作品で多かった男性同士や男女のバディではなく、今回はあえて女性同士のこの作品を紹介させていただくことにした。

本作はキャラの濃い登場人物が多く、仲の良い女性二人のややあけすけな会話はまるで漫才かのようなテンポの良い掛け合いで、サクサクと読み進めることができた。連作短編集で一話当たりの量もちょうどよく、かなり読みやすいのでぜひ気軽にお手にとってほしい作品である。

(文責・吉田しおり)

『ロシア紅茶の謎』

有栖川有栖

講談社文庫・一九九七年七月初版

犯罪学者の火村英生とミステリ作家の有栖川有栖のコンビが登場する国名シリーズの第一弾。短篇が六篇収録されており、どれも読み応えある作品ばかりである。その中の二つを紹介したい。

まず表題作の「ロシア紅茶の謎」。被害者である作詞家が自宅で開いたパーティーで、毒入りの紅茶を飲んで殺されたというストーリーである。ロシア紅茶とは紅茶にジャムを入れる飲み物だそうで、残念ながら私はまだ飲んだことがない。甘そうだなあ、と思うが飲んでみたい気もするので、これからレシピを調べようと思う。この「ロシア紅茶の謎」の犯人、そしてその殺害方法には度肝を抜かれた。「大した度胸だ」と、火村も驚く方法で殺害をやり遂げる犯人の豪胆さも、この作品の驚く点であり魅力ではないかと思う。

次に紹介するのが六篇の中で私が最も好きな「動物園の暗号」。動物園の猿山で飼育員の男性が亡くなっており、その手には鶴や鰐などの文字が書かれた奇妙なメモが握られていたというところから物語が始まる。犯人は誰なのか？被害者が握っていたメモが表わすものとは？という二つの謎が火村と有栖川の軽妙な、そしてテンポのいいやりとりで解かれていく。なお、作中で猿山の猿たちが「口がきけたなら」と有栖川がこぼすシーンが印象的で、思わず確かにと頷いてしまった。動物にも口がきけたなら、きっと野良犬や野良

猫、飼育されているペットにも話が聞けて、あつという間に未解決事件も解決するのでは？と思ってしまったわけである。

また、六篇を通して描かれる火村と有栖川の素晴らしいコンビぶり、この『ロシア紅茶の謎』の大きな魅力だと思う。二人の会話からは気の置けない仲の良さ、そしてお互いを信頼していることがダイレクトに伝わってくる。謎を解くヒントもそのやりとりの中から見つけられることも多い。国名シリーズはもちろん、他の長編作品でもこのコンビの良さが描かれているので、魅力的な謎、そして火村と有栖川にも注目して読むことをお勧めしたい。

(文責・水世絃)

『十四頁下段七行目による迷宮』

とみや

わたしは小学生の頃から、ものを窓から投げ捨てるのが好きだった。高い階からであればあるほど気持ちがよくて、シャーペン、消しゴム、ノートの切れ端、とにかくもう手頃なサイズのものであれば仔細は問わない。それがたとえば嫌いな人の、わたしをいじめてくる人の持ちものならもう気分はハイになってしまつて、朝、誰もいない時間に教室に入つては、人の机の中からその人の私物を窓から校庭へ投げ捨てたりした。そのあと、何食わぬ素知らぬ顔で教室に入り直し、昼休みになつて、わたしをいじめる人の顔を見ては校庭で砂まみれになっているお道具のことを考える。そうすると、何とも言えない快感が、胸の内に起こるのだった。

自分のものを投げ捨てるというときも、もちろん、嫌いな人のそれとはエクスタシの度合いが違ったけれど、ママの買ってくれたものを窓から捨てて砂まみれにするという行為が、とても背德的な気がして、どんどんハマつていったものだった。上から見下ろした二次元的な校庭に、わたしの手から離れたお道具が3Dに自由落下していく、吸い込まれていく、正しく非日常的な光景。こんなにメルヘンで愉快なことがあるかと、本気でそう思っていた。

小学五年生のときか——しかしその性癖は、突如として抑制されることになる。

わたしがある日投げた鉛筆が、偶然そのとき校庭にいた下級生の目に当たってしまったのだ。そのときの鉛筆は教室の備品で、嫌いな人の私物よりはまだマシなものだったけれど、担任にはそこそこ

真剣に怒られた。

あんな朝早くに、校庭に人がいるなんて思わなかった……。

幸いにして、鉛筆が目当たってしまったそのときの下級生は失明にはいたらず、その問題自体も大事にはならなかったのだけれど、以来わたしは、窓からものを放り投げることはなくなった。誰かに怪我をさせる可能性については、気をつければ大丈夫だろうくらいの認識だったし、それは今もあまり変わっていない。ただ、「バレたらずまい」という気持ちは強くなった。

あの一件で、わたしには「前科」がついたのだ——今後、誰かのものが校庭に落ちていたら、まず疑われるのはわたしだ。いじめられていたわたしにとつて、教師までもに敵視されるのはさすがになわなかった。大人だけは、無関心であるのはよかつたつて敵であつてはほしくなかった——そんな気持ちで、わたしはあれ以降、わたしの性癖を封印していたのだった。

あれから三年。

わたしは、思い知った。

わたしは、わたしが思い知つていなかったことを——思い知った。小学五年生のあのとき、わたしは、結局のところ何もわかっちゃいなかったのだ。

自分の性癖が世間的に歓迎されるものではないとか、いじめられていて辛かったら多少非道徳的でも心の拠り所となる行為が必要だとか、そうはいっても人にばれないよう気をつけなければいけないとか、関係ない人に怪我をさせるのもよくないとか、色々考えちゃあいたけれど——そうじゃなかった。全部間違っていた。世の中にはもっと、もっと不条理で言語の限界を超えた損壊があるのだと知

った。

端的に言えば、秋、九月十五日。

わたしの後輩の浅羽妖史くんは、わたしのせいで死んだのだった。

わたしの机の上に、わたしのでないものがあつた——それで書き出しとしては十分だ。わたしは中学にあがつてからはいじめられていないのだけれど、それでもクラスの日陰者であることには変わりない。昼休みの時間にお手洗いから戻ってきたら、わたしの席がカースト上位の女子に勝手に使われていて嫌な思いをする——そんなことはたくさんある。ざらにある。そしてそういう人に限って、他クラスの、小学校時代にわたしをいじめていた人たちと仲がよかつたりするのだから、これが救いない。

さて、そんな話で何を主張したいのかと言え——これはつまり、自分のスペースに他人の所有物が置かれているのはなかなか不快であるということが言いたいのだった。

小学校時代は机の上に画鋲が置かれていたりしたわたしだけけれど、それは意外に気にならない。なぜならその場合、わたしをいじめている人が、わたしに嫌がらせをしようとして画鋲を置いたのだという「経緯」の想像がつくからだ。それさえわかれば、今日に見えるのはいつも受け流しているのと同じただの純粹な悪意であり、よつてわたしを過度に苛立たせるようなものではない。

しかし、今わたしの机に置かれているものは違う——それは、陶器だった。

陶器。セラミック。焼きもの。

どんな風にこの物体を形容しようといいのだけれど——問題は、この、わたしの机の上にある物体が、わたしをひどく不快な気持ちにさせるものであるということだった。

三時間目、つまり今現在。わたし、神崎いつかのいる二年三組は、時間割でいうと体育の授業が振り分けられている。今頃、クラスメートのみんなは体育館で球技に興じていることだろう。わが校では、秋ほどの学年でも室内競技シーズンなのだ。女子はバレーボール、男子は……、バスケットボールだったか？ まあ、何でもい。

だって、これからわたしは早退するのだから。

今この時間、二年三組の教室にいる人間はわたし一人。それは、わたしが二時間目の途中からさつきまで、わが校の保健室にいたということの意味している。何だかわからないが、今日はひどく体が怠い……。二時間目の数学で堪えきれなくなったわたしは、途中で授業を抜けた。そして保健室のベッドで一時間ばかりの休憩をしたあと、荷物を回収するために教室に戻ってきたというわけである。そんな三時間目の最中、午前十時三十六分——わたしは、わたしの机の上に置かれた、わたしのものでない美術品を眺めていた。

これは……、いや、考えなくてもわかる。美術の時間に作られたものだ。

それは不器用な造形の、はにわのような表情のかたどられた、しかしはにわにはおよそ見えない、結構大きな円柱状の何かであった。取っ手をつけようと粘土を盛った形跡があつたが、今の形を見るにどうやら途中で挫折したらしい。わたしも取っ手をつけるのにはだいぶ苦労したので、製作者の苦悩に寄り添えないこともなかった。

が。その全体的にずさんなつくりには、わたしとしては少しも寄

り添えない——何だろう？ はにわを作りたかったのか、コップを作りたかったのか、あるいは、もっと他の何かを作りたかったのか——その境目が至極曖昧で、行き当たりばったりでこねられた小手先細工であることが見え見えだった。そこそのサイズとそこその重さを持ち合わせている点も、応用性がない上に邪魔くさくてうざったい。

それに何より。少なくとも、仲よくもない人間の机に自分の作品を放置するほどには、この陶器の主はこだわりを持ち得ていないのだ……。三組は美術の授業はなかったから、隣の四組から着替えに来た女子のものだろう。体育の授業は二クラス合同で、女子は三組、男子は四組で着替えることになっている。だからきつと、一、二時間目が美術の時間だった四組の生徒が、そこで返却された作品をそのまま持ってきたのだ。体育着で机の上はあらかた埋め尽くされてしまうけれど、授業を欠席して着替えを必要としないわたしの机は比較的空いている。それで、この陶器はここに——初出情報だが、わたしの数学の教科書を下敷きしながら——配置されたものと思われる。

知らないやつ机だからって、ぞんざいに。軽薄に。

わたしは四組に友達がいらない。四組どころか、多分全クラス含めて皆無と言っていい。だから、この物体の持ち主がわたしの知り合いです。可能性もまた皆無だ。一応、数学の教科書の名前の部分を見ればこの席に普段わたしが座っているのはわかるのだけれど、そのために裏表紙を確認した形跡も特にない。つまり、「誰の机かわからない（知るつもりもない）けど、とりあえず手頃だから場所貸してもらおう」という軽いモチベーションで、この陶器はここに

置かれたわけである。

——腹が立つ。

無性に、無性に、腹が立つ。

いったいどんなやつがこの陶器を工作したのだろうか？ はにわの表情は基本的には愛らしいはずなのだが、こいつのそれはとてもわたしを苛立たせるものだった。とぼけているようで、デリカシーがないようで、人の気持ちを何とも思っていないようで——いや、勘ぐりすぎだろうか？ でも、これに似た表情をわたしはたくさん見てきた……。小学生のわたしは、こういう邪気がないだけの邪悪、理由のない悪意にずっと苦しめられてきたんだ。

——あれ？

他クラス。そしてこの、自分の関わりのない立場の悪い人間のことはどうでもいい、どうしたっていいと思っているかのようなぞんざいさと作成物——覚えが、ある。

まさかと思つて、わたしはそのはにわに付けられた名札を確認する。そして、その名前を見て、納得と絶句を同時に体験した。

二年四組、和泉美海^{いずみみうみ}。

言うまでもない。小学生の頃にわたしをいじめていた生徒である。

主犯格、である。

「……………」

ふつつつと。

ふつつつと、わたしの中で怒りが煮えたぎってきた。

中学校にあがってから、わたしはいじめにはあつていない——嫌がらせの一つだつてない。友達の多い彼女、和泉美海には、友達のほとんどいない他クラスのわたしを気にする暇なんてないのである。

たとえ、同じ小学校からこの中学に入学した同学年が、わたしたちを入れてたった三人しかいなかろうが、そんなことは彼女にはどうでもいいのだ。

二年生に進級したときのクラス替えて体育の授業を一緒にやるようになってから、あの子に一度だけ声をかけられたことがある。

「よっす」

それだけ。

それだけだった。

わたしの上履きを男子トイレに入れたことも、テストの日に筆箱を隠したことも、座るときに椅子を後ろに引いたことも、わたしの好きな人をクラス中に言いふらしたことも——その言葉は、全部忘れていたかのように軽く。全部最初からなかったもので、認識もしていなかったとでも主張しているように、そう主張すらしていないかのような——軽さだった。

ところで彼女は今、人気者らしい。

顔もスタイルもいいから男子にモテて、性格も直情的だからぶりっ子のように敵を作ることもない。やりたいと思ったことはやって、やりたくないと思ったことはやらない。そういう湿度のなさが、人気の秘訣らしい。

ふざけるんじゃない……。

確かに、中学にあがってから彼女は少し変わった。それは認めようと思う。部活（確か、バスケット部だ）を始めて、コミュニケーションの大切さみたいなものに気づいた節がある。後輩の面倒見もいらいしく、わたしにしても、それは納得できる話だった。中学での彼女は、いわば「姉御」的なリーダーシップを所持する人間だ。

けれど今、改めてわかった。

和泉美海——彼女の根幹は、昔いじめていた人間のことを何とも思っていない軽薄な人間である。

少し気を遣って教科書の裏の名前を見れば、この席にわたしが座っているということはわかるのに。

——見れば、わかるのに！

不安定な立ち方をしている円柱状の陶器は、今にも倒れそうな格好だった。窓から風が吹き込む度、コロコロと音を立ててふらついている。こんな足場のない人間は、わたしは嫌いだ。こんな節操も思慮もない人間は、わたしは、憎いと思う。憎い、憎い憎い、憎い——。

「……ん？」

ちよつと待った。

——窓？

今更の言及だが、わたしの席は窓際である。隣に壁のある閉塞感が好きだから、わたしは、たとえ初期位置がどのようなようになっていようと、始業の際に必ず窓のある壁に机をびたりとくつつける。今日とてそれは例外ではなかった。わたしの机は、教室の窓に少しの隙間もなく接している。

つまり。

この陶器が風でバランスを崩し窓から落下したところで、どこも不自然じゃないんじゃないか——？

「……何が言いたいのか、わからない？」

わたしは誰もいない教室で誰にも聞こえない声で、自分の考えを反芻する。

つまり。

つまり——わたしが今からこの陶器を窓から投げ捨てたところで、それをわたしの犯行だと思う人間は、誰一人としていないんじゃないか——って、「言ってるんだ！ わたしは！」。

「……………」

ごくり、息を呑む。

いいじゃないか、一回くらい。ずっと、ずっとずっと……、我慢してきたんだ。下級生の目に鉛筆をぶつけたあのときから、ずっと封印してきたんだ。

今は授業中で、体育も屋内で行われているから、外に人はいない。おまけに、犯行を疑われる可能性はなく、教室にはわたし以外誰もいない。その上、相手は昔わたしをいじめていた人間だ。こんなので、あからさまに、神様がくれたチャンスじゃあないのか？

気がつくど、わたしは両手で陶器を持って、椅子の上に膝立ちしていた。

いや、もうこの際、和泉美海がわたしをいじめていたことなんてどうでもいいんだ。

人のものを高いところから捨てられるということ。そして、ただでさえ体調が悪くて苛立っているときに、さらに苛苛するようなことをされたこと。それだけで、動機として十分なのだ。

「……はあ、ひい」

再度確認する、校庭に人はいない。今日は風が強いので、砂が大部分を占める校庭ではつむじ風が闊歩していた。ゆっくりとその校庭のy軸に両手をずぶずぶ刺していく。窓の枠線を越え、陶器は既に、命綱なしで空中にさらされていた。

わたしをいじめたことなんてどうでもいい。だって、わたしをいじめていたときは、わたしのことを見てたじゃあないか。わたしの反応を見て、面白がっていたじゃあないか。

他のことは、全部どうでもいい。

わたしは、無視されるのが一番キライなんだ——！

「……ああっ!!」

それは。

それは、自分でも「悪いことをする人間」とは思えないような、間抜けな声だった。

手を離れたその瞬間、陶器は吸い込まれるような自由落下を始めて。

あんなに好きで、あんなに興奮したはずなのに——罪悪感と恐怖で頭がいつぱいになり。

やがて——わたしは落下の途中で顔ごと目を逸らしてしまって、「パリン」という「取り返しがつかない」という意味の擬音を後方に聞いたあと、その場にうずくまったのだった。それは授業中の教室にはうまく通らない程度の些細な音量だったが、誰もいない二年三組の教室にはしかと聞こえるそれだった。

「……うう、わ、あ」

声にならない呻きのようなものを五か六あげて、わたしはようやく立ち上がった。

よく考えると、風で倒れて落ちたというのはやっぱり多少無理があったかもしれない——確かに窓と陶器の位置関係はそれが可能な状態になっていたが、とはいえやはり、三時間目の間に早退で教室に荷物を取りに来ていたわたしが疑われる可能性は高いだろう。

しかしそうだとすると、それはせいぜい過失で判断できる程度のことだ。中学校の中にわたしの小学校時代を知るものは少ない――わたしがわざと落としたりなんて、ほとんどの人は思わないだろう。

和泉美海はもしかしたら気づくかもしれないが、それを言いふらされたらわたしは「和泉美海にいじめられていた」という事実でカウンターを決めるだけだ。この件に関して、わたしが焦る要素は、現時点何もないのである。だって、主に大切にされていなかった作品が、不幸にも窓から落ちて割れてしまっただけなのだから。

それでも、わたしは何だかいたたまれなくなってしまい。

「ごめんなさい。和泉さんの陶器を落としてしまいました。二年三組、神崎いつか」という書き置きを自分の机の上に残してから教室を去ったのだった。

「はあ……」

三階からずつと階段を降り、やがて下駄箱に辿り着く。

よく振り返ってみれば、わたしはとてつもなく愚かだ。

人のものを高いところから落として、それで、いったいぜんたい何が楽しいんだ？

ただの犯罪じゃないか。

和泉さんのことだって、「わたしはいじめられて辛かったんだよ」と一言言える勇気があれば万事解決していたのだ――わからないけれど、今の彼女なら多分謝ってくれるだろう。そんな気がするし、実際わたし、今の彼女のこととはそこまで嫌いじゃないのだ。過去の罪を帳消しにすることはできないにしろ、人は変わるものである。小学生の頃の過ちをいつまでも今の快活な彼女に重ねていては、わたしの記憶も一生辛いまま改善されないだろう。

今日は体調が悪いからもう帰るけれど、明日はちゃんと会って謝ろう。魔が差してしまったことを謝ろう。小学生の頃から、会って話せば意外と話の通じる人なのだ。そうだ、もし許してもらえたら、友達の人でも紹介してもらおうのはどうだろう？ もう裏で悪いことをするような陰湿な性格からは脱却して、わたしも、和泉さんのように明るく楽しく生きてみたい。和泉さんがそうだったように、わたしだって、意思さえあれば変われるんだってところを見せてやる。友達もいっぱい作って、それで、困っている人がいたら率先して助けてあげられるような、優しい人にわたしもなりたいたい。なってみたい。

罪悪感はあるけれど、今の和泉さんならきつと許してくれるだろうという確信も自分の中であつた。「あれ」が割れた音を聞いたときとは大違いの明るい気分だ、わたしは外履きに履き替える。

そうだ、もうわたしが割ってしまったことはあの書き置きでばれてしまうのだし、せめて破片を掃除してから帰ろう。体調はすこぶる悪いけれど、そのくらいは頑張れるはずだ。一度校庭に行つて、危ないものを回収してからそのあと帰ろう。砂粒交じりの風にあたりながら校庭に出たわたしを出迎えてくれたのは、心地いい秋晴れと浅羽妖史くんの死体だった。

「は？」

死体。

「……死体？」

……は？

「待て、えっ、どうということ……？」

脳の処理が追いつかない。追いつかないながら、それでもそれは余白なく、解釈の余地を与えない綺麗で厳格な死体だった。

まずわたしの視界では全てがモノクロになり、それから、彩度の強いものから順に認識、再構成されていく。

まず、赤色。

これは、校庭に倒れている人の頭から流れている血の色だ。倒れている人は、骨格から男子だとわかる。

次に、黄色。

これは、校庭に倒れている人の髪の色だ。本当は金髪と言った方がいいのだけれど、色としちゃあれは黄色だろう。血が滲んではいるけれど、ところどころさらさらした部分が見える。それで、この学校で金髪の生徒は委員会の後輩である浅羽くん以外に見たことがないから、あれはほぼ間違いなく浅羽くんだ。

そしてくすんだ茶色。

授業で習った知識を活かせば、これは煎茶色というらしい。浅羽くんのすぐ隣に落ちている、わたしが割った陶器の破片だ。

最後、深緑色。

倒れている人の上履きの色であり、それは一年生が履くものだから、倒れている男子生徒が浅羽くんであることを決定的に裏づけていて——何秒かをかけてようやくその全てを認識した瞬間、他の余分な風景の色が一気に脳髓に飛び込んできて、わたしは、気を失いそうな目眩に襲われた。校庭の砂場、薄い灰色が、これ以上なくチカチカして見えた。誰かが使って放置されればなしのサッカーボールが、大きくなったり小さくなったりして見えた。数十秒——いや、

もしかしたら数分？ わたしはその場にしゃがみこみ、何とか地面に倒れこまないよう身をかがべていた。

やっぱり深刻に体調が悪いのかもしれない。

こんな、こんな幻覚を見るなんて——いやわたしも疲れている。疲れすぎなくらい疲れている。図書委員会の後輩で、髪の色が目立つからという理由だけで名前を記憶しているほとんど話したことす

らない浅羽くんの死体を幻覚するなんて、三日くらい、学校を休んでずっと寝ていた方がいい。こんなのは、こんなのはさすがに、デッドラインだろう——文字通り。

「おや残念ながらせんばい。これはしかし、幻覚とかの類ではないようですね」

と。

いつの間にかうずくまっていたわたしの後ろから、誰かの声があった。輪郭がなく、それでいて少し丸さと角ばりどが同居しているような——言うなればそれは、剥き甘栗のような声だった。可愛らしく、しかし実際後味はまだ苦味が残るような、何とも形容しがたいそれだった。

「……誰？」

わたしはその声の主を知らない。震えた声で尋ねつつ、しゃがんだまま後ろを振り向いた。見ればそこには、まさしく剥き甘栗のようなあどけない少年の姿があった。

「申し遅れました。お初にお目にかかりますぼくは、泉界せんかいつばさといひます」

恭しく会釈をしながら喋るその男子生徒の自己紹介は、しかしやけにシンプルだった。たとえば一節前に「ぼくは自分が誰かを尋ね

られた。だから答えた」とでも地の文が付記されていそうな、淀みや中身のない直線性、空洞性がある。ところどころ読点の付き方に違和感があることと、左手に持った手提げ鞆、右手に持った緑のハードカバー本一冊が、かろうじてわたしに彼の印象を残していた。それがなければ、わたしはこの男の子のことをすぐにでも忘れてしまおうというくらい、不定形で流動的な雰囲気だった――。

泉界つばさ。

ブレザーを着ずに長袖のカッターシャツを最外殻に構えている。

今日は暖かいので、この服装なら一般的には少し暑いくらいかもしれない。少し痩せ型に見えるが顔はふつくらしていて、馬鹿みたいに丁寧な喋り方とは裏腹に年相応、可愛らしかった。黒縁の眼鏡をかけており、かなり度が強いのか目が大きく見える。

「あ、ああ……。わたしは、神崎いつか、だよ。それで、えっと、何だっけ？」

「はい。もちろん、あそこでぼくのクラスメイトである浅羽妖史くんが死んでいる件について、です。神崎せんばい」

泉界くんは当たり前のよう――いや実際当たり前なのか――「閑話休題」を挿入した。

「……そうだ！ 浅羽くんが、死んでて……。いやでも、あれはただの幻覚で……？」

「いえですからあれは幻覚ではないのですよ神崎せんばい。何せ、このぼくにも、見えますからね。混乱しなくても大丈夫ですよ。あれは間違いない頭から血を流している浅羽妖史くんその人ですし、あの出血量ではまず間違いない死んでいる、でしょうね」

不可思議なところで台詞を区切る不定形のリズムとは裏腹に、言

葉の上では淡々と事実を並べる泉界くん。しかしそのアンバランスさのおかげで、当惑しているわたしにも少しづつ事態が呑み込めてきた――。

まず、校庭で後輩の浅羽くんが死んでいる。

次に、わたしの落とした陶器が浅羽くんの隣で割れている。

……あれ。

つまり、この状況って。

客観的にどう見ても、わたしが落とした陶器が当たって浅羽くんが死んだ、ということにならないか――？

「……っ、嘘!? 待って、泉界くんだっけ、悪いけどここにいっても報せるかな！ そんな……。わたし、すぐに職員室に行って先生に報告して――」

くるわけがない。

わたしが向かう先は、まずは二年三組の教室だ。

机の上に置いたあの書き置き――「ごめんなさい。和泉さんの陶器を落としてしまいました。二年三組、神崎いつか」――を、何より先に隠滅する必要がある。あれがわたしが落としたものだとばれれば絶対にいけない。だって、だって。

それがばれたら、わたしが殺したってわかつちやうじやないか。

わたしが落とした陶器が、頭に当たって、後輩の浅羽くんが死んじゃったんだって、みんなに、ばれちゃうじやないか。

いやだ。

怖い――それは、本当に怖い。いやだ、やだやだやだ。これから、友達いっぱい作って、和泉さんとも仲直りしよって思ってたのに、中学生生活これから始まりだっけって思ってたのに？ 思ってたのに、ま

さか。

人殺しを、しちゃうだなんて。

絶対にばれちゃだめだ。

「職員室。確かに職員室からは校庭の景色は見えませんがね……、多分先生方も気づいていないことでしょう」

わたしは、諦めない。そうだ、絶体絶命のピンチこそ本当のチャンスなんだって、中学受験前最後の過去問演習の点数が絶望的だったわたしに担任の先生が言っていたじゃないか。この事件だって、きつとそう見るべきなんだ。この凄惨な状態を乗りきったとき、わたしは最高の中学生生活を送れるだけの心の強さを持ち合わせている、そのはずなんだ。泉界つばさ？ 突如現れた、可愛い顔立ちの下級生——悪いけど、興味が無い。というか今は気を向けている時間と余裕が皆無だ。今のわたしが真っ先にすべきことは、だから——まずは急いで二年三組に！

「お言葉ですが神崎せんばい。教室に、行く必要はありませんよ？」

泉界つばさ。

それは、泉界つばさの台詞だった。

「……え？」

震えを抑えて既に数歩踏み出してたわたしは、困惑して足を止める。そこにたっぷり数個の間を置いて、泉界くんは喋りを続けた。

「書き置きはぼくが回収してきましたから。だから、二年三組の教室に行く必要はありません。そう言ったのです」

そう言いながら、泉界くんはポケットからわたしの書き置きを出して見せた。確かにそれは、二年三組のあの机に置いてきたわたしの書き置きだった——何で？

「何で、それを、あなたが？」

「いや見ちゃったんですよ。神崎せんばい。あなたが、陶器を窓から落とすところを。それで、陶器をわざとわざと故意に落としかかと思えば、うずくまって呻き声をあげて、そうしたら何か書き置きを残して晴れやかな顔で教室を出ていったものですか。目撃者としては、何が何だかわからなくて、とりあえずそのメモを回収してしまうでしょう」

さも当たり前のことを言っているかのように、泉界つばさは述べ立てた。

なるほど。

とりあえずそのメモを回収してしまう——かどうかはわからなかったが、とにかく泉界くんがああ行為を目撃してしまったということはわかった。

わかった、けれど……。

「待つてください神崎せんばい。とりあえず、場所を移しませんか？ 気になることも多いでしょう。浅羽くんは放っておいても大丈夫です、どうせ死んでいますので。警察なりに通報するとしても、その第一判断は大人に任せられた方がいいし、第一発見者はぼくや神崎せんばいではない方がいいです」

「死んでるって——！ そんな、勝手に」

「死んでますよ、あれは絶対。ぼくが保証します」

そんな、まるでふざけた台詞は意図が読めず、とりあえず読み取れたことは、わたしを今すぐ警察や教師陣の元に突き出すつもりはなさそうということだけだった。

しかし……、確かに、場所を移した方がいい。この泉界つばさと

いう後輩少年が何を考えているのかは全く理解できないけれど、ずっとここに――校庭に居るのは得策ではない。わたしが犯人だと思えないためには、「怪しい」場所に居るのは極力避けるべきだ。

「……でも、場所を移すってどこに？」

「そうですねえ」

間延びした口調で考えた振りをしたあと、泉界くんは言った。

「一年二組はどうですか？　ちようど今、誰もいなくなりましたから――」

「誰もいなくなつた」とはもちろんアガサ・クリステイをリスベクトトした小粋なレトリックではなくて、「クラスメイトの浅羽くんがちようどさつき死んだので教室にいたばく以外誰もいなくなつた」という泉界くん視点の単純な事実だった。

なるほど忘れていたが、今日は一年生は校外学習の日だ。人数の多い一年生は一階と二階に教室が分かれているのだけれど――そして泉界くんと浅羽くんが籍を置く一年二組は一階にあるのだけれど――今日はその全てがほぼがら空きだった。ちなみに、二年生が三階、三年生が四階をそれぞれ司っている。

ただ、校外学習に参加しない生徒が学年で二人だけいた。それが泉界くんと浅羽くんというわけである。浅羽くんは「頭髪が不適当だから」という理由で、泉界くんは「家庭の事情です」ということらしかった。

ちなみに浅羽くんの金髪は普通に校則違反である。頭髪以外は特に悪いところもない、というか図書委員会に所属して精力的に活動

しているような真面目でいい子だったので普段は見逃されていたのだけれど、校外学習となるとさすがにダメらしかった。そんなわけでも、一応定義上は授業日だから、校外学習に行かない二人は教室で形ばかりの自習をしていたらしい。本当に形ばかりなので、先生は職員室にいて泉界くんたちは五教科の問題プリントをやらされていたようである。

……というか、浅羽くんってどんだけ金髪に魂かけてたんだ？

「えーと。それで、自習プリントを職員室に持つていこうと廊下を歩いていたら、わたしが陶器を落としているところを目撃した……つてことでいいんだよね？」

「はい、その通りです」

がら空きの一年二組。教室の脇には気早くも二期のクラス目標を書こうとしているらしい薄灰色の模造紙があり、そのすぐそばの机には画紙の箱が開きっぱなしで放置されていた。それ以外に一眼して二年三組と違うところは、教壇近くの棚の中に生徒が遊ぶためのボールが入った箱があるということくらい。教室に置いておく危険という理由なのか、球技の王様とも言わべきサッカーボールだけは見当たらなかった。それでいいと思う。

わたしたちは二人で、誰かの机に寄りかかって話し合いを始めていた。死体を発見してからまだ五分も経っていないけれど、既にわたしはわたしが陶器を落とすまでの始終を語り終えている。

泉界くんはなぜかずと本を読んでいるけれど、一応、今のところコミュニケーションに齟齬は出ていない。

こんな大事な場面で読書をされるのは図書委員のわたしといえどさすがに苛ついたが、わたしは元よりこの子に逆らえる立場ではな

いのである——だって、この泉界つばさという生徒は今のところ唯一の「目撃者」なのだから。——いや。

「そこが何だか引つかかるんだよね……。だってさ、職員室は三階だから行く途中で三組の前を通りすぎる、っていうのは確かにわかるよ。けど、普通上級生のクラスを覗き見なんてするかな？」

「そりゃあ思春期ですからね。女子生徒の体育着が散乱している教室があったらうっかり見るくらいするでしょう」

「……………」

「冗談です、さすがに。今のマジに受け取られちゃったらぼくだってへこみますからね。それはぼくだって心外というものです」

よかった。目の前の変な後輩に対してマジに失望してしまうところだった。

「ぼくが気の向いたのは、『音』です」

「……………音？」

泉界くんは「はい」と答え、手振りを交えて論理的な説明を開始した。

「先程神崎せんばいには『陶器を落とすところを見た』と言いましたが、あれは正確ではありません。ただ、廊下を歩いていたら外でパリンという破壊音が聞こえたので、ぼくは驚いて校庭を見ようとしたのです。しかし場所は廊下。校庭を見るには他クラスの教室の窓から外を覗くしかありません。というわけでたまたま見た教室、二年三組にはなぜか神崎せんばい一人だけがいいます。しかもなぜか突然うずくまって呻き声をあげていたので、ぼくは隠れてそれを見守ってから教室に入り、書き置きの内容を確認したんです。状況を理解したのはそこででした。そのあと外を見たら何か浅羽くん

が死んでたので、とりあえず書き置きをその場から持ち去ってきた

——以上が、件の時刻におけるぼくの行動の一部始終です。先程の説明は、話すとき長くなるから脚色を交えつつ端折っただけです」

「……………うーん、なるほど」

ふむ。順序立って説明されると、確かにおかしいところはないみたいだ。

もちろん、好奇心で女子生徒の着替えが行われた場所にあっさり入ったり、クラスメイトの死をさっぱり受け流してしまっている倫理観は簡単に受け入れられるものではないけれど、少なくとも話の筋は通っているようである。

陶器が割れる音に驚いて外を見ようとしたら、不審な行動（確かに不審）をしている生徒（わたし）を発見。何があったのか確かめるため、教室に入り、そして書き置きを見た。なるほど、倫理は節穴だらけでも、論理には穴がない。話をスムーズにするためなら遠慮なく話を端折るという点には、ある程度不信感を抱いた方がよさそうだけれど。

「……………いや、でもどうして書き置きを持ち去ってきたの？ わたしとしては助かるけどさ……。そんなことしたら、もしものときに泉界くんが怪しまれるだけだよ」

「だって、もしかしたら神崎せんばいがやったんじゃないかもしれないじゃないですか？」

わたしが質問すると、泉界くんはまた当たり前のように答えた。意外な答えだった。

「いいですか、神崎せんばい。あの書き置きは、いわば『決定的な証拠』なんです。あれが見つかったら、この事件は神崎せんばいが

犯人つてことで終わっちゃうんですよ」

「うん、それはわたしもわかってるよ。だから、その書き置きは誰にも見られたくない」

「はい。まあぼくは見ましたけどね。それで、モロに神崎せんばいの丸文字で書かれたこれが公になったら、神崎せんばいはゲームオーバーってことなんですけれど——それって、嫌じゃないですか？」

「……嫌？」

「はい。だって、他の誰かがやったかもしれないじゃないですか」
真顔で平然と、泉界くんはさっきの言葉を別の表現で言い換え、

リピート再生した。

「……いや、いやいやいや。何言ってるの、今更それは覆らないでしょう。わたしが陶器を落としてから泉界くんが外で死んでいる浅羽くんを見つける——その、せいぜい数十秒のタイムラグの間に人は殺せない。そもそも、泉界くんはわたしが殺したって思ったから書き置きを回収したんじゃないの？」

「いえ、それが間違いなんです。正しくは、タイムラグは数十秒じゃない——数分だったんです」

泉界くんは「待つてください」とでも言うように左手をかざし、シンプルに語り始めた。

「突然なんですけどぼくはとてつもなく目が悪いんです——特に左目がすこぶる悪い。でもこの視力の悪さって意外と使いようで、集中したいときには便利なんです。あくまで個人の意見ですけどね？たとえば本を読むとき。ぼくは読書が趣味で、今もそうしている通り四六時中本を読んでいるんですが、眼鏡をつけていない今はピンと合わせた範囲十文字程度しか鮮明には見えません。だから先の

展開が読めなくて、おもしろいんです。もちろん神崎せんばいの顔も今はわかりませんよ」

あざとく本の頁をめくりながら、泉界くんはそんな話をした——
そういえば、確かに校庭でつけていた眼鏡をいつの間にか外している。相手が強かったようだから、多分、この話は本当だろう。

「破壊音が聞こえたときも、実のところ教室には人影くらいしか見えませんでしたよ。で、そのあと中に入って——書き置きは何かか眼鏡なしでも読めたんですけれどね。その状態じゃ、さすがに三階から地面のものを見るのは難しかったです。浅羽くんの死体って、ただでさえ窓から身を乗り出さないと見えにくい位置にありましたしね。あれじゃあ授業を受けている人たちはまず気づかないし、距離的に裸眼のぼくだって見えっこない。だから書き置きを見たばくは、一応窓の外を確認しようとお鞆の中から眼鏡ケースを探したのですが、これに案外手間取ってしまいました。何せぼくの鞆には本が大量に入っていますから——ものがたくさんあって探すのに苦戦します。そういうわけで、ぼくが眼鏡を見つけて外の死体を認識するまでには数分間のタイムラグがあったんです」

「う、うーん……」

何だか都合のいい話だ——と思ったけれど、「実際そうなのだから仕方ない」と言われればぎりぎり納得できる範囲の都合のよさだった。わたしも割と目が悪いのに裸眼で乗り切っているタイプだから、全く理解できない話というわけでもない。

それに、わたしはこの話にまるっきりの反対意見を唱えられる立場じゃない。それは「これに反対すればわたしが殺したと認めることになってしまう」というロジカルな面でもそうだが——わたしに

は、もう一つこの意見を支持しなければならぬ理由、根拠があった。

それは、わたしはあの陶器を落とす前に、校庭に誰もいないことをちゃんと確認しているという点だ。

わたしはあのとき臆病になって、陶器を手から離れた段階で振り向いてしまったけれど——つまりそれからは見ていないのだけれど——それでもやっぱり。それこそあの数秒のタイムラグの間に死角から人が出てきて、わたしの落とした陶器が頭に当たって即死するなんて思いにくい。

もつとも、こんなのはわたしの確認不足だと言われればそれまでだから、根拠と呼ぶにはあまりにも脆弱なのだけれど——それでも、一時的にでもわたし自身を納得させるには十分な事柄だった。

「まあ客観的に見て、どんなに少なく見積もっても五十パーセント以上は神崎せんばいの犯行だと思われませんが——とはいえぼくは検証が必要だと思いました。だから書き置きを持ち去って一旦、事態を停滞させることにしたんです。もしぼくが神崎せんばいが犯人だと確信したら、二年の学年主任の先生にでも渡してやればいいだけです」

「……すごいことするね」

「そうですかね？」

とぼけてみせるが、しかし泉界くんは次の瞬間に本の頁をめくっていた。どうやら本人にとっては本当に何でもないことらしい。

よく見ると、さっきの緑色のハードカバーの本は机の上に置かれていて、もう別の本を読み始めていた。いつの間に持ち替えたんだ？眼鏡の件といい、動作の境目が異常なほど希薄な子だった。

「とはいえ時間はありませんよ。三時間目はあと二十分弱で終わりますから——さすがに休み時間になれば死体も見つかるとでしょう。

そうなれば、補習を受けているぼくは別にしても、早退しているはずの神崎せんばいは一旦トングズラしなければなりません。のちの連絡はメールか何かで取り合うとしても、とりあえずぼくらが対面でこの件を考察できるのはせいぜいあと十五分程度といったところでしょう」

「十五分。……相当シビアだね」

「仕方ありません。元々が絶体絶命ですからね——一階と二階はがら空き、死体は窓から顔を出して覗きこまなければ見えない位置にあるとなれば、目撃者はぼく以外にいないと見てもよさそうですが。とはいえいつ誰が死体に気づいたっておかしくありません。神崎せんばいはまずここで頑張っておくか、ぼくに『とりあえず今日のところは見逃しておくか』と思われるように努力しなければならぬわけですよ」

「あの、もしかして脅迫してる？」

「はい」

珍しく本から目を離してこつちを見た泉界くんは、シンプルな笑顔でシンプルな答えを言った。

やっぱりこの子、怖い。

怖いけれど——いや、ここで頑張らなければわたしは殺人犯としての烙印を押されてしまうのだ。ここはやっぱり、目撃者が泉界くんではなかったと見るべきだろう。だって、泉界くん以外に目撃されていたら、即刻先生にチクられて終わっていたんだ（「チクる」、という言葉はあまり好きではないけれど）。

よし、ピンチはチャンス。

さすがに十五分で真相まで辿り着くのは無理だとしても、足がかりくらいは何とか見つけよう。そうすれば、泉界くんの与える猶予も、まともな考察をできるだけの尺に延びるはずである。きつとそ
うだ。

「はい。安心してください神崎せんばい——ぼくはべつに神崎せんばいをさつさと、然るべきところに突き出しちまえてモチベーションは持っていませんから。もちろん推理に協力しますよ」
頁をめくりながら泉界くんは言う。不安と不信感は正直拭いきれなかつたけれど、少しくらいは安心できる言葉だった。

「うん！ ありがとう。……じゃあ、そろそろ本を読むのもやめて、一緒に考えてくれる？」

「え？ 嫌ですけど」

即答された。

「えっ？ え、えつと……、協力してくれるんじゃないの？」

「協力はしますよ。でも本は読み続けます。というかぼく、本読ん
でないと落ち着かないんですよ。ほら、ずつと下向いてるから、顔
にものが当たる心配もありますし。ぼく、怪我するなら顔よりは
頭がいいんです」

わたしへの嫌味？ と喉まで出かかったが——ぎりぎり踏みとど
まった。危ねえ。

「それに、本を読んでいると意外な発見があったりしますからね。
たとえばさつき読んでいた犯罪学の本では『他人に罪を着せようと
するとき、犯人はそれと同じだけの嫌疑が自分にかかるのを覚悟す
る必要がある』って書いてありました」

「ふうん。ちなみに、今は何の本を読んでいるの？」

『好きな人と両思いになる方法BEST10！ コレさえ読めばア
ナタも恋愛マスター』です」

「——くたばれ！」

いけない、堪えられなかった。

「もう一回全部読んでるんですけど、この本にも意外な発見があ
りましたよ。たとえばここ。十四頁下段七行目。『好きな人と秘密を
共有すると両思いになる確率アップ！』とあります」

「うん、わかつたから。わかつたから、その本閉じよう」

中学にあがつてから、今が一番ハイテンポで話しているかもしれ
ない。そのくらい感情優位で喋っている。だって、残り時間はあと
十五分もないんだ——それまでに事件の足がかりを見つけないけれ
ばいけないというのに、この、この後輩は……。

「すみません、ふざけすぎました。でも、本を読んでいないと落ち
着かないっていうのは本当なんです。そうしてないと、何だか怖く
って……。校庭にいたときも、あれで結構取り乱していたんですよ。

この本を読んでいるのも、一度読んだ本だから比較的思考にリソー
スを割けるついでなので選んでいるだけなんです」

「んん……、そこまで言うなら仕方ない、のかな」

「はい。いくら神崎せんばいといえども、こればかりは折れませ
ん」

不遜な態度は今までと変わらなかったが、それは何となく「意
地」のようなものを感じさせる変な台詞だった——もつとも、「い
くら神崎せんばいといえども」という部分に違和感はあるけれど。
わたしときみの間に何があるとゆうんだ？ あつたとしても覚えて

ないよ、悪いけど。

「さ。時間もありません。事件について考えましよう」

相変わらず本に視線を落としたまま、泉界くんは切り出した。

「まず最初に神崎せんばいに心当たりがあるかは、聞いておきたいですね」

残り時間は十三分。

泉界くんは今までと特に変わらない平坦な口調で話を——推理のための情報交換を始めた。

怒涛の展開でお忘れかもしれないが、わたしはすこぶる体調が悪い。熱っぽい脳みそを何とか稼働させるから、この先の言動に矛盾があってもある程度までは大目に見てあげてほしい。

「いや、浅羽くんとはほとんど接点ないから……。同じ委員会に入ってたってくらいかな」

「同じ委員会——図書委員会ですかね？」

「うん。けどそれ以外は本当にないな、ほとんど喋ったこともないし。だから、浅羽くんがもし誰かに恨まれていたとしても、そういう情報はわたしの知り得る範囲にはないね。泉界くんはないの？」

浅羽くんに関して「

「ぼくは、最近借りものをしたくらいですかね。浅羽くんってキャンプが好きみたいで、ぼくは夏休みにクローラーボックスを借りていました。中々返す機会がなかったので今日持ってきたんですけど、まさかこんなことになってしまうとは思いませんでしたねえ……」

ちなみに、そこまで喋ったりする仲でもありませんでした。周辺の

情報も特に知りません」

「そっか……。」

異常なほど軽い泉界くんの言葉で、わたしも何だか浅羽くんのことを——浅羽くんの死を、受け入れてきてしまっているような気がした。本当は、わたしにだけはそんな資格ないのだけれど。

わたしたち以外誰もいない校舎の一階は、突き刺すような静寂に包まれていた。こんなことになるなら、体育の授業に出てぶっ倒れていた方が幾ばくかマシだったろうか？ 泉界くんの言ったクローラーボックスは、確かに教室の後方ドア近くに置かれていた。

「いえ——というかそうじゃなくてですね。ぼくが気になっているのは、この状況そのものなんですよ」

はばかりながら本題を、とでも言いそうな調子で泉界くんは語った。

「この状況そのもの、って？」

「だってそもそも浅羽くんが外に出たこと、自体が謎ですよ。まあ、確かに浅羽くんは自習の息抜きにいきなり外に出るくらいの行動力はある人でしたけれど——とはいえやっぱり不自然です。加えて、ちょうどそのときに神崎せんばいが陶器を落としたっていうのも変ですよ。話を聞いた限り神崎せんばいは保健室に、いたんですよ？ それでたまたま早退を決めたタイミングで、たまたま机の上にあった陶器を落としたら、たまたまその下に校外学習を自粛させられて自習していた一年生がいた。都合がよすぎませんか？ ——いえ、都合が、悪すぎませんか？」

「……うーん」

まあ、わからない話ではない。

というか確かに、そういう風に恣意的に見たくなってしまう気持ちはわかる——言う通り、この状況はわたしにとつて異常なほど都合が悪いのだ。一回の体調不良から、全てが連携するかのようによく悪の形で回転している。

体調不良はさすがに仕組まれた可能性はゼロであれ——あつてほしい——わたしは元々体の弱い方だ。「いつかは体調不良を起こす」という事前知識に基づいた確信さえあれば、この最悪のサイクルのうち何パーセントかは、わたしが保健室で寝ていた一時間のうちに仕組んでおくことが可能だろう。

事件を起こす方向に持つていけなくても、事件が起きやすい方向に持つていくことは可能、か。

でも、それだとやっぱりわたしが落とした陶器で浅羽くんが死んじゃったことにならないか？ ……いや、違うな。

わたしに容疑がかかるような状況にさえなれば、あとは真犯人が殺せばいいだけの話だ。犯人が浅羽くんを殺したのが、わたしが陶器を落としてから泉界くんが死体を確認するまでの「数分間のタイムラグ」の間だと仮定すれば、犯人は陶器が落ちたのを確認してからその近くで浅羽くんを殺せばいい。陶器が落とされなければ、そのときは殺さなければいいというだけである。硬くて重い落下物で頭を打つのと同等の即死攻撃だから、声も出せぬ間に死ぬ。

「フーダニットと言いますか。ああ『誰がやったか』って意味ですけど——神崎せんばい陶器を落とすことを予測できるような人物はいないんですかね？ いや失礼な話をして、すみません」

わたしが陶器を落とすことを予測できるような人物。
つまりそれは。

わたしが高いところからものを落とすのが好きなことを知っている——小学五年生までのわたしを、かなり深いところまで知り得ている人物というふうに変換できた。

「……うまく言えないんだけど、二人だけいるよ。心当たり」

一人は、和泉美海。件の陶器の持ち主であり、小学生時代にわたしをいじめていた主犯格。

もう一人は——鈴森始すずもりはじめという人物。小学生時代、三年生から六年生までわたしと同じクラスだった。

例によって関わりは少なかったけれど、特にわたしをいじめることもない。六年生のときには図書委員会でご一緒し（わたしは小中ともにほぼ毎年図書委員会に入っている）、そこで一つ下に同じ名字の子がいたため、呼びづらかったのが印象に残っている。逆に言えばそれくらいで、せっかく同じ中学にあがったのに今一つ印象の薄い相手だ。

一応好青年で、在籍する二年六組では目立たないながらにそれなりに楽しくやっているようである。

「ふむ。鈴森せんばい、ですか……」

泉界くんは、意味深そうにその名前を反芻した。

「いや、でも鈴森くんはないと思う……。わたしのことなんてほとんど覚えてないだろうし。無理やりにも怪しむなら、陶器の持ち主である和泉さんの方じゃないのかな」

「いや、ぼく視点ではそれはありえないですよね」

わたしの意見をばつさり切って、本の活字から一切視線を逸らさないままに話す。

「だって、ぼくは三時間目が始まったあとで、図工室に忍び込んだ人

物が男だつたのを知っていますから。」

「——えっ？」

今、何て言った。

三時間目が始まったあとで——図工室に忍び込んだ？

「ちよ、ちよつと待つて。そんな人がいたの？」

「はい、実はそうなんです」

「実はそうなんです——じゃないよ！ 何で今まで教えてくれなかった……」

「落ち着いてください。この話に持ち込まないと、つまり『この状況が仕組まれたものである』という可能性を認識しないと、図工室に忍び込んだ人物がいるなんて言ったところで何の意味もないでしょう」

「う……」

確かに、そうだった。

正直な話、わたしは頭が悪い。というか、頭が固い。そんな情報を出されたところで、「その人物が陶器を盗んでわたしの机の上に着用して、わたしに落とさせるよう仕向けた」なんて可能性に思い当たる可能性はほぼないと言つていいだろう……、残念ながら。

ちなみに、図工室は一階にある。男子トイレにでも行けば、通りがけにそれまでの道を一時見張ることは可能だろう。わたしは授業スケジュールまでよく把握してはいないのだけれど、「侵入者がいた」という情報を鑑みるに、三時間目は図工の授業はなかったものと思われる。余談だが、立地の関係上、図工室からは校庭の景色は見えない。一階にある特別教室は図工室だけだから、わたしは美術の時間が好きじゃなかった（教室移動が面倒だから）。

「というか、和泉さんが犯人じゃないっていう根拠は他にもあるんですよ。もし彼女が犯人だったとしたら、体育の授業に出席するのはさすがに不自然じゃないですか？」

「……あつ」

それも、そうだ。

学生にはわかってもらえると思うが、体育の授業はその性質上「途中で授業を抜ける」ということが非常にやりづらい。理由はいくつかあるが、最も大きなものの一つは「保健委員に保健室まで付き添われることがあるから」だ。

三時間目の開始時刻は十時十分、終了時刻は十一時ジャスト。そして、わたしが陶器を落としたのは、十時四十分の少し前。図工室の侵入者の件は一旦置いておくと——陶器のセット自体は着替えのときにやっておけるとはいえ、どう考えても一番陶器の落ちたタイミングを予測しづらいであろう体育館に行くメリットがあるとは思えない。体育館の窓からは校庭も見えないし、球技が行われているから外部の音もほぼ聞こえない。

授業に出席してすぐに抜けるという方法もあるが、保健室にいたわたしが和泉さんを見ていない以上それはありえないのである。

だって——うちの学校は体育の時間中に離脱するとき、必ず保健委員が付き添うことになっているのだから。

付き添いがある以上、保健室以外の場所に行つて身を隠すことは完全に不可能だ——共犯ならあるいは？ いや、「神崎いつかが陶器を落とせば殺す、落とさなければ殺さない」なんて投げやりな計画に協力者がいるとはとても思えない。

「まあ、和泉さんが初めから体育の授業に出席していなかったとい

う可能性もありますけれどね。ただその場合陶器を置いていくのが不自然になります。体調が悪いからと言って授業を休むのなら、陶器はそのまま保健室に持っていか自分の教室——二年四組です——に置いておくかするのが自然です。体育の授業を休む着替えの必要ない人間にとって、他クラスである二年三組に用は、一つもありませんか。和泉さんが犯人だと仮定すると、どうしても事件の鍵であるギミックに不自然さが残ってしまう。よって逆説的に和泉さんは犯人ではない、と考えられるわけです」

「なるほど……、確かにそうかも」

「……じゃあ、どういうことだ？」

「これは『陶器のセットは仕組まれたものだった』と仮定した場合の話になりますけれど——和泉さんは図工室に陶器を忘れていったのではないですか？」

「それで、例の『図工室に忍び込んだ男』が和泉さんの陶器を盗んで、三時間目の途中でわたしの席に置いたと」

「はい。もし神崎せんばいが教室に戻らなかったり陶器を落とさなかったりしても、和泉さんしたら『誰かが忘れものを届けてくれた』くらいに思うでしょうね。つまり神崎せんばいが陶器を落とすようなルートに入らなければ、そもそも犯行を起こさなければいい。犯人にしたら脇の棚にでも並べられている他クラスの人の陶器を取ってもよかったですでしょうが、たまたま忘れものがあつたのでそちらの方が便利だった。凶器に都合のいい大きさと重さでしたしね」

……つまり、この仮定では「図工室の侵入者」が真犯人で、「わたしの机に置かれていた陶器が和泉さんのものだった」までは偶然、「わたしが落とすことを予測して、罪を着せられるように犯人が陶

器をセットした」から故意ということになる。

不自然な点は、今のところないような気がする。

「そうだね。泉界くんが見たって言うその男は、多分授業が始まってすぐに、保健室に行くって言って抜けたんだと思う。けど実際は保健室に行かないで、まずは図工室から陶器を盗んでわたしの机の上に配置。そのあと、すぐ校庭に出られる場所に行って浅羽くんを待ち構える。それで陶器が落ちたのを確認し次第、浅羽くんを撲殺して、あとは早退するなり授業に戻るなりすればいい……！」

おお！ 何だか辻褃が合い始めてきた……！

よかった、わたし、やつぱり浅羽くんを殺してなんかいないんだ！ 本当によかった……。ここに来て、わたし、だんだん自分を信じられるようになってきた。

時間はあと七分くらいしか残ってないけれど、何だったらこのま
ま真相まで……！

「いやこのままだとまだ全然ダメですね」

本の頁から少しだけ視線を上げて、泉界くんはわたしの希望をべ
きりとへし折った。

「何でそういうこと言うのっ！ せっかく、誰がやったかが見えてきたのに……！」

「あのですね神崎せんばい。あまり調子に乗らない方がよくて、『図工室の侵入者』と神崎せんばいを比べたら神崎せんばいの方がまだ全然怪しいんですからね。どうやっただって少なくとも五十パーセント以上は、神崎せんばいが陶器を落として、ぼくが死体を確認する。その『数分間のタイムラグ』の間に死体を出現させるトリックを暴くことができなければ、神崎せんばいはずっと限りなく黒に、近い

グレーのままです」

「そ、それは……」

認めたくないけれど、その通りだった。

そもそも論になってしまいうけれど、常識的に考えたら数分間のうちに人を殺すなんてことができるはずなのだ——いやできないは全然ないんだろけれど、でも、それを計画に盛り込むなんて無茶を一介の中学生がするだろうか？ わたしだったら絶対にしない。

そんなことは、できない。

「まあ最悪数分のうち云々は犯人の度胸にもよりますから、一旦は置いておいてもいいのですが——しかし、凶器が『ない』という点はどう説明したらいいでしょう？」

「……凶器が、ない」

そうか。

凶器がわたしの落とした陶器ではないと仮定した場合、当然、犯行には「別の凶器」が必要となるのだ。それも、三階からセラミックを落としたのと同じだけのダメージを確実に与えられるような凶器が。

……そんなもの、あるのか？

いや、仮にあったとして、だ。

「……そんなの、あと五分でわかるわけないじゃん！」

時刻は十時五十二分。三時間目が終わるのは十一時。本来であれば、もう下校していなければまずいくらいの時間帯だ。

「だとしても、考えてみるのが重要ですよ。ほら、もしかしたら意外な発見があるかもしれません」

煽り立てるような泉界くんの口調。ここまで来るとさすがに腹が

立ったが、しかし、忘れてはならない。

わたしは、この少年の機嫌を損ねた時点で、つまりあの「書き置き」が公にされた時点で全ての人権を喪失する——それが真実であれ濡れ衣であれ。少なくとも今のわたしには、泉界つばさに逆らうという選択肢は万に一つもないのだ。

だから、考えるしかない。

考えるんだ。熱っぽい頭でも、ふらふらしてても頑張つて考える。

今は何の話だ？ そうだ、「消えた凶器」の話だ。

まず、三階からものを落としたのと同じだけの——というか、同じような衝撃を与えるにはどうすればいいだろうか？

一番手っ取り早いのは、やつぱり同じく「高いところからものを落とす」だ。馬鹿なわたしにはそれくらいしか思い当たらないが、しかし案外、的を射ているのではなからうか。バットで殴ろうとどうしようも、平行線からの攻撃ではやつぱり「真上からの衝撃」を再現するのは難しいと思う。

そして、消える凶器。消える凶器と言っても、完全になくなる必要はない。要は、見えなくなればいいのだ。

つまり、校庭に紛ればいい——。

そして、紛れさせるためにはどうすればいい？

あのとき一見して校庭にあったものは——浅羽くんの死体。それから、上履きと……、サッカーボール！ ……いやダメだ、サッカーボールでは少し軽すぎる。

もっと考えるんだ。二年三組、三階から見下ろしたときは校庭には何があった？ 何もない——せいぜいつむじ風があった程度だ。

そうだ、校庭に出たときも、砂の交じった風が痛くて——。

「――砂？」

あれ。

砂――もしかして、これならいけるんじゃないか？

わたしは一つの可能性に辿り着き、それを、閃いたままに口にした。

「……聞きましよう」

泉界くんはようやく本を閉じた。今ここからは、ちゃんと身を入れてわたしの話を聞いてくれるらしい。

わたしは覚悟を決めて、わたしの考えた一つの結論を語り出す。

「わかったかもしれない――犯人が砂を凶器にしたって考えたら辻褃が合うよ。犯行時刻は『数分間のタイムラグ』の間。窓からの景色でわたしが陶器を落としたのを確認したら、隣の四組から砂のどつさり入った袋を落として浅羽くんに当てればいいんだ。犯行現場は校庭じゃなくて、隣の四組だった――そう仮定すれば話が見える！砂だから、落ちたときの音も陶器より小さくて気づかれにくいし、落ちたら校庭に弾けてわからなくなる――凶器を、消せる！」

何だか言っているうちに熱がこもってきてしまつて、だんだん早口になっていった。けれど――実際、完璧なんじゃないか？「砂」

って言った瞬間に泉界くんの真剣度もかなり上がったような気がするし。これは、間違いなく正解なのでは――！

「惜しいですねー。完全に間違っていることを除けばほぼ正解です」

瞬間、わたしの希望は、何かの引用みたいな台詞でまたも平坦に切り捨てられた。

「え……」

「まず、砂を詰めた袋を当てたところで傷口は陶器と同じにならないでしょう。死にはするかもしれませんがあんなに、血は出ないと思います。内出血の類になりますかね？それに、砂を入れた袋と言ったって袋の方は、どうしたって残ってしまうでしょう。それが見つかってしまう以上は『消える凶器』とは呼べないはず――最後に、極めつけとして。ぼくはイレギュラーだったとしても、神崎せんばいが、いる隣の教室で犯行を行う大胆不敵な犯人像は、今までの推理からは読み取れないはずですよ」

「じゃ――じゃあ！」

意地になって、わたしは反論を始める。

ただ、悔しくて。

自分の希望が、こうもあつざりと打ち砕かれたこと――論破されてしまったことが、悔しくなつて。

「氷だよ！犯人は氷を使ったの。九月だからまだ暖かいし、氷は溶けていくはず。陶器と同一ような形の氷を高いところから落とせば、凶器は消える――」

「いえ、それも無理ですね」

ソレもムリデスね。

「だって、人を一人殺すのにどのくらいのおおきな氷が要りますか？いや、まあ思うよりは要求サイズは小さいかもしれませんが。そう大きくないはずのつららに殺された人だつてたくさんいます。ただ、やっぱりそれにしつたってある程度のおおきさは必要です。それは果たして『数分間のタイムラグ』で溶けてなくなる、ようなサイズでしょうか？」

その通りだった。

わたしの思いつきは——ことごとく。造作もなく、全否定されてしまった。

思えばこの時間、わたしは一人で話を進められたことがあっただろうか？ 全部、「その通り」とか「確かにそうだ」で受け流してばかりだ。

わたしは——そっか。

だからダメなんだ。自分の頭じゃ何も思いつかないくせに、一人で頑張ってる気になって盛り上がって——無駄にプライドが高いから、人のこと見てないくせに人に見てほしいって思いが強いから、友達もできないんだ。

わたしは、なんてダメな人間なんだろう？

「さて。それでは、ぼくは——」

泉界くんはわたしの近くにやってきて、次に、驚くような言葉を放つ。

「ぼくは、神崎せんばいの例の『書き置き』を先生方に見せてきますね——」

えっ？

「ちょ——ちよつと待って!? な、何で……、まだ待ってよ！ 『凶工室の侵入者』とか鈴森くんのこととか、足がかりは色々見つかったじゃん！」

わたしは気づけば必死で抵抗していた。

殺人犯になるのが、怖くて。

「それはそうなんですけれど。でも、ここで打ち止めじゃないですか？ 『数分間のタイムラグ』の間に浅羽くんを殺すのは、どう考えたって不可能です。仮に可能だとしても、そんな正確性の低い行

為は『神崎せんばいに陶器を落とさせた』という計画性とどうしても矛盾します。凶工室の侵入者は、きつと忘れものでも取りに来たんですよ」

「そんな、無茶苦茶な……」

「——客観的に見て存在するかも怪しい真犯人の存在を主張し続ける方が、無茶苦茶です」

その一言が、トドメだったと思う。

わたしはすっかり自信をなくして、悲しくなつて。力なく地面にへたりこんでいた。泉界くんを止める気力は最早どこにもなくて、ただ、多分辛そうな顔をしていた。ちなみに、タイムリミット——比較的安全に校内を出られるだろう十時五十七分までは、あと三分しかない。

きつと、わたしがやったのだろう。

浅羽くんは、わたしが殺した。

くだらないプライドでわれを見失い、つい魔が差した結果がこれだ。あらゆる出来事がわたしにとつて都合悪く作用しているのは、愚か者に対する天罰だと考えれば矛盾がない。それか、わたしが元来そういう星の下に生まれた人間であるかのどちらかだ。

冷静になってみれば、氷なんていかにも馬鹿らしいアイデアじゃないか。

氷が溶けたから凶器が消えましたなんていうのは、使い古された原始的なトリックだ——たとえサイズ感がどうだったところで、氷は数分では溶けない。一、二時間もあれば話はまだ違ったかもしれないけれど、数分では絶対に無理だ。

それに、氷なんてどこでどうやって手にいれる？ 始業時間から

うやく変わることができるとだ。だから、わたしもそうする必要がある——そこに行く必要がある。わたしの心は既に、人として一歩成長したような感覚を掴みかけていた。

だから、最低なことだつて、自ら勇んで言おう。

「浅羽・くんを殺した犯人つて、泉界・くんじゃやない？」

どうせ言ったつて言わなくなつて終わりなら——わたしはここで、言つて後悔する方を選んだ。

泉界くんはそれを聞き届けて、少しの微笑とともに、また、当たり前のように答えてくれた。

意外な答えだった。

「——そうですね」

今、こいつは何て言つた？

——「そうですね」？

ええとわたしは、何て聞いたんだっけ。

——「浅羽くんを殺した犯人つて、泉界くんじゃやない？」と、確かそう聞いたんだよな。

えっと、じゃあ。つまり、浅羽くんを殺した犯人は、泉界つばさくんだつてことか？

「はい。そうですね。浅羽妖史くんを殺したのはこのぼくです」

淡々と、よくわからないところで言葉を区切つて。

吸つた分の息が切れたから次の言葉を言うために息継ぎをしているだけでも言わんばかりの雑さで読点を挿入し、泉界つばさは、

「このぼくがクラスメイトの浅羽妖史くんを殺害しました」と、今

確かにそう言つた。

「えっ……、待つて、ねえ、どういう、こと？」

「どういうことも何も神崎せんばいと言つたんじゃないですかぼくが、犯人じゃやないのかつて。イエスノーで答えられる質問だつたので、イエスで答えました。それだけですけれど」

「は……？」

いや、わたしが言うのもなんだけれど。

ここは、泉界くんに否定されて、やつぱりそうだよなあと思ひながら自分の間違いを悟り、たとえ人殺しの罪を背負つていてもこれからは反省して真つ当に生きていこうという教訓的な誓いを得るところじゃないのか？

そういうふうには、物語はできてはいるはずだが？

ここで泉界くんが「ノー」と言えば物語は綺麗にまとまつていたし、実際問題物理的に、泉界くんが「イエス」というわけは、妥当性は絶対ないのだけれど？

「ちよ、ちよつと待つてよ。冗談言わないでよ、わたしが犯人なんでしょ？ もういいよ、大丈夫。今のはちよつと意地張つて言つてみたくなつちやっただけ。もしかしたら氣遣いだったのかもしれないけど、余計なお世話だからね。要らないからそういうの。大丈夫、わたしはわたしの罪を受け入れるから」

「いや、ですからぼくが犯人なんです。本当に。ぼくが言つた『凶工室の侵入者』つていうのも、普通にぼく自身のことです」

当たり前のように言う。

当たり前のように。当たり前のように、わたしの決意を踏みにする。

「……いい加減にしてくれない？ 泉界くん、ちょっとふざけすぎかな。いや、確かにわたしも自分で言っといて変だとは思うけどさ。

でも、『数分間のタイムラグ』では犯行は不可能だって、泉界くん自身が言ってたんだよ？ それを否定するのかな？」

「ええ——ですから犯行は、『数分間のタイムラグ』では行われていないんですよ。その前に殺しています。具体的に言うと、一時間目の途中なので二時間くらい前ですかね」

……は？

何を言ってるんだ、こいつは。

本格的に意味がわからなくなってきた。

「実はですね神崎せんばい。神崎せんばいの推理はほとんど当たっていたんです。確かにぼくは、凶器として『氷』を使いました。普通にあそこのクーラーボックスに入れてきましたよ」

泉界くんは、教室の後方ドア付近にあるクーラーボックスを指さした。

「ただ——惜しかったのは、ぼくは同時に『砂』も使っていたという点です。それさえ気づければ本当にはほぼ正解でしたね」

『氷』と、『砂』……？

「はい。中が空洞になっている特別な氷の中に砂を詰めて、氷の体積が小さい状態のまま十分な重さのあるボトルを作りました。適当な容器とペットボトルがあれば案外簡単に作業できますよ。さて、人を殺せる重さのある氷は二時間そこらでは溶けません、外殻だけなら普通に溶けます。なぜって何かものに当たった時点で砕けて散り散りになりますからね。普通の氷と違って大きな破片ができない分、九月のこの時期なら三十分もあればすぐに溶けますよ。氷が

割れても陶器ほど大きな音は鳴りませんし、正直誰にもばれません。

実際ばれなかったみたいですしね。ちなみに、『砂』の話で拳がった『袋をどう処理するのか』という問題もこれで解決です——溶けますから」

そんなはずはない。

そんなはずはないと心が訴え続けて、心臓が跳ね続けているけれど、同時に、反論する隙は一切見当たらなかった。

そして直感する。

これは——事実だと。

「で、でも」

それでも認めたくなくて、つい反論を始めようとする。そうだが、「消えた凶器」に関してはそれでいいとしても、他の部分はどうだ？ 犯行時刻のことはどう説明する？

「ですから神崎せんばい。先程から申し上げているように、犯行時刻は『数分間のタイムラグ』ではなくて『一時間目の途中』なんですよ」

「一時間目の、途中……？」

間抜けに繰り返すわたしを、泉界くんは余裕ある目で見つめていた。

「はい。先に言ってしまうとぼくは高いところから『砂入りの氷ボトル』を落とすことで浅羽くんを殺したんですが、この犯行をばれずに行うには『自分より下の階に人がいないこと』が前提条件となります。なお一時間目は一階の図工室で授業がなされていましたが、あそこからは校庭が見えないのでノーカンとしますよ。浅羽くんはかなり校舎に近い位置で殺したので、少なくとも三階以上の階から

は結構身を乗り出さないと見えないようになっていますが、そうは言っても落下物を見られては困る。だから、犯行を行えるのってこの場合、『二階か三階のどちらか』しかないんです——二階の下は一階だから空気で、三階の下は二階と一階だから空きだ。もうぼくが言いたいことはわかりましたね？」

わかった。いや——わからされてしまった。

その論法が持つ、とてつもなく単純で馬鹿馬鹿しく、恐怖すべき言外の意味を。

「つまり、二階でもいいんですよ」

それは、「当たり前」だった。

凶器そのものが十分な殺傷能力を持ち合わせていれば——べつに、落とすのは三階からでなくてもいいのである。

こんな当たり前のことにどうして気づかなかったんだろう！ などと高説を垂れる推理小説の探偵の気持ちだが、今ようやく理解できた——もつとも、今わたしが発見したことというのは、推理小説のそれとは比べものにならないほどチープな仕組みだけだ。

「二階は一年生のフロアですから校外学習の今日は人がいません。

浅羽くんって一年六組に好きな人がいたんですけれど——金髪にしていたのもその好きな人が気に入っているからなのですから——その人からプレゼントをもらっているから、外で待っていてくれと言いました。静かにするようお願いした上で二階から手を振って、そのあと『何か』を投げます。浅羽くんは突然の行動に驚きつつもその『プレゼント』を落とさないようにキャッチを、試みます——」
淡々とえげつないことを言う泉界くんは、しかし、表情すらも淡々としていた。換言して、初めの張り付いた微笑から少しもグラフィ

ックが更新されていなかった。

「が、ここで一つ注意しなければならぬ点がありますね？　そうです、氷は透明であるということ——浅羽くん視点では中に詰まったよくわからない薄灰色の塊しか見えません。落ちてくるスピードもサイズも当然うまく読み取れず、キャッチしようとしたところで頭蓋にヒットしてしまいます。念の為砂入り氷ボトルは七本用意してきたんですけれど、一回で正確に当たって正直ほっとしました——性質上、一番当たりやすいのは一回目ですからね。ま、もちろんあとの六発も全部処理こそしましたが」

「あなたは……、泉界くんって、悪魔なの？」

「違いますよ。人間です」

即答だった。

「……でも、それっておかしくない？」

まだ。まだ一つ、反論する余地は残っている。

そこを突くのは、正直怖い。だって、その最後の柱を否定されたら、一緒に事件のことを考えてくれた泉界くんが犯人でないとという根拠が一つもなくなってしまうから。

慇懃無礼で何を考えているかわからないとはいえ、わたしの不安な気持ちをたくさん和らげてくれた泉界くんが、本当は危険な人殺しだなんて認めたくない。泉界くんは敵じゃなくて本当は相棒なんだって、信じたい——。

けれど、聞かなくちゃいけない。

というより、聞かざるを得ないのである——もうわたしは、そういう局面に立っている。そういうフェーズに、いつの間にか立たされている。

だから、聞かなければいけないのだ……、それが、わたしにとつてどんなに残酷な答えを返す間いだとしても。

「泉界くんは言ったよね、『休み時間になれば死体は見つかるでしょう』って——だったら、一時間目と二時間目、二時間目と三時間目の間の休み時間で死体が見つからなかったのはおかしいよね？それはどう説明するのかね」

「ええ、まあ——今回の件で唯一トリックと呼んでいいものがあるのだとしたら、そこですよ」

あっさりとした決意を受け流すように——しかし。泉界つばさは、淡々とシンプルに「待つてました」をした。

「あれを見てください」

泉界くんが指さした先には、一年二組の二期の目標を書くための薄灰色の模造紙があった。教室に入ってほとんど最初に目に入った、大きな大きな紙である。体格の小さなわたしはもちろんのこと、中学生ならだいたい生徒はあの紙の上で寝そべってもはみ出さないことだろう。

「あれ——もう一枚あるんです」

「……そうなの？」

それが、どうしたのだろう。

クラスに放置されていた模造紙、そばには開きっぱなしの画鋸箱があつて——一人一人隠せそうなくらいに大きくて、薄灰色で。

「……待つて」

声を出しながら、絶句したような感覚だった。

言葉を発しているのに、それがまるで「言わされている」ものであるかのような感覚。

もしかして——そういうこと、なのか？

泉界くんの、「フーダニット」云々の話を聞いたとき。何だかそれは結論ありきな感じで、現実の事件を解釈するには不適當な気がした。ミステリの解釈すぎると思ったのだ。全部裏で操っている黒幕がいるわけでもないのに、舞台芝居的すぎると。

けれどそれは結局、これ以上なく適當だったのだろう。少なくともこんな大胆なことをするくらいには、泉界つばさという人間は無敵の存在であつたのだから。

「——あの模造紙で、浅羽くんの死体を隠したの……!？」

「そういうことです」

模造紙の色は薄い灰色。

校庭の地面の色も、薄い灰色。

三階から遠目に見た分には——一見判別がつかない！

「そういうことです。少なくとも、あの場で神崎せんばい一人が騙せば十分でした——普通の人は、校庭に似た色の模造紙が落ちていたところで何とも思いませんからね」

「でも、でも！ どうやって、そのあと模造紙を回収して——」

「回収はべつに必要なありません。ぼくがやったのは模造紙を『剥がす』ということだけです。……もうそろそろチャイムが、鳴ります。がタネ明かしだけしてしまいませんか」

時計を見ると、既に三時間目の終了時刻まで一分を切っていた。

このまま学校に残ってはいけません——泉界くんに、完璧に罪を着せられてしまうのに。それでもわたしは、その場に根が張ったように動けずにいた。

「まず、浅羽くんを下にしまつて模造紙を被せます。もちろんそれ

まで、血が乾くまでの時間は死体は野ざらしで待機することになり
ましたがね。あの時間が一番ヒヤヒヤしましたよ……。それでその
あとは模造紙を画鋐で地面に緩く留めます。風ではめくれないけ
れど、何か衝撃があつたらすぐに取れてしまうくらいのギリギリの緩
さで」

泉界くんは模造紙のそばの画鋐箱に近寄って、その中から数個の
画鋐を取り出し右手で遊ぶ。

「次はあれを、見てください。何か足りないと思いませんか？」

そう言つて泉界くんが指さしたのは、今度はスポーツ用のボール
入れだった。

足りないもの……。これならわたしにもあてがつく。

「……サッカーボールだね」

「ご名答です。持論ですがサッカーボールって、校庭に転がつてい
ても違和感のないボール第一位ですよ。そこを利用した——と言
い張るつもりはさすがにありませんけれど、画用紙を剥がすため
にぼくはそれを使つたんです。ここまで言えばもうわかりますよ
ね？」

「うん」

もう、わかる。

わたしが陶器を落としたとき、校庭に死体はなかった——正確に
は、模造紙に覆われて見えなくなつていた。

しかし、校庭に出たときには死体は出現していた。「書き置き」を
回収して下駄箱まで降りてくるための時間を考慮すると、多少の誤
差はあれ、泉界くんは「教分間のタイムラグ」の間に死体を出現さ

せたと見ていい——これらの事柄から導き出される結論は、ただ一
つ。

「三階からサッカーボールをぶつけて衝撃で画鋐を取ることで、模
造紙を風で剥がれるようにしたんだね」

「大正解です」

「ひどいね、泉界くんは」

「……そうかもしれませぬねえ」

「教分間のタイムラグ」の間に泉界くんがしていたのは、鞆から
眼鏡を探すことじゃない。

むしろ、眼鏡をかけて模造紙の位置を正確に把握した状態で、確
実にボールを当てるために風が止む絶好のタイミングを見計らつて
いたんだ——！

「これでタネ明かしは全部終了、ですかね？」

「……うん、多分そうだろうね」

タネ明かしは、そうだ。

もつとも、こんなの全部ハツタリだって可能性もある。さっきか
ら泉界くんがしているのは「自分が殺した証明」ではなく「自分が
殺せないわけではなかったことの証明」だ。元々わたし一人しかい
なかつた容疑者リストに自分も加わりに来た、という程度の意味し
か持たない。

「画用紙」は廊下の窓から吹く風で外に飛ばされて行つたのかも
しれないし。

「画鋐」なんて校庭中を探せばどうせ幾つかは落ちている。

「クローラーボックス」は元々浅羽くんの私物だから、本当に泉界
くんが借りていたかは証明できない。

「サッカーボール」なんて、それこそ校庭に転がっていて違和感ないものなのだ。

……けれど。

「まだ聞きたいことはいっぱいあるよ」

「……幾つですか？」

「四つ」

「わかりました。お答えできる範囲で」

と言いながら恭しくお辞儀する姿は、暗に泉界くんが全ての質問に答えてくれるであろうことを示していた。

——三時間目終了のチャイムが鳴り響く。

もういよいよ、誰かが校庭の死体を見つけるのが早いのか、わたしたちが満足するまで話し終えるのが早いのかの勝負だった。

「まず、どうして殺すのは浅羽くんだったの？」

「一つ目のご質問ですね。それは、ぼくの計画では誰かしら一人殺さなければいけなかったのですけれど、浅羽くんはともちようどよかったです」

「ちようどよかったです？」

「はい。だって——浅羽くん程度の関係性なら、ぼくと神崎せんばいの怪しさの釣り合いが取れますからね」

また、わけのわからないことを言う。

けれどそれはやっぱり——それが当たり前であるかのような語り口だった。

「……二つ目。何でこんなことをわたしに話したの？」

「こんなこと、というのは、ぼくにも犯行が可能だったということですかね？」

「その解釈でいいよ」

「はい。ええと、これも先程と似ていますね。つまり、神崎せんばいに『自分がやったかどうかわからない』という感覚を持たせるためです——書き置きを強引に職員室に持っていこうとしたのもそのための茶番でした」

「その理由は、どかがさっきのと似ているのかな」

「似ていますよ。何せ、神崎せんばいが『自分がやった』と確信してしまっていたら、この事件は神崎せんばいの過失致死で終了してしまいますからね——神崎せんばいにはぼくの犯行だって知ってもらうことで、安心感を与えてポロを出させないようにします」

ポロを出させないようにします、と、ついにダイレクトに失礼なことを言い出す泉界くんだった。

「多分、こうしていればこの事件はただの事故で終わりますよ。神崎せんばいは『どう考えても自分が一番怪しい』って思っているよかったですけれど、大人が捜査すれば『泉界つばさも怪しい』ってくらの状況証拠はすぐ集まります。五十パーセントずつ怪しい二人がいるから事件は、お互いがお互いを裏切らない限り永遠に迷宮入り·に·できる。まあ他に目撃者がいなければの話ではありますけれど……、薄氷の上を歩くような脆い可能性ですね——」

「……これは数に入れない質問にしてほしいんだけど、どうしてそんなに『怪しさの分散』と『お互いに弱みを握ること』にこだわることかな」

「それは、十四頁下段七行目に書いてありますよ」

また意味のわからないことを言う、今度はさっきまでのと違って本当に支離滅裂だ。未発達のAIと会話しているかのような気分だ

すらある。

「……三つ目の質問」

時間も無い。無駄な回答はスルーし、次に移る。

最後の質問ではないにしろ、これがわたしにとつて最も気になっている事柄だった。人が死んでいるのにこんなことが気になっていくというのはわれながら不謹慎かもしれないけれど、それでも、わたしはこのことを気にせず呑気にこの件を終わらせることは、できない。

「……あの場でわたし一人だけ騙せばよかったって言っていたけれど。それって、わたしが裸眼で生活してる割には視力低いって事前知識がないと不可能だよな」

眼鏡をかけた泉界くんがサッカーボールを正確にぶつけられた以上、ちゃんと目のいい人なら模造紙の擬態は見分けられたはずなのだ。——ということは逆説的に、その計画を立てた泉界くんはわたしの目の悪さ、よくなさを知っていたということになる。

それに、単純に整理して。

わたしが和泉さんの陶器を落とすだろうと予測して計画を立てられた以上、泉界くんはわたしの小学生時代を少なからず知っている人物ということになるのだ。

「……忘れていたのなら、ごめんね。でも教えて。こんなことしたんだから、きみにはわたしに告白する義務があるよ。きみは、わたしにとつて一体どういう存在なのかな？」

——と。

そう言ったとき、ふと見ると、泉界くんの表情は崩れていた。いや——むしろ「整った」と言うべきか？ さっきまでの能面微笑と

は打って変わって、物憂げな美少年の無表情がそこにはあった。

「……家庭の事情でね、両親が離婚しまして。それが色々こじれたせいで校外学習にも行けなくなってしまったんですけれど」

泉界くんは、突如今までは全く別の話を切り出した。けれどその声の調子から、これが泉界くんにとつて一番大事な話なんだろうなということは、何となく肌で理解できた。

神妙な面持ちで、泉界くんはわたしと目を合わせている。

「旧姓は鈴森といいます」

「……えっ？」

その言葉を聞いた瞬間。

わたしは——この少年が誰なのかようやく理解した。というより、思い出した。

鈴森、鈴森つばさ。

つまり、わたしが小学六年生のときに図書委員会に在籍していた、鈴森始と同じ名字の一つ下の後輩だ——。

「覚えていたら驚きでしょう？ ついでにもう一つ驚いてもらいますが、ぼくの目が悪いのは——もつと言いますか、ぼくの左目が特に悪いのは——神崎せんばいのせいなんですよ」

何と言ったらいいのかわからなくて、わたしはひとまず口と目を伏せた。すると、泉界くんはポケットから一本の鉛筆を取り出して、地面と垂直に落下するように上に放り投げた。

「あっ」

落下する鉛筆。そして、片方が異常に悪い目。小学校が一緒だった、一つ下の男子生徒。

これだけヒントがあれば、もうさすがに思い出せる。

「ただ……そうか。」

それなら確かに全部筋が通る——やっとな話が見えてくる。

けれどそれは——わたしにとつてはトップクラスに残酷な真実だ。

「きみは……、あのときわたしが鉛筆を目にぶつけてしまった子？」

「正解です」

泉界くんはまたお面が張り付いたような微笑に戻り、細い目でこちらを見つめた。しかしその口角の角度には、失礼ながらもどこか痛々しいものがあつた。

小学五年生のわたしが、ものを落とす性癖を封印したきつかけの事件。下級生の目に鉛筆をぶつけ、教師陣から嚴重に注意されたあの事件。

その被害者が——泉界つばさくんだったのだ。

ということとは。

わたしは、わたしが危害を加えた子のことを覚えておらず、一年後には呑気にも委員会と一緒に活動して、こうして再会しても全然気がつかなかったということになる。デリカシーのない「無視」を、わたしは和泉さんなんかよりずっと前からしていたと。

「ものが当たるなら顔じゃなくて頭がいい——何のことはない。

あの発言は、何のひねりもなくわたしへの直球の嫌味、ブラックジョークだったのんだ。

「まあ正直ぼくのことを、覚えていなかったのは意外でした。けれどそんなのはどうでもよくて、ぼくの目に鉛筆をぶつけた人が図書委員会なんて大人しい場所に所属していたのが……」

「そっか——そうなんだ、それで」

——復讐をしに来たんだね。

と、わたしは言いかけたが、なぜか怖くて言えない。迷った末、心の中でそう言った。

「……はい」

泉界くんは、所在なく頷いた。その表情はなぜだか、いたずらなげられた子どものような照れ笑いに見える。

……そうか、これで全てがわかった。

小学五年生の頃にわたしが鉛筆をぶつけてしまった一学年下の男子生徒は、ずっとわたしを恨んでいて。

やがて中学校に入り、同級生を殺めてその罪を着せ弱みを握るという凶行に及ぶほど、その恨みは強かった——ということか。

「……四つめの質問は、いいや。もう答えはわかったから」

「それがいいかもしれませんね。……三階の方が騒がしくなっています。神崎せんばいは早めにずらかった方がいいですよ」

「わかった。そうするね」

言われてみれば、確かに上の階がどよめいているような気がした。休み時間の楽しそうな騒ぎ声に交じって、たまに驚きと焦りを含んだ声がある。どうやら数人が異変に気づいたらしい。

わたしは鞆を持って、教室のドアの方へ向かった。

……これから泉界くんがどうするのかわからない。

人を殺したという罪に彼は堪えきれぬのか、あるいはそもそも罪の意識すら感じていないのか。あの書き置きを先生に見せてわたしを告発するのかもしれないし、このままずる弱みを握ったまま復讐を続けるのかもしれない。しかし、どちらにしろわたしには言うべきことがある。悪魔のような人殺しを生んでしまった遠因であるわたしには、泉界くんがたとえ今どんな気持ちになつていよ

それ以前の問題である。

こんな最悪の状況になっても神崎せんばいを助けられる手段を、ぼくはいくつか思いついていた。けれど、ぼくは結局そのどれもを使わなかった。

さて。

ところで、囚人のジレンマという話を知っているだろうか？

ざっくり言う。二人の囚人がいて、お互いにお互いの罪を黙秘したら懲役年数を減らしてもらえるけれど、相手を売ったら自分は即釈放してもらえる。しかしその代わり、相手の懲役年数が二倍になる。そして、囚人たちが自分の幸せを優先してお互いにお互いを告発した場合、懲役年数は結局判決通りのまま変わらないという話だ。

このゲーム理論で最も教訓になるのは、お互いにお互いの罪を黙秘するのが結局一番幸せであるという点ではなからうか——少なくともぼくはそう思っている。お互いの罪を黙秘し続けた場合、メリットは懲役年数が減るというだけではない。お互いに秘密を共有し合った状態で幾年を過ごし、最終的には巨大な信頼関係が得られるのである。

けれど、現実には実際囚人のジレンマよりも複雑で残酷だ。なぜなら、罪を告白するのは自分のためとは限らないし、その罪が他人のものであるとも限らないからである。

神崎せんばいはぼくに責任を感じ、自分の「本・当・に・あ・る・か・も・わ・か・ら・な・い・罪」を告白して自分の懲役年数を増やし、代わりにぼくを釈放した。だから、ぼくはもう神崎せんばいに近づかず、檻の外での人生を自分なりに謳歌すべきなのである。それが、神崎せんばいの意思なのだから。神崎せんばいの、遺志なのだから。

それに、もつと根本的な理由もある。

どうかそれが一番大きいのだろう。正直ぼくは、未だにそのショックから立ち直れていない——神崎せんばいを助けに行かないのは、そういう悲しみをまだ整理できていないという面もあるのかもしれなかった。

だって、当たり前だ。

あのとき、「きみにはわたしに告白する義務がある」と言われ。

その会話の最後に神崎せんばいが言った言葉を考えれば、ぼくはもう、全てを諦めるべきなのだから。

（あとがき）

この『十四頁下段七行目による迷宮』が書き上がるまでには幾つかの没作品があります。どれも満足に書けないまま、むきー破壊だーと思っていたところを何とか徹夜してこれを書き上げました。一番よくわからん小説になってしまった気がするし、推理小説なのかと詰問されたら僕もわかりません……、ヒイイ。推理小説みたいな顔をしているのに。何せ、結局真相がわからない、「どちらも半分ずつ怪しい」という煮え切らない終わりなので。

泉界つばさのテーマは「気持ち悪い」でした。過度な自己愛と他者への愛情表現に関する壊滅的な独りよがりっぷりが最高に気持ち悪いと思います。顔がよくなかったら確実に許されないけど、顔がよくてもギリ生理的に受け付けられないくらい男子中学生的なナルシズムを目指しました。「好きな人と秘密を共有したい」という

モチベーションで、よしやあいに殺人事件に自ら顔を出し、しかもその動機の説明を「恋愛マスターの本のこの場所に書いてあった」なんて嘯くどうしようもなさが表出しているタイトルは結構お気に入りです。結局、彼の恋心は言葉足らずなせいで神崎せんぱいに伝わっていなかったのですが、彼は彼で勝手にフラれたんだと思つて安全な場所で感傷に浸っています。本当に最低で最高ですね。殺人という共通の弱みをもって親密になるために人を殺した狂人か、あるいは人を殺してしまった憧れの先輩をかばうために詭弁を並べ立てていただけの健気な少年か。どちらにしろ、神崎先輩が犯人ということでのこの事件は解決してしまいました。

以上、あとがきという文化が大好きなので、勝手ながら出しやばらせていただきました……。全くハジサラシなのですが、z o o mの活動に全然参加していないモブ部員な上に締切を超過してしまつており（最悪）。そんな中での掲載を受け付けてくださつて、会長及びミス研の皆様には本当に頭が上がりません。ありがとうございます。

下段が余ってしまったので、部誌に関係ないことを少々箇条書きで……。

- ・メフィストリーダーズクラブが楽しいです。あまり熱心にコンテナツを追ってはいないんですが、何だか入っているだけで楽しい。月額550円を払うとミステリ系でも有名な雑誌「メフィスト」が年四回届いて、作家さん同士の対談が見られたりなどの色々な特典も。何だかんだメフィスト読んだことなかったのが十月号の発送が楽しみです。いつかはメフィスト賞にも出したいな。

・埼玉文学賞落ちた！ うおーーーーー

・一肇先生の『黙視論』すごく面白かったです。ミス研で貸し出しノートに題名を書くとき、帯が被さった結果「論」を見落として『黙視』とだけ書いてしまい、それがここ最近で一番恥ずかしい。

・西尾維新先生の「世界シリーズ」めちゃくちゃ好きです。

・本をちゃんと読みたいです。執筆も読書も、過度に熱中しているときじゃないと途中で断念してしまうから……。今度、メモとかとりながら本格推理小説をマジで推理するやつやってみたくて。まあ頭が弱いので、キャラ名が覚えられず推理どころじゃないんですが……。

・今日は十三時間ほぼつ通してこの小説を書いていたのですが、普通にビビっています。そんなことあるの？ もう三日くらいなくんも書けないと言いたいのですが、別のサークルの原稿の締め切りも迫っています。諸々が終わったら、ゲームしたり公募用の小説を書き進めたいですね。でももうしばらく頭空ぼんでいたいー。

・z o o mやグループ通話、大人数での対面ミーティングが苦手すぎて所属しているサークルほぼ全部行けていません。頑張らなきゃなと思つているので、本当に、頑張りたいですね……。皆様、申し訳ございません。

青崎有吾

『ノックンオン・ロックドドア』

読書会レポート

注意！

これより青崎有吾

『ノックンオン・ロックドドア』

読書会の様子をお届けします。

小説の内容に関わる**重大なネタバレ**

が含まれていますので、

未読の方はご注意ください。

【某日読書会 (z o o m)】

青崎有吾『ノッキンオン・ロックドドア』

福富.. それでは読書会を始めたいと思います。

課題本は青崎有吾先生の『ノッキンオン・ロックドドア』です。よろしくお願ひします。

一同.. よろしくお願ひします。

福富.. では自己紹介からやっています。例に乗るとつて、私から、自分の名前、学年、学部、好きな作家さんと言っています。

今回司会を務めさせていただきます、四年の福富です。教養学部で、好きな作家さんは石持浅海先生ですが、青崎有吾先生の本も結構読んでいます。よろしくお願ひします。

前田.. よろしくお願ひします。

次は私かな。四年の前田ももです。工学部に所属しています。好きな作家さんは良く変わるのですが、気分を変えて読んでいます。

福富.. ちなみに今ハマっている作家さんはいますか？

前田.. えっと、部に入った新刊を今読もうとしているので、知念先生(『硝子の塔の殺人』など)とかですかね。

福富.. ありがとうございます。

じゃあ次、五味さん、良いでしょうか？

五味.. はい、大丈夫です。

一年工学部の、五味希紗羅です。好きな作家さん、というか好きな探偵はシャーロック・ホームズです。よろしくお願ひします。

福富.. よろしくお願ひします。

では続いて杉山さん、大丈夫でしょうか？

杉山.. 大丈夫です。

一年の杉山綾香で、経済学部所属です。好きな作家さんは綾辻行人さんで、最近『館シリーズ』を読んでいます。よろしくお願ひします。

福富.. ありがとうございます。では最後に、小林先輩お願ひします。

小林.. はい。理工学研究科、修士二年の小林里沙です。最近小林泰三先生の作品にハマっています。

福富.. よろしくお願ひします。では早速始めていきたいと思ひます。あらすじと概要、登場人物紹介はこちらになります。

【概要】

二〇一六年に徳間書店から出版された本。不可能専門の探偵と、不可解専門の探偵が協力して謎を解く、全部で七編が収録されている短編集であり、現在は2巻も出版されている。

【あらすじ】

インターホンもドアチャイムもノッカーもない探偵事務所ノッキンオン・ロックドドア。

戸惑うようなノックの音なら、謎を抱えた依頼人がやってきたしるしだ。

密室、容疑者全員アリバイあり、衆人環視の毒殺など、(不可能(H OW))な状況のトリックを推理する御殿場倒理と、ダイイングメッセージ、現場に残された不自然なもの、被害者の着衣など(不可解(W

HY)な状況から理由や動機を説明する片無氷雨。

相棒かつライバルのダブル探偵が、難事件に挑む！

(徳間書店HP <https://www.tokuma.jp/knockington/> より)

【登場人物紹介】(こちらもHPより)

・御殿場倒理…トリック解明に強い〈不可能〉専門の探偵。悪魔の

ような巻き毛と黒のタートルネックが特徴。

・片無氷雨…動機や理由を探る不可解専門の探偵。通称地味眼鏡。

・薬師寺薬子…探偵事務所ノックンオン・ロックドドアのアルバイ

ト。高校生。

・穿地決…警視庁刑事部捜査一課の警部補。いつも駄菓子を食べ

ている。

・糸切美影…犯罪トリックの考案者。倒理と氷雨、穿地とは大学

で同じゼミだった。

・神保瓢吉…依頼人を斡旋する仲介屋。

福富…ではそれぞれの短編のほうに移ります。一応バディものとい

うことで、短編ごとに概要とHOW(不可能)とWHY

(不可解)で、分かりそうな部分をまとめてあります。

(*以下、各短編の概要・HOW・WHYは、全て福富が制作した
レジュメより引用)

【ノックンオン・ロックドドア】

依頼人は霞蛾水江。画家の夫・英生が自宅の屋根裏にあるアトリエで殺害された。六枚の風景画のうち一枚だけ赤く塗りつぶされて

いた。犯人は被害者の息子である竜也。先に謎を解いたのは、不可能専門の倒理。

《HOW》アトリエのドアを開かないようにするため、ドアの前の

絨毯の下に絵を置いた。

《WHY》父の絵を三越に踏ませるため。

福富…この第一作目を読んで、いかがでしたか皆さん？

前田…なんだろう…：最初にあったノックの下りが最後のほうにそ

れが活きて、面白かったなー、と思ったかな。

福富…確かに。

前田…事務所の名前だけではなくて事件にもかかってた、というのが上手いなー、と。

福富…確かに！

これはこのシリーズの第一作で、もしかして意識

してたのかな？ そんな気もしますね。

他はいかがでしょうか？ 小林先輩、なにかありますか？

なにか言ってくれそう(笑)

小林…(笑) (この小説では大体)片方が先に解いて「自分の事件

だ」って言うって。例えばこれとかは倒理が先に解いている

けど、最終的には氷雨の方だったってなって終わって。

福富…あー、確かに。

小林…探偵が二人いることの面白みだなんて思った。

福富…そうですね。最初倒理が解いて、そこから氷雨が閃いて、

氷雨の話で終わってましたよね。

ちなみに私はこの「ヒントはキリスト教」の意味が全く分

からなくて(笑)

一同…(笑)

前田…ねー！ 何、急に？ って思ってた(笑)

福富…私は日本史取ってたはずなんですけど、すっかり気づかず…
…。何言ってるんだこいつって思ってた(笑)

じゃあみんなに聞いていこうかな、五味さんいかがですか？

五味…そうですね、さつきも仰っていましたけど、最初の事件というだけあって、二人で謎を解いている感じがとても強くて、よいというか…、引き込まれました、とても。

福富…会話が面白いよね。

五味…はい。掛け合いがとても。

福富…確かに。ダブル探偵というのが強調されているなって感じがしますね。ありがとうございます。

では杉山さん、いかがでしょうか？

杉山…あの一、なんか絵を踏んでいくじゃないですか？

福富…はい。

杉山…現実的に考えて、体重によって絵がつぶれたり、変形したりしないのかな？ って。

福富…あー、確かに。ちょっと待って、これってキャンバスだよな？

前田…キャンバスですね。

杉山…実際に触ったことないからよくわかりませんが。

福富…私もこれ触ったことないな…。

杉山…小説としてはすごいこれ面白くなって思ったんですけど。現実的にこれができるのかなって。

前田…現実ではあまりなさそうだなって思ったし、結構奇想天外なトリックだったよね。合計一二〇キロの男二人が立っていた

って結構…。

福富…バキバキっていきそうな気がしなくもないね。

杉山…すごい頑丈だなって。

五味…確かに今キャンバスを踏んでみましたが。

小林…ええ！ 家にあるの？

前田…というか踏んでいいの？

五味…ちよつとスカって感じがしました。真ん中が開いているので、床にベタ…：…：つてくつついてしまい、下にあつたらすぐに気づいてしまいそうです。

福富…たわんじゃうみみたいな感じか。

五味…逆に言うと真ん中に木とか補強してあげると気づかないかもしれませぬ。

前田…あとは二人で体重が均等だったとか？ そんなことないか？

福富…まあ多少変な音がしても焦ってるから気づかないだろうけど。

五味…あとは詰め物とか…。

前田…でもそういうことはしてなさそうだよな…。

五味…こういう補完みたいなことも面白いですね。

福富…そうですね。ありがとうございます。

他に何か言いたいことがある人はいらっしやいますか？
…：…大丈夫そうですね。では次に行きましょう。

【髪の短くなった死体】

神保さん登場。「キクラゲ」という四人のコント集団が稽古場代わりをしていたマンションで、メンバーの一人善田ミカが殺害された。殺害された直前にコンビニに行き、その防犯カメラでは長髪だっ

たが、死体発見時には短くなっていた。犯人はメンバーの一人であり善田の恋人でもあった奥寺。一つ目の氷雨の推理である髪の毛が凶器になった説は外れ。二つ目の善田が奥寺を殺そうとして、返り討ちにあつてしまった説が正解。

《HOW》奥寺を殺してしまったと思ひ込んだ善田が変装を試みて
いる間、意識を取り戻した奥寺が善田を殺害した。

《WHY》奥寺が生きていたと見せかけるために、善田が変装しようとして長髪を切つたため。

福富…それで、髪の毛が長くなったり、短くなったりっていうの、どこかの小説で見た気がするなー、とか、髪の毛が長くなるよりは短くなるほうが不思議だからかなー、とか思ひながら私は読んでいました。いかがでしょうか？

前田…：…そうだね。もし仮にさ、奥寺さんを完全に殺せていたとしても、髪の毛はかなり短くなっているはずで、インパクトが残るそうだよ、「なんでこの人髪の毛短くしてんだろ？」みたいに。すごいよね、お互い。

福富…確かに。
まあでも、奥寺さんを殺しちゃったと思つている善田さんが荷造り用の箱に詰め込むつてくだりがあつたと思つたんですけど、亡くなつた死体つて結構重くねつて思つて（笑）

前田…（笑）
福富…詰め込めるのか？ つて思ひながら読んでいましたね。まあ、あとこの事件の関係者たち、みんなド派手な髪の毛をしていらしたので、かなりインパクトの強い現場だつたん

じゃないかなつて思ひました。
じゃあさつきと逆回りで聞いていこうかな、杉山さん、いかがでしょうか？

杉山…なんか最初に髪の毛で首を絞めた、みたいなことつてたじやないですか？

福富…はい。

杉山…この時点で、すごい面白い説だな、これで解決かな？ つて思つてたら、結局違くて、そういう話多くなつたですか？ この本を通して。そういう、一人では完璧じゃないけど二人で補完しあう、みたいなのが主で、すごく良いなつて感じました。

福富…ありがとうございます。たしかに。

おお！ これじゃない正解？ つて思うような説が提示されるのにかかわらず、それをさらに超えていく推理が出てきて、二度おいしいですよ。

では続いて五味さん、いかがでしょうか？

五味…そうですね…。被害者と加害者の関係かと思つたら実は被害者は加害者でもあつて、加害者は被害者でもあつたつていう、それがすごい面白いなつて、全然そういう発想なかつたなつて思ひました。

福富…確かに。なんだつて、確か『謎解きはディナーのあとで』でも返り討ちにあつて死んじゃうつてのがあつた気がする。

五味…『謎解きはディナーのあとで』に、髪の毛短くなる事件もあつた気がします。

福富…そうだつて、そつちは分からない…。割とそこら辺を踏襲

してんのかな？ どっちが後だったっけ？

五味：『謎解きはディナーのあとで』の方が先だったと思います。

前田：結構これ（ノッキンオン・ロックドドア）最近だよな。

福富：二〇一七年とかだったはず。ちよいちよい多様なトリックが使われているのかもしれない。それをどうという状況で活用するかっていうのも見どころだね。

じゃあ小林先輩、いかがでしょうか？

小林：えー、さっきの、変装のために髪を切ったけどその後はどうすんの？ って話で、とりあえずその場を逃れることさえできたら、後はカツラをかぶるなりすれば良いよなって思ってた。

前田：コント集団って言ってましたからね。

小林：犯人が最初に善田に殺されそうになった時の首の痣を俯いてごまかしてるのちよつと無理がないかな？ って思ってた（笑）

福富：（笑） ありましたね、あの全員メンバーが俯いて事情聴取を受けたってやつですよ！

前田：（笑） 確かにあれは……。

小林：身体検査ぐらいしないかなって思ってた。化粧とかでごまかすならともかく（笑）

福富：下を向いても見えそうですよね。

前田：見えるよ絶対。

福富：気づかなかったのかな、警察は。

五味：こう……コートの襟を立てていたとか……。

福富：首が見えにくい服、それこそスタートルネックとか着てたのかな。その辺は何も書いてないけど……なんかあったんですかね、奥寺さんには（笑）

小林：（笑） 確かに。

福富：ありがとうございます。

じゃあ前田さん、さっき喋ってもらったけど他にもなんかありますか？

前田：えー、そうだなあ。もうそんなにか……髪の毛がインパクト強くて、短編の中でもこの話が印象に残ったかな。

福富：髪の毛ってやっぱみんな話に出すんだなって思ってたよね。

防犯カメラの映像がそこまで鮮明でないと、髪の毛って個人を判断するのにすごく大きな材料になるんだなって。

前田：うん。

福富：……じゃあこんな感じで、【髪の毛の短くなった死体】は大丈夫ですかね。次に行きましょう。

【ダイヤルWを廻せ！】

別々の依頼人の事件が実は同じ事件だったという話。薬子ちゃんの言葉により、二手に分かれて事件の調査が始まる。金庫を開けてほしいという話は長野崎、脳挫傷で亡くなった父・藤栄太郎の周囲に血が少なかったという話は島津という依頼人から。犯人は長野崎の叔父であり、島津の兄弟である川藤晴雄。

《HOW》部屋で金庫を用いて老人を殺害したあと、外に連れ出された。その為外で倒れていた老人の周りには血が少なかった。

《WHY》金庫が逆だったため。

福富：金庫の鍵自体は全然暗号でもなんでもなくて、気づきって大

事だなーってのがよくわかりました。あの氷雨が座標とか取り出してどうたらこうたらやっていたのは全部無意味だったんだなって（笑） 私がしょんぼりしてしまいました。あと気になることとして、金庫は相当重いのでひっくり返すの相当大変だったろうなーって思ったんですけど、まあでも殺しの馬鹿力かな？ って思ったりして、妙に納得したりしました。

最初の金庫の描写で扉というか取っ手の位置に言及していたりしてましたっけ？

前田.. どうだっけ、なかったような。

福富.. なるほど、ところでよくテレビとかで金庫開ける番組あるじゃないですか？ それで大金が出てくることってほぼないわけですよ。だからどうせこの金庫にも大したものが入ってない！ って思いながら読んでました。

前田.. それ、私も思いました。

そんなコレクションするほど？ って。全部で十万くらいしか価値ないはずなのにそんなに？ みたいな。

福富.. うん。

前田.. 他の人にも見せないほどの価値はあったのか？ って。そういう感想でした。あとは、二つの依頼が別々のように見えて最後は一つになるっていうのがすつきりしたかな。

福富.. 確かに。あっここで繋がるんだ、みたいな。

前田.. 今回は二つの視点で進めてたけど、みたいな。そんな感じですよ。

福富.. はい、ありがとうございます。

じゃあ小林先輩、お願いします。

小林.. : : : トリックに関係ないけど、最初の方、菓子ちゃんがされるまで二手に分かれるって発想がなかったのが可愛いなあって思った（笑）

福富.. (笑) 確かに。

前田.. (笑) いつも二人で一緒にやってるんですかね。

福富.. 二人でいつも一緒にやってるから、一人ずつやるって発想がなかったんでしょうね（笑） 菓子ちゃんがナイスなのかどうかちょっと微妙ですけど.....

小林.. ナイスだと思う（笑）

福富.. どっちかに行っちゃったら事件解決しないので、ナイスですかね（笑）

ありがとうございます。五味さんいかがですか？

五味.. なんとというか... : : : 前の事件と前の前の事件もそうなんですけど視点を変えるところとか、そんな簡単なことで?! っていうのが糸口になるの、多いですよ。

福富.. なるほど。

五味.. そういう簡単なことだからこそ気付けないし、気づけた瞬間にするすると謎が解けていくの、気持ちいいですよ、全体的に。で、それを【ダイヤルWを廻せ！】で一番感じました。

金庫を逆にしただけで全部わかっちゃう！ っていう。

福富.. 確かに。金庫を逆にして使っちゃう人は多分ほとんどいないと思うんだけど、でも別に床に固定されているわけでも棚に固定されているわけでもないし、いくらでもひっくり返せますよね。なぜでしょうね？ 金庫は重いから、ひっくり返さ

れないもの、みたいな先入観があるんでしょうか？

小林…なんか上になかったけ？

福富…上になんかありましたっけ？

前田…ほこりがたまっていなくて描写はあるね。

福富…他のものはほこりを被っているけどこれは被っていないって

描写があつたような。

小林…そんな感じだったような気がする。

福富…ちよつと金庫の話は…すいません私は見つかりませんでした。

小林…大丈夫です。

福富…じゃあ最後、杉山さんいかがでしょうか。

杉山…えつと、金庫をひっくり返すっていうのが、気づきそうなのに気づかない感じが面白かったです。

あと、私は金庫の上にはこりが無い、という描写を、金庫の上で別の小さい金庫が乗っているのかと…。

前田…あー、なるほど。

杉山…暗号はその金庫のものだったのかなって思ってたんですけど。

福富…下はフェイクか。

杉山…ひっくり返されていたからほこりが無かったっていうのが面白かったなって。

あと、この話にしか出てこない、名前を忘れちゃったんですけど、あの、おじいさんの残した遺書を暗号だと勘違いしていた人いたじゃないですか。長野埼さん？ すごいなんかちよくちよくキャラの濃い人出てくるなって（笑）

前田…そうだよね。

福富…（笑） 確かに。

杉山…主要人物も全員キャラが濃いし、そういうの私好きなので、

良いなって思いました。

福富…キャラ立ちしてるね。たしかに。殺された被害者も何だかんだみんな濃いというか。キャラ立ってんなーって思いました

ね。私最初に金庫が逆だって氷雨さんが気づくシーンで、氷雨さんがちよつとやく呟いたせいで、「逆だ」がちゃんと聞こえずに、「…くだ」ってなって、何を言ってるんだ？ ってなつた後、トリックの全容を見てあー、逆ねーってなりました。

…：はい、ということ、金庫の話は大丈夫ですね。

前田…はい。

福富…じゃあ次へ行きます。

【チープ・トリック】

被害者は湯橋甚太郎。恨みを買うことが多かったようで被害者は常に周囲を警戒し、窓に近づかずカーテンなど開けなかった。しかし、外から銃で狙撃され、近づかなかったはずの窓際で事切れていた。なお、美影が登場し、ここでトリックを考えたのは美影だということが押収品で判明する。

《HOW》部屋の蛍光灯が事切れるタイミングを狙って被害者を狙撃した。

《WHY》蛍光灯を交換しなかったと奥様に責められることを恐れたメイドが死体を窓際に移動させたため。

福富…人の手が二回加わっているということ、これもまた一味違

う事件かな、と思いました。狙撃っていうのが【髪】の短くなつた死体】よりは現実味が無いような気がします。

あと、ただただメイドの近江さんが気の毒だな、というのと、最初の方で、倒理が羽虫の死骸を見つけたっていうのがさすげだ、と思つて。

前田..なんか使われるのかなあ、とは思つてたけど、全然想像がつかなくつたよ。

福富..そう！　そこで使われるのかつていう驚きがあつたかなあ、と思います。

じゃあ逆向きで、杉山さんいかがですか？

杉山..蛍光灯を取り換えるのを待つてるのが、ずっと見張つてて大変そうだな、と思つたんですけど。

一同..(笑)

前田..よっぽど恨みがあつたんだろうね。

杉山..ずっと外から見てたのかな、たぶん。

前田..うんうん。

杉山..あと、電気を消して卓上スタンドを点けたことで蛍光灯変えてるつて分かる、つて書いてあつたんですけど、卓上スタンドだけでそんなに光漏れるかな、と思つて。

福富..あー、確かに。

杉山..そんな感じでした。あと奥様がすごい怖かつたんだな、つて。福富..ね、メイドさん気の毒よね、これね。ありがとうございます。

じゃあ、続いて五味さん、いかがでしょうか？

五味..はい、読み込みがまだ全然足りないんですけども、美影さんが、死体を窓際に移動させるつていうのまで読んでそう、

つていうか。

一同..あー。

五味..奥様の怒鳴り声なんて外にいくらでも漏れるだろうし、たぶん、メイドが死体になんかするだろう、つていうのを彼が予想していると感じて。もしそこまで予想してるとしたら、本当になんかモリアーティみたいな男ですわね。

前田..うんうん。

五味..そういう感想を抱きましたね。

福富..あー、確かに。うわー、そこまで考えてたのかな、美影。

怖いなあ。

五味..そう考えると、人の心を利用する冷徹な犯罪者感がヤバイですわね。

福富..うんうん、確かに。ありがとうございます。

じゃあ続いて里沙先輩、いかがですか？

小林..大体言われちゃつたよね(笑)

あれ、これ死体を移動させたんだっけ？　なんか脚立片づけたみたい。

福富..あつ、そうです。ツールを戻して、死体を窓際に寄せたけど、なんか結局、被害者の死体に残つた銃弾の角度がどうもおかしい、つていう話で、ツールに乗つたんだみたいな話になつた気がしません。

あと私、今思つたんですけど、蛍光灯を窓から漏れる光つて言うけど、これ蛍光灯を昼間換えてたら分からなくない、つていう。

前田..確かに(笑)

小林..確かに。

福富..夜切れるか昼間切れるかは、もうほんと……。

前田..昨日までテン、テンってしてたのに、今日はピカピカだ、
換わってる、みたいな感じになるのかな(笑)

福富..そうなるよねって思ってた。このトリック、結構賭けてるよね。

小林..でも、昼間でもさ、カーテン閉めてるから気付けるんじゃない
い?

前田..あ、確かに、そういう描写あったかもしれないですね。

福富..えっ、でも外から見ても分かります? あの部屋、電気付いて
る、って。

前田..確かに、日中の方が分かりづらいかな。

福富..どうなんでしょう。夕方とかなら分かりそうですけど……。

あつ、でも見えるのかな、執念深く、もしかしたら望遠鏡
たいので覗いてたんですかね? かなり辛抱強いですね、こ
の人。

五味..あつ、でも狙撃をやる人って、何時間も何時間も集中してや
って、中にはおむつを履いて狙撃する人もいるらしいですね。

前田..へえ(笑) そうなんだ。

福富..すごいなあ。

五味..だから何時間も待つなんて得意でしょうし、目もきつと良い
から、昼間でも分かるんじゃない、っていうのは思いました。
辛抱強いことに不自然さは無かったですね、おむつ履くし。

一同..(笑)

福富..狙撃者すごいなって感想に変わってきちゃった。

はい、そんな感じですかね、【チープトリック】の方は。

前田..あつ、ごめん、一個良い?

福富..どうぞ。

前田..私、高さもよく計算できたな、って思ってた。
福富..あー。

前田..だつてどれくらい離れて、って三角比とか? よく分かん
ないけどそういうの、三十度までわざわざ計算してやってる
だろうから、それって、高さや距離までどうやって把握して
たんだろう、って思ったかな。

福富..確かに、あと机の位置とかね。きつとこのスツールに乗るだ
ろう、とか。美影さんってそんな家の中に侵入できるんだっ
け? なんか外から見ても、蛍光灯が切れそうなのに気付いた、
みたいな文章はあったけど。

前田..うん。

福富..確かに計算はすごいね、美影さん。

五味..そうですね。
福富..あつ、全然関係ない話なんですけど、ここ最後の美影さんと
探偵二人と決さんの関係性がちよつとずつ明らかになって
いくんですね。

「第十八期天川ゼミ 観察と推論学」というゼミに入ってい
て、「四人のうち一人は犯罪者を捕らえる仕事に就き、二人は
犯罪を暴く仕事に就き、もう一人は犯罪を作る仕事に就いた。
まあそれだけのことである」っていう結構意味深な文章が付
け加えられて、ちよつとここで美影さんがどういう人物なん
だろうっていうのが見えてくるのかなあ、という風に思いま
す。

じゃあ、次行きます。

【いわゆる一つの雪密室】

被害者は茂呂田勝彦。いわゆる雪密室で被害者が発見された。様々な説が倒理と氷雨の間で交わされるが、結果正しい真相に辿り着いたのは倒理。死の直前に弟と口論し彼を殺害しようとした被害者は、食洗器から取り出したばかりのまだ温かい包丁を素手で持つて出たが雪で転んだ拍子に包丁が胸に刺さった。包丁の指紋は被害者もがいた際に掴んだ雪が洗い流してしまった。

《HOW》被害者の事故死。凶器の指紋は雪が洗い流した。

《WHY》弟を殺そうとして勝手口から出たが転んでしまったため。

福富…私はこれが一番、実際にやるのは難しそうだな、という気がします。

前田…うんうん。

福富…だつて、ホカホカの包丁持つて出てもさ、外寒いでしょ、雪降ってるほど。その間に冷めない包丁、つて思つて。食洗器から出てホカホカつて言つても、そんなにホカホカじゃないと思うんですよ、私。

小林…そうだね(笑)

福富…だつて触れる程度のホカホカでしょ!

一同…(笑)

福富…私、ちょっと一番これはどうなんだ、つて思つた事件でした。

はい、以上です(笑)

じゃあ、ももちゃん、なんかありますか?

前田…そうだね、私もほぼ変わらない感想というか、私は指紋の方が不思議だったかな。そんな雪で洗い流せる? みたいな。

福富…あー。

前田…そつちの方がインパクト残ったかな。そういうもんなんだ、つて思つて。ホカホカのやつとか待つてたのかな、もうちょっとで終わる、つて言つて。

福富…なんか食洗器をかけたとか言つてたけど、その食洗器かけてる間に殺意が出てきたのかな?

前田…たぶん。

福富…ちよつとその辺の時系列が整理できなかつたんだよなあ。

ちよつと謎な指紋トリックでしたね。

じゃあ、続いて里沙先輩、いかがですか?

小林…雪に転ぶのは良いとして、手に持つてた包丁が胸に刺さるつていう(笑)

前田…確かに、かなりの確率。

福富…こうやつて持つてますよね(包丁を胸に向けて持つ動作)。

小林…胸の前で持つて、歩いて……。

福富…手首がぐにつて内側に入ったんじゃないですか(笑)

小林…前に行かないな、つて思うんだけど。

福富…確かにそうですね、そもその話ですよ。

前田…でもなんか、寝方がポイントなんじゃないですか。

福富…どうやつて寝てたつて?

前田…胎児のような、みたいな。

福富…あー、ありますね。

前田…ここをこういつた、みたいな(包丁を胸に刺す動作)。

福富..なんか胎児のような、横向きにきゅって。でも、どうやって刺したんだろう。刺さるかな？

小林..こう包丁持った手を転んだ拍子に地面に着こうとして(笑) ちよつと無理があるけど、地面に持ち手の方を下にして着いて、その上に、がって倒れた。(ジエスチャーしながら)

一同..あー。

前田..なんかそれも思ったんですけど、それでも変な跡残りそうな気はしますよね。

福富..もがき苦しんで消しちやったんじゃやない？

前田..あー、そっか。

福富..どうなんだろう、刺さるのかな。

前田..確率が低いよね、この事件。

福富..途中で濡れ衣を着せられそうになった従業員も気の毒だな、って感じでした。

続いて、五味さんいかがですか？

五味..氷雨の間違えた部分がすごい印象深いな、って思ってた。彼は常にWHYで考えてしまうから、これは間違えたんだな、って感じでしたね。

福富..あー。

五味..だから、なぜ指紋が消えているのか、っていうのに対して、人の意思があると考えてしまった、WHYだから。でも、雪で洗い流すっていうのは、可能性の是非はともかくとして、理由とか無いから。

福富..確かに。
五味..だから間違えてしまったんだな、っていう説得力がありました

たね。

杉山..なるほど。

福富..確かに、その通りですね。あー、気づかなかった、そこは。

五味..(笑)

福富..あと、素人に色々言われて、推理がはずれて恥ずかしがってる氷雨君が、ちよつと気の毒に思うくらいの恥ずかしがり方だったなって。私そっちの方が印象強くて気づきませんでしたね。ありがとうございます。

最後、杉山さんいかがですか？

杉山..えっと、そもそも包丁を食洗器から取って持つてく必要があったのかな、って。別の包丁あるなら持つてけば良いじゃん、って思ってた。

福富..確かに。

杉山..あといくら酔ってるからって、そんな雪道を歩いて行くかなってちよつと思いました。

五味..確かに途中で頭が冷えそうな気がするし、雪国の人間ならそれぐらいへっちゃらだろ、って気もしますね。

福富..確かにそうですね。相当のいさかいがあつたんだな(笑)

一同..(笑)

福富..なんかここは恨みとかじゃなくて兄弟間の喧嘩っていうのも、真相の残念さって言ったら語弊があると思うんですけど..

..。
自分がただずっこけちゃって死んじゃった、言い方悪いけど間抜けな感じで、弟殺しに行こうと思つたのも割と短絡的な感じだったのかな。もしかしたら、包丁持つて脅しに行くだ

けだったのかも分かんないけど。

杉山.. そうかもしれないですね。

福富.. ちよつと一番動機とかが無い、解けてしまえばあっさりした事件かな、って思いますね。これも気づきそうで気づかないっていうのがあるのかな。

じゃあ、続いて行っちゃっていいですかね。

五味.. すいません、一言だけいいですか。

福富.. どうぞどうぞ。

五味.. 本筋とは関係ないんですけど、『ドグラ・マグラ』の引用がされていたらちよつと怖かったですね。

福富.. 『ドグラ・マグラ』の引用？

五味.. 『ドグラ・マグラ』でしたっけ？ 「氷雨よ氷雨よ、なぜ悶える」の部分。

一同.. あー。

五味.. あれはたぶん「胎児よ 胎児よ なぜ踊る」っていうパロディイーですよ。

福富.. ちよいちよいこの作品、映画とかの名前も出てきて、パロディイーも出てくるね。私は分かんないのが多かったんだけど。そっか、『ドグラ・マグラ』か。読んだはずだけど覚えてないんだな、私。

五味.. まあ怖いし、なんか意味不明とも聞きますし、疲れるとも聞きますね。

福富.. うん、疲れる、すごい疲れた。

前田.. 疲れるね。

福富.. 話が脱線するんだけど、私が一年の時の十二月に『ドグラ・

マグラ』を読書会でやりまして、読書会がちよつと崩壊してた(笑)

五味.. なんでしたっけ、なんか擬音で終わるページがある……。

福富.. そうそう。あれはこの先十年以上読まないかな。

前田.. ねー、すごかった。

福富.. しんどかったし。

【いわゆる一つの雪密室】はこれで大丈夫そうかな？

じゃあ、次に移ります。

【十円玉が少なすぎる】

薬子ちゃんが通学途中にすれ違った派手な服を着た男性が電話で言っていた『「十円玉が少なすぎる。あと五枚は必要だ』』という言葉について考えるストーリー。男が何か犯罪を行っており、その口封じのために掛けた人物が特定されない公衆電話を使う。そして日中家にいることの多い主婦の声を聞いて自分の犯罪に都合の悪いその主婦を殺害しようとしていたと倒理と氷雨は推理する。二人はそんなことは空想だ、と心配する薬子をかからかうが、ラストシーンで穿地が現れ事態は一転。事件が実際に起きており、知らず知らずのうちには事件は探偵によつて解かれていた。

《HOW》？

《WHY》公衆電話を掛け、電話口に出る女性を探すため。

福富.. これが一番個人的には、二人のやりとりが長く見られて面白

いな、と思った作品でした。

では、杉山さん、いかがですか？

杉山…全体的に難しそうだな、と思ったんですけど、電話を十二、三件掛けるわけじゃないですか。

一同…うんうん。

杉山…それで全部出てくれるのかな、って思ってる。

福富…確かに。

杉山…私はあんまり知らない番号出ないようにしてるんですけど、

その主婦の人も出てくれたんだ、って思ってる。あと、その殺された主婦って、会った時に声出してたのかな、って。

福富…それは思った。

杉山…電話してたって言ってたから、それが聞こえたのかなとも思ってたんですけど。

前田…あー、なるほど。

杉山…あんな一瞬で電話口でも分かるくらい、その人の声を知ることができるのかなっていうのが、ちょっと気になりました。あと薬子ちゃんの観察眼っていうのかな、それがすごいなっと思っていました。

福富…ありがとうございます。確かに電話出ないお家あるよね。

よく電話を掛けて世論調査してるのはニュースで出てくるけど、電話出てる人半分もないんじゃないか、っていうくらい少ないし。

前田…うんうん。

福富…公衆電話から一回掛かってきたことあったけど、怖くて出なかったよ。

小林…(笑)

福富…たぶん間違いない電話だと思うんだけど。ね、出るかどうか分かる

んない。見つからなかったらどうするんだろう、もっと十円玉集めんのかな。

前田…どうなんだろうね。声とかも違いそうだよ、電話と実際だったら。

福富…ワントーンくらい高いかもしれないね。ありがとうございます。した。

続いて五味さん、いかがでしょうか？

五味…この三人のやり取りが面白いよね、っていう浅いことをめっちゃくちゃ言おうとしてたんですけど。

一同…(笑)

五味…深めのこと言われて困っちゃいましたね(笑)

福富…大丈夫、私もかわいいと思ってる(笑)

五味…この三人、ご飯美味しそうに食べててかわいいな、とか思いながら読んで。

福富…確かに。

五味…でも、確かに杉山さんの言ってたこと一理ありますよね。そもそも、その時間帯に買い物に出かけていたからって、看護

師とか不定期な仕事に就いていたり、出ない確率の方が高いような気がしますけどね。

福富…よっぽど切羽詰まっていたのかな。えーと、ドット模様のネクタイを締めて、赤地に黒のネクタイ締めてる人。

小林…出なかったとしても足はつかないし。

前田…あー。

五味…リスクが少ない方法から試そうとしてたのかもしれないね。福富…ありがとうございます。

里沙先輩、なんかありますか？

小林…えっと……、本編については割と言っちゃったんで。

福富…すいません(笑)

小林…その辺については『九マイルは遠すぎる』っていう海外物のやつが元になってるんで、良ければ。

福富…元ネタそれかー。

小林…うん、たぶん。

福富…じゃあ十円玉の方はこんな感じですかね。

前田…あ、私。

福富…ある？ どうぞどうぞ。

前田…私はこれ、公衆電話までは一応予想はしてたんだけどさ。

福富…おー、うんうん。

前田…今回は割と殺人事件ばっかだったけど、これだけ日常の謎なんだって思ったら殺人事件で、落ちがうまいなって思ったかな。

福富…確かに、言われてみればそうだね。他はもう最初から死人が出てるもんね。これだけ毛色が違うかもしれない。ありがとうございました。

じゃあ、最後行きませぬ。

【限りなく確実な毒殺】

とあるパーティでスピーチをしようと壇上に上がった政治家外様寛三が毒殺された。手に持っていたシャンパンに神経毒が仕込まれていた。毒が仕込まれていたのは被害者が持っていたシャンパンのみ。実際は毒は被害者がパーティ会場に入る前に飲んだ水と、スピ

ーチ台の床に仕込まれていた。犯人は被害者に付きつきりだった送迎係の堀田。

美影の存在、そして倒理と氷雨、穿地、美影の四人の関係性がほのめかされる。四年前の不可能かつ不可解な密室の事件に四人は囚われているらしい。(この事件については第二巻に詳しく載っている)

《HOW》毒はシャンパンのグラスではなく、その前に飲まれた水とスピーチ台に塗られていた。

《WHY》…？

福富…WHYの方は特に今回は無いのかな、とあって、「？」にし

ちゃいました。

前田…うん。

福富…最初、犯人として秘書の浦和さんがすごい怪しいな、って思ってたけど、まあ大体こういう人は犯人じゃないよね、って思ってたなら、案の定犯人じゃなくて。そんな感じでした。「毒は混ぜられたんじゃないーシャンパンが落ちてくるのをずつと待ってたんだ」っていう倒理のセリフが印象的だったなあ、とあってます。実際はどうなのかちよつと微妙ですが、スピーチ台が拭き掃除する前に毒塗らなきゃいけないだろうし。

前田…うん。

福富…どうやって塗るんだろう、とはちよつと思いましたが、人がバタバタしてる中で……、うん、どうなんでしょう、という疑問を持っておりますが。

はい、じゃあ、もちやん、いかがでしょうか？

前田…そうだね、私もほぼ同じ感想かな。なんかめちやくちや犯人

かもって思われているのに、浦和さんひょうひょうとしててすごいな、って。

福富.. そうそう。

前田.. あとはスピーチ台で不思議っていうか、すごい発想だな、って思ったかな。

福富.. どうなんだろう。たぶん、そこまで見込んで浦和さんはスピーチ原稿を書いたわけじゃないよね。

前田.. そうだね。恨みは深そうとは書いてあったけど。めちゃくちゃ大変そうだよな、あの仕事、なんか細かすぎて。でもちゃんとそれを覚えてる人もすごいなあ、って思ってたんだけど。

福富.. はい、じゃあ続いて里沙先輩、いかがですか？

小林.. どうだろ、あんまりこれ覚えてない……。

福富.. 割と印象は弱めですかね。

小林.. 弱めというか最後に持つてかれてる感じかな。

前田.. あー、そうですね。

福富.. 四人の事件の方を持つてかれちゃってますよね。

小林.. 名前とかも忘れちゃうし。

前田.. (笑)

福富.. ま、あまり印象に残らなかつたって感じですかね。

小林.. そうだね。

福富.. 事件本体が。

小林.. この事件が起こった後から細工するっていうのは、なんか辻褄合わせじゃないけど。そういうのもたまにあるけど面白いよね、くらいです。

福富.. では続いて五味さん、いかがですか？

五味.. なんていうか美影の絡む事件って、風刺がすごいな、って。

一同.. あー。

五味.. この政治家に少しでも自分の意志があつたら、この犯罪は成立しないわけじゃないですか。

福富.. 確かに。

五味.. シャンパン飲まないとか、水を飲まないとか。

福富.. その位置じゃないところに立つとかね。

五味.. そう。だから、愚かな政治家っていうのがありありと表れて。私、WHYもそれだと思つたんですよ、政治家が愚かです、って。

福富.. なるほどね。

五味.. だから本当にキレッキレのもの書いてきたなって、私は小林

先輩とは逆にめちゃくちゃ印象に残りましたね。

前田.. おー。

福富.. この作品、意見がどつちもあつて面白いですね。ありがとうございます。

ごさいます。じゃあ最後、杉山さん、いかがですか？

杉山.. たぶん倒理の方だったと思うんですけど、最初に自分で毒を入れちゃったんだ、って。私もそれだと思つてたんですけど。

それだったら限りなく確実ってじゃあ何、って思つて。

一同.. うんうん。

杉山.. その限りなく確実っていうのが最後にちゃんと出てきて、こういうことか、って。その限りなくっていうのが最後に回収されてたなって、伏線なのか分からないんですけど。

福富.. はい。

杉山…あと、なんか倒理と氷雨の二人の関係性がちよつと深堀されてた気がするんですけど、そのキャラの関係性とか、あと五年前とかの。

前田…あー、そうだね。

杉山…そういうのが分かって、すごく次が気になるなっと思いました。

福富…ありがとうございます。

そうだね、私も事件っていうよりも二人の関係性が描かれちゃってる方に意識を奪われてしまっただ。

で、これの二巻の方も宣伝させて（二巻を画面に映す）。

一同…（笑）

福富…まだ文庫になってないんですよ。結構、重い関係性だったなっっていうのが読んだ感想なんですけど。まあ、気になる方は読んでください！

福富…二人探偵ものということで、ある意味異色のバディものだと思うのですが、こんな感じで八月の読書会は終わりにしたいと思います。本日はありがとうございます。

一同…ありがとうございます！

（文責…匿名・杉山）

コナン・ドイル(Conan Doyle)

『バスカヴィル家の犬』

読書会レポート

注意！

これよりコナン・ドイル

『バスカヴィル家の犬』

読書会の様子をお届けします。

小説の内容に関わる**重大なネタバレ**

が含まれていますので、

未読の方はご注意ください。

【某日読書会 (zoom)】

コナン・ドイル(Conan Doyle)『バスカヴィル家の犬』

前田..それではこれからコナン・ドイル著『バスカヴィル家の犬』
についての読書会を始めたいと思います。よろしくお願
いします。

五味..よろしくお願いします。

前田..今回は残念ながら他の方の都合が合わず、前代未聞の二人で
の対談形式みたいな形になってしまったのですが、まずは自
己紹介からやっていきますね。

工学部四年の前田もです。最近は似鳥鶏先生の作品を読ん
でいます。よろしくお願いします。

五味..工学部一年の五味希紗羅です。この読書会のテーマにもなっ
ているシャーロック・ホームズが好きです。よろしくお願
いします。

前田..よろしくお願いします。

じゃあ概要とあらすじから順番に行きますね。

【概要】

『シャーロック・ホームズシリーズ』の長編小説の第三弾。ジャ
ーナリストの友人、ロビンソンから聞いた西部イングランド地方の
黒い魔犬の伝説に着想を得た作品。その人気から何度も映像化され
ており、日本でも来年この作品を原作としたフジテレビ製作のテレ
ビドラマ『シャーロック』の劇場版の公開が発表されている。

【あらすじ】

名家バスカヴィル家の当主が怪死を遂げた。激しくゆがんだ表情
を浮かべた死体の近くには巨大な犬の足跡があり、土地の者は全身
から光を放つ巨大な生き物を目撃していた。それらの事実が示唆す
るのは、忌まわしい(バスカヴィル家の犬)の伝説にほかならな
った……。寂莫とした荒地(ムーア)を舞台に展開する、恐怖と
怪異に満ちた事件の行方は？ シリーズ屈指の傑作長編。
(東京創元社HP)

<http://www.tsogen.co.jp/np/isbn/9784488101213> より)

前田..続いて主な登場人物紹介なのですが、前回と違ってHPなど
に載っているわけではなかったので、ネタバレ込みで今回の
役割等について私が簡単にまとめさせていただきました。

【登場人物紹介】

・シャーロック・ホームズ ..多忙につきロンドンに残っていると
思わせていたが、実は途中から沼沢
地に潜んでいた。

・ジョン・ワトソン ..ヘンリー卿に付き添い、事件に関す
ることをホームズに手紙で報告する
よう頼まれた。

・チャールズ・バスカヴィル..家運の復興に努力していた。伝説に
怯えていたが、急死した。

・ジェームズ・モーターマイヤー..チャールズ卿の主治医かつ友人で今
回の依頼人。

・ヘンリー・バスカヴィル

…チャールズ卿の甥。莫大な遺産を継いだ。ベリルを妻にしたいと考えている。

・バリモア夫妻

…バスカヴィル館の先代からの使用人。夫はチャールズ卿を最後に見た人物かつ死体の第一発見者。

・ジャック・ステープルトン

…博物学者。沼沢地に詳しい。真犯人。実はロジャー・バスカヴィルが本名でチャールズ卿の弟の子。

・ベリル・ステープルトン

…ジャックの妹（実際は妻）。美人。ロンドンに帰るように警告してきた。

・セルデン

…脱獄囚で、沼沢地に潜んでいた。バリモアの妻の弟。ヘンリー卿と間違えられて殺された。

・ローラ・ライオンズ

…チャールズ卿と手紙でやり取りを行っており、亡くなった日に会う約束をしていた。

前田…こんな感じでまとめさせていただいたのですが、いかがでしょう？

五味…他にまとめるべき人物とかいました？

前田…ロジャー・バスカヴィルは書かなくて大丈夫ですかね？

前田…えっと…、ここに書いたステープルトンの本名という意味

ではなくて、チャールズ卿の弟の方かな？

五味…そうですね。

前田…確かに必要かもね。

説明するとしたら、「チャールズ卿の末弟。中央アメリカにて独身で亡くなったと思われていたが、実は同名の息子がいた」みたいな感じでいいかな？

五味…いいと思います。沢山読んでいるのですが、いまだに名前がごっちゃになっちゃって…。

前田…カタカナの名前って覚えづらいよね。

五味…はい。こんな感じで議題の方に移っちゃって大丈夫かな？

前田…まず最初の議題は「事件を解くことができたか？」です。

正直どこで気づけばいいのかというのがあるのですが、私はベリルさんは妹じゃないんじゃないかな？つてのまでは少なくとも辿り着いてただけ…。

五味…なるほど。

前田…この作品って明らかに途中から怪しいのはこの人しかいないじゃん！ つてなったよね？

五味…そうですね。

前田…この作品を解くことができたか？ つていうのも聞きたいけど、解くのを目的とした作品だったのかな？ というのも聞きたいな。

五味…うーん、明確な読者への挑戦状はないですもんね。

前田…そうですね。

五味…私は前にもこの作品を読んだことがあるのですが、確かにベリルが妹じゃないなっていうのはなんとなく分かったし、ステープルトンの兄が怪しいなっていうのも思っていたのです

が……。

前田…うんうん。

五味…恐ろしいものがなんなのかという恐ろしいものの正体、つまりワンちゃんですよ。

前田…なるほど。本当にワンちゃんを使ってみました！ というところ気づけるかが大事なのかな？

あとはどこが大事なポイントなのか、この作品。

一同…うん……。

前田…なんだろう、ホームズが出てくる前に気づけたら勝ちかな？

五味…そうですね！ ホームズが出てくる前に、ステープルトンが

犯人じゃない？ っていうのと、ベリルが妹じゃないんじゃない？ っていうのと……。

前田…実際に犬を使っているんじゃない？ っていう三つに気づければいいのかな。

五味…あとはセルデンが怪しくないっていうのに気づければ……。

あつ、それはバリモア夫妻のおかげで分かっているのか。

前田…そう、それも気になるんだよねー。

最初はセルデンも犯人の可能性が……って思ってたんだけど、時期的にちよつとズレてたよね？ 犯人には関係なかったよな。

五味…どこら辺でしたっけ？

前田…一番最初にセルデンいるから気をつけてねーってところに載っていた気がする。

五味…あつ、六章ですね。

前田…えつと……これか。監獄から逃げてから三日だ！ というこ

とはこの人が直接犯人にはなり得なさそうだよ。

五味…やっぱり容疑者という容疑者はバリモア夫妻とステープルトンだけだったんですね。

前田…セルデンはあくまでヤバイやつがいるからドキドキ……みたいな要因だったのかな。最終的に間違っただけ殺されちゃうからそっち方面もありそうだけど。

五味…やっぱりホームズが来る前に誰が犯人かわかったか、でいいんじゃないですかね。

前田…そうだね。バリモア夫妻の秘密が明かされる前に気づけたら尚良しって感じかな。

五味…はい。バリモア夫妻の秘密が明かされる前は難しいかもしれない。明らかに合図とかしていて怪しいし。

前田…確かにね。明かす前は厳しいか。

妹に関してはわざわざ全然違うタイプの顔をしているってワトソン君が初対面の時に語っていたから、そこから怪しい二人なんだな〜って思いながら読み進めていたんだけどな〜。

まあ、この議題はホームズの前に解ければOKでいいかな。

五味…そうですね！ ホームズの語る前に怪しいとは気づけたのですが、やっぱり確信は持てなかったですね。

前田…私も怪しいのは明らかこの人しかいないけど、どう殺していたかがわからなかったからな。やっぱり最初の靴を持って来た時にホームズと一緒に実際の犬を使ってそうだなって推理することが大事だったのかな。

五味…あとチャールズ卿がハンカチを失くしたみたいなことも言っ

てませんでしたっけ？

前田… Kindleで読んでいるから調べてみるね。

…ハンカチが出てきたのは伝説の方みたいだね。ヒューゴが逃げた娘を探すために犬に嗅がせたって描写があるくらいかな。

五味…勘違いだったみたいで申し訳ないです。でも靴で犬の存在を想起することはなんとなくできそうですよね。

前田…私はなんだろうなってくらいで終わっちゃった。

五味…勘がいい人なら気づけそうですね。

前田…そこがホームズと普通の人の違いだね。

五味…あー、ホームズに負けた…。悔しい。

前田…(笑)

じゃあこの議題はこんなものでいいかな。

五味…そうですね。

前田…次は「冒頭の杖に関する推理について」です。

これは一番最初の依頼人が来たというシーンでわざわざ一回ワトソン君に解かせてから、ホームズが解いていたじゃん？五味…ホームズ、そんなんだから友達がいらないんだよ！ って思

いました(笑)

前田…そうだね(笑)

五味…褒められたと思って喜ぶワトソン君可愛いな。

前田…可愛かったよね。この作品は結構ワトソン君が頑張る話じゃん？

五味…はい。

前田…だから最初にワトソン君も結構成長したんだぜって読者にも

思わせておいて下げるといのが上手いよね。

五味…上手いですねー。ホームズの最初の褒め言葉もワトソン君の頭を褒めているようで褒めていない。

前田…ひどいよね。おかげで自分の推理がよく展開できたよって。

五味…要するに反面教師ってことですよ。

前田…ここが少しおかしいなって思ったところから良い推理をしていくっていう。

五味…それで腹を立ててないワトソン君もワトソン君ですよ。

前田…そうだね、慣れている感じ。

五味…この推理は流石ホームズですよ。

前田…でもワトソン君もホームズと同じ視点というか、着眼点はよかったですね。そこら辺はやっぱり成長を感じさせるところがメインだったのかな。

五味…そうですね。ワトソン君、推理できてるじゃんって思ってたらできてなかったけど、まあホームズも間違えているのでとんとんです。

前田…そうだね。ホームズも少し間違えてたもんね。

五味…てへっ☆ って。

前田…(笑) この議題はこんな感じで大丈夫かな？

五味…はい。

前田…じゃあ次は「ホームズ不在による効果について」です。

登場人物のところにも書いたんだけど、今回はホームズが序盤と終盤にしか登場せず、中盤はホームズが不在だからワト

ソソ君が頑張るっていうのがメインだったと思うんだけど、それによってどんな効果が生まれたかっていうのについて話したいです。

五味…読者からすると、えっ大丈夫かな？ あのホームズがいなかったらちゃんと解決できるのかな？ みたいな。

前田…ドキドキだったよね。

いつもはホームズがサクッと解いちやうから、いたとしたら色々な着眼点からもっと早く解けてはいたかもしれないよね。そこをあえて出さないことで引き伸ばしたっていうと悪い言い方だけど、逆に盛り上がったのかな。

五味…スリルがありましたからね。

前田…うん、この作品はおどろおどろしい感じが結構あったよね。

脱獄囚がいるから気をつけてねとかいう部分も含めて。

五味…あとはワトソン君の方が主人公らしい主人公ではありますよね。

前田…そうだね。語り手じゃなくてメインで情報を集めたりとか。

五味…今回ワトソン君すごく頑張ってたな。

前田…頑張ってたよ……。でもそれをまたホームズが実は途中からいましてって言って怒っちゃやうからね。

五味…流石に怒りますよ！ ワトソン君はあれをとでも頑張ってたんだよ、ホームズ。

前田…ね、毎日必死に手紙を書いたのに。

五味…でもその後ちゃんと手紙を読んでたよって言われて、すぐに機嫌をよくするところとかやっぱ可愛いな。

前田…うんうん。

五味…ほんとにそんなだからホームズは友達が生涯に三人くらいしかないんやでって思いましたね。

前田…もう少し優しくしてあげてもいいじゃん！ ってなるよね。

それはそれでよかったけど。

五味…ダメだよ、友達は大切にしないと。

前田…(笑)

五味…ホームズ不在による効果はそうですね……。

ああダメだ、このままでとホームズにめちゃくちゃイラついたっていう結論になってしまう。

前田…どうまとめればいだろうね。

五味…スリルがあったと同時に、いつもは……例えば『シャーロック・ホームズの冒険』とかはホームズがいるから安心だ、みたいな。なんでしようね、光があるっていう感じですかね。

前田…あー、なるほどね。

五味…これだけは明確に揺るがない光があるから読者は安心して読み進めることができるんですけど。今回はワトソン君っていう不安定な光しかなくて。もしかしたらヘンリー君、殺されちゃうんじゃない？ っていう。

前田…確かにそれはあったかも！ ヘンリー卿は殺されてもおかしくない状況だったもんね。実際にセルデンは間違えて殺されちゃったわけだし。

五味…でもホームズが出てきた途端に安心感というか。

前田…うんうん、もうこれで大丈夫だ！ って気がしたもんね。ワトソン君も同じ気持ちだったし。

五味…まあ、殺されちゃったんですけど。

前田..直後に殺されちゃったよね。

五味..でもワトソン君が言っていたことが全てな気がしますね。

前田..どこのセリフ？

五味..これほど嬉しいことはない、みたいな。

前田..ああ、あったね。ちよつと待ってて……。

第十二章のところだよな。

五味..私をずっと閉じ込めていた闇の向こうに」って書いてあるんですけど。

前田..えつと……。

五味..私を持つているのは角川文庫なんですよ。

前田..私は新潮文庫の Kindle なんだよね。

五味..あー、新潮もいいですよな。

前田..地の文なのはわかるけど、どこのセリフ周辺かな。

五味..ホームズがベリルはステープルトンの妻だよって言った後ですな。

前田..おお、ちよつとここら辺だ。

「今日までながいあいだ私を五里霧中に迷わせた恐ろしいものの姿が、なかば想像もつだって、今や私はようやくわかった気がする」ってところかな？

五味..そこその後にも「私を閉じ込めていた闇が次第に薄れてきたものの」っていう部分が……。

前田..ちよつと待ってね。見つけるのが下手だな……。

五味..五里霧中の後にワトソン君が喋って、その後にホームズの長文があつて、その直後の地の文ですな。

前田..じゃあ訳が違うのかも！

五味..なるほど。

前田..そういうのが訳だとあるのかー。

私のだと「問題は解決されたようでもあるが、考えてみればまだわからないこともたくさんある」って書いてある！

逆になんて書いてあつたの？

五味..私の方は「私を閉じ込めていた闇は次第に薄れてきたものの、まだ多くの部分が影に包まれたまま残っていた」ですな。

前田..あー、かつこいい！ そっちの方が！ こっちの訳もわかりやすいけど。

五味..そういうのは新潮文庫の方が多いイメージだったんですけどね。

前田..じゃあ五里霧中の方はどんな訳だったの？ 五里霧中っていう単語は一緒だったんだね。

五味..五里霧中ではなくて闇ですな。

前田..そこも違かつたんだ。

五味..私をずっと閉じ込めていた闇の向こうに陰湿で不気味な悪巧みが得体の知れない巨大な塊となつて半分見え隠れしている気がした」ですな。

前田..へー、全然違うな。面白いな。

五味..角川文庫はすつきりとしてわかりやすい訳なんです。

前田..うんうん。

五味..ホームズしか読んでないので角川文庫全体に対して言えるわけではないんですけど。

新潮文庫は逆に当時の雰囲気により感じられるようになっていくというか。

前田..確かに単語とかは古めかしいというか。そんな感じにあえてしてる感があるかも。

五味..角川文庫とかで例えば「赤ちゃん」のことを言いたいときに「赤ん坊」って「ん」がひらがななんですけど、新潮文庫は「赤ん坊」ってカタカナの「ン」なことが多いんですよ。ホームズにおいては。

前田..そうなんだ、面白いねー。

五味..よかったです、面白いねっていただいて。これ、人に話すと気持ち悪いってよく言われるんですよ。

前田..そこまで研究してるのがすごいなーって単純に感心しちゃうけどな(笑) どっちも持ってるってこと？

五味..図書館でどっちも読んだことがあるってだけです。

前田..へー。それって直接見比べているわけじゃなくて、こっちとあっちで印象違うなっていう感じの読み方してるの？

五味..はい、そうです。

前田..おー！ すごいね。

五味..すいません、お恥ずかしいといつかなんていうか。

前田..いやいや、すごいことだよ。

五味..それで訳が違うから読み比べると面白いですけど、「五里霧中」と「闇」っていう風に違うんですね。

でもワトソン君が暗闇だったり霧の中にいて、ホームズが来た途端に闇や霧が晴れたっていう……。それと同じ印象を読者は抱いたんじゃないでしょうか。

前田..確かにそうだね。

五味..ベリルが妹じゃないっていう確信はそれまでなくて、でもホ

ームズがはつきりと妻だよって言うてくれて。ホームズが言うならそうなんだ！ って。

前田..それもあるかも！ ワトソン君もきつと同じような気持ちだったよね。多少はこの二人の顔つきとかが違うなとか思ってたけど、ホームズが確信を持って言うてくれることで、やっぱりそうなんだって。

五味..安心感。

前田..なるほどねー。

五味..ホームズ不在の効果、面白かったですね。

前田..そうだね。いつものサクサク解く感じも楽しいけど、今回のドキドキ感も面白かったね。

じゃあこの議題は大丈夫かな？ 語りたいなら聞くけど。

五味..大丈夫です。まだ話題は沢山あるので(笑)

前田..じゃあ次は「警告を出した犯人には気づけたか？」です。あ、警告は最初の手紙の方ね。

五味..はい。

前田..これって最後の最後で種明かしされるじゃん？ 正直私はステープルトンが犯人だった後すっかり忘れてたし、犯人には気づけなかったです。

五味..警告を出したのはベリルですよ？

前田..ホームズがそう言うてたよね。

五味..これは最初になんとなくベリルが帰った方がいいですって言うていてから察しはつきますよね。

前田..あー、ついてたんだ。じゃあそこからステープルトンが夫

てところまで辿り着けるのかな。

五味..流石にそこまで一足飛びに推理できる人は少なそうですね。

前田..そっか。

五味..逆にお兄ちゃんだからこそ危険って言う妹も見受けられますし。ただ警告を出した犯人自身にはわりと気づけるんじゃないですかね。

前田..そうだね。勘違いしたワトソン君だけじゃなくて、ヘンリー卿にもわざわざ言い直したりとか何度も言ってきたりとかしてるところから、兄であるステープルトンが怪しいっていうのはなんとなくたどり着けるのかな。

この議題はどうだったか聞きたかっただけなので、こんな感じで大丈夫かな。

五味..はい。

前田..次は蛇足に近いんですけど、「燐で炎を吐いているように見せることが実際にできるのか？」です。

そもそも燐ってそんなに発光するのかな？

五味..この作品の舞台は十九世紀の田舎で街灯も何もなかったみたいなんですよ。

前田..うん。

五味..街灯がないからこそ僅かな光でもすごく目立つみたいな感じがするんですけど、炎を吐いているように見せることができるかまでは……。

前田..光るのまでは理解できるんだけどね。

そういうええお墓で人魂のように見えてたのは燐って話もある

よね。

五味..ありましたね。

前田..それと同じ感じなのかな。

五味..モヤモヤして見えたのが炎のように感じたんですね。実写化もしているのですがその時はどうしたんでしょうね。

前田..確かに。見たことないからな。調べてみようか。

五味..……うーん、目が光っている犬ならちよいちよい出てくるんですけどね。でもこれが急に目の前に現れたら怖いかもしれないです。

前田..うん。光らなくても十分怖いかもしれない、こんなに大きいらなかったら。あ、でも光らないと黒いから気づけないのかな。

五味..街灯とかろくにない田舎町を歩いていたら、犬がドーンって現れたら怖いかもしれないですね。

前田..そりゃ心臓止まっちゃうわって感じだよ。

五味..私も心臓止まっちゃうと思います、現代でも。

前田..しかも心臓止まらなくてもお腹空かせてるから嘔み付いてくるのも怖いよね。

五味..普通死んじやいますよね。ライオンとかに例えられてたような……。

前田..言ってたね！「小さな雌のライオンほどもあって」って書いてあるね。

あと「純粹のブラッドハウンドでもなし、マスティフでもない。おそらく両方の雑種であろう」とも書いてあるけど調べたらどっちもすごくでかいよね。

五味..そうですね、このサイズに襲われたと思うと恐ろしいですね。

前田..あと本題に戻るけど、調べてたら当時マツチに使われてたから手に入れやすかったつてもものありそうだな、と。

五味..なるほど。当時は毒薬でも薬局で買えましたもんね。

前田..それにしても燐って当時取扱いに困ってた印象があるけどな。

五味..相当ベタベタに塗りつけたりしたんでしょうね。

前田..犬が一番かわいそうだよね。

あとこういう場合って黄燐と赤燐どっちを使うのが一般的なのかな？

五味..匂いを取り除いたって書いてあるので、あまり黄燐ではなさそうですね。確か黄燐の匂いの方が強かった気がするのです。

前田..黄燐の方が危険なんだっけ？

五味..それもありませんね。ただステープルトン君がそこまで考えてくれるのかな。

前田..ね、考えてくれなさそう。

五味..匂いを取り除くことなんて可能なのかな？ 燐って結構すごい匂いがするって言いますよね。

前田..「上手に犬の嗅覚を害さないようにしてある」って書いてあるから鼻の周りを回避しただけなのかなって思ってたけど、それでも臭いか。

五味..そうですね。あと「青白い炎のような輝きが滴り落ち」っていうのが単なる睡でワトソン君が誇張して書いているのか、口の中に燐が塗ってあったかもわかんないですね。

燐って猛毒ではないでしょうかから口の中に入れても苦しむだけで死にはしませんよね。

前田..そうだね。

五味..ワトソン君、結構誇張するから普通によだれの可能性もあるな(笑)

前田..一応伝聞形式というかあったことを書いている形式じゃないかな？だからめっちゃくちゃ怖い犬に遭遇したら誇張して書いちゃうのも仕方ない気がするけどな(笑)

五味..常に誇張するんですよ、ワトソン君！

前田..確かにそれもあるか。

あと燐ってそもそも食べ物にも含まれているから多少摂取しても問題ないのかな。

五味..議題に戻りますけど、「燐で炎を吐いているように見せることが実際にできるのか？」っていうのは口の中に塗ることができれば可能そうですね。

前田..うん。口の中に塗って唾とかを吐き出した瞬間にボワって光っているのが炎みたいに見えるってことなのかな？

五味..そうですね。私はやはり十九世紀という時代に先入観があるんですけど、科学がそこまで発達しておらず科学と伝説が入り混じっている状態だと私は思うんですよ。

前田..うんうん。

五味..なので口の中が光っているというだけで実際に何かを吐いている訳ではない状態でも炎を吐いているっていうふうに見えるんじゃないかなって思ってます。

前田..なるほど。今の人よりも迷信深いついていう側面があったって

いうのはあるかもね。

五味.. そうなんです。ワトソン君とかも医者で科学の人ではあるのですが、十九世紀の人なので……。

前田.. 今の医者とは知識量が絶対違うよね。

五味.. 口の中が光るとかありえないですもんね。なので私は口の中が光っているだけでも実際に炎を吐いているように見せることができると思います。

前田.. なるほど。じゃあこの議題のまとめはそれで、あとは再現する実写に期待ってことでいいかな？

五味.. はい。今度公開されるフジテレビ製作の『シャーロック』の劇場版ではCGかもしれないませんが、ぜひ元ネタの燐を使っ
て欲しいですね！

前田.. そうだね。犬に有害でなければ是非とも使って欲しいよね。

五味.. あと燐がダメでも、今なら燐以外の無害な発光物質が見つかるってそうなのでそちらにも期待です！

前田.. じゃあ次の議題、「なぜワトソンをカートライトに尾けさせたのか？」です。これって明確な理由が書かれてたっけ？

五味.. 確か心配だったからって言ってたような……。

前田.. これ、尾けさせてたって言ったのも余計に怒ったと思うんだよね。

五味.. (笑) あ、終盤の「追想」に書いてありますね。

前田.. ここか。「僕がつねにあらゆる方面に接触をたもっていられるようにしてくれた」って書いてあるね。他はパツと見つからないけど、やっぱり心配だったってことでいいのかな？

五味.. あとワトソン君に接触する情報を見逃しなかったとか？

でもなワトソン君に関しては完璧に信用しているところがあるからな。

前田.. うん、わざわざ追加情報を……って言ったらさらに怒っちゃうよね。そういうのじゃあまりなさそうな感じだけど。

五味.. すごく失礼な男なんですけどお世辞は言わないですよ、彼。大いに役立ったよって言うてるから全面的に信頼してるってのは間違いないことで。

前田.. うんうん。

五味.. なので先輩の言う通り心配だったからかもですね。ありえないですけど、ヘンリーと間違われて魔犬に襲われる可能性もあつたわけですし。

前田.. そうだね、そういう防犯目的も兼ねてたのかな？

五味.. あとはステープルトンのことは結構早めに疑っていたじゃないですか。

前田.. 今回はすごい敵だからちゃんとした証拠が出るまではあえて泳がせてたって感じだったもんね。

五味.. やっぱ狡猾な男なのでワトソン君が危害を加えられないかなって心配なんでしょうね。

前田.. そうだね。

五味.. 心配だったってことしておきましょう。じゃないとホームズがひどい男すぎるから。

前田.. そうだね(笑) あとはもしもの時の連絡用ってことで。本当に違かったらかわいそうだからここまでにしておこう！

五味.. はい。

前田…じゃあ次、「情景描写について」です。これはさっき割と語っ

ちゃったけど、この作品は本当におどろおどろしかったよね。

五味…そこら辺は流石ワトソン君ですよ。

前田…沼沢地のポニーが死んでゆくシーンとか怖かったよね。

五味…あの描写が怖くて。コナン・ドイルを褒めるべきなのかもしれないのですが。ホームズが書いたっていう体の作品も読んだことがあるんですけど、すごく情景描写がしょっぱくて。

前田…しょっぱい？ あまり良くなかったってこと？

五味…物語としてはあんまり面白くなかったです。この二作品だけ別の人が書いたんじゃない？ って感じでした。

コナン・ドイルの腕がそこら辺が見事なのかもしれないですけど、やっぱり明確にワトソン君は小説を書くのが得意で、ホームズは事件ファイルしか書けないみたい。

前田…そうなんだ。

五味…情景描写が上手いっていうのもやはりワトソン君が活躍している証なのかもしれません。

前田…なるほど。読者が没頭できる形で残してくれてありがとうって感じだね。

五味…そうですね。

前田…この話題はこんな感じで大丈夫かな？

五味…大丈夫です。

前田…じゃあ最後の議題「二人の関係性について」です。せっかく

「バディもの」がテーマなのでこの議題を入れました。

五味…二人の関係については既に大体語り尽くしてしまったような

気がします。ホームズがひどい男っていう感じで。

前田…そうだね（笑）

でも怪しい人影がホームズってわかった時にすごく怒っているけど、なんだかんだ絆されちゃうのがこの二人の関係なんだろうな。最初の杖の描写もそうだけ。

だからこそやっていけるんだらうね。

五味…そうですね。ワトソン君、大人やで。

前田…（笑）

五味…これからこの作品に限定しない二人の関係性について語っちゃてもいいですかね？

前田…どうぞ。

五味…さっき言った通り、ホームズは物語を書くのが下手なんです。だから名探偵ホームズという物語にはワトソン君っていう素晴らしい語り手が必要なのかなって。

前田…確かにね。

五味…ホームズってちよいちよいシリーズ内でワトソン君の小説をデイスるんですよ。事件ファイルが見たいのにこれじゃエンタメ小説だよ、みたいな。

前田…そうなんだ。

五味…そのくせホームズはワトソン君のことを「僕の専門の伝記作家」とか、サミュエル・ジョンソンの伝記作家として有名なジェイムズ・ボズウェルに準えて「僕のボズウェル」とか言うんですよ。

前田…うんうん。

五味…ちよいちよいお前の作品気に入らね〜って言う癖に気に入ってんじゃん、みたいな。

前田…(笑)

五味…なんだかんだホームズはワトソン君の物を書く才能を認めているのかなって。

前田…なるほどね〜。

この作品は二人が対等な関係だよってというのがシリーズの中でもよくわかる作品だった気がする。

五味…確かにそうですね。

…対等な関係性。だから『バスカヴィル家の犬』は名作なんだな〜。

前田…色々信頼しているからこそ一人だけで捜査させたりとか良い関係なんだっていうのが伝わってくる作品だったかな。

五味…ホームズなりの信頼が垣間見れるし、ワトソン君もなんだかんだ探偵としてのホームズを信頼し切っているっていうのがわかりましたし、バディものとしても良い作品でしたよね。

前田…そうだね！ 今回の読書会にシリーズの中でもあえてこれを選んでよかったなっていう作品でしたね。

五味…この作品に対してちよとした蛇足みたいなものがあるんですけどいいですか？

前田…どうぞ！

五味…この作品って前作の最後の事件でホームズが死んでるって言われた後に出されたものなんですよ。

前田…そうだね。

五味…十年間くらいホームズは死んでいたんですけど、その間に出した作品で。ファン待望の作品だったんですよ。

前田…過去の作品ですよってことで生き返らせたんだったよな。

五味…だからコナン・ドイルがロビンソンから聞いたって書いてあるんですけど、コナン・ドイルもホームズが死んだ間にどこかを巡ったりとかして物語を考える時間がたっぷりあったんですよ。

前田…そうなんだ。

五味…だからこそワトソン君視点での素晴らしい情景描写ができたのかなって思いますね。

前田…なるほどね。

五味…これ、情景描写のところで言っておけばよかったな〜！

前田…(笑) まあ、蛇足なのでいいのでは。

五味…ホームズが『最後の事件』で死んでから十年、作品内では三年後に帰ってきてくれたのですが、ワトソン君はこの作品を死んだと思ってるのか、それとも生きてると思ってるのかかわかんないんですよ。

前田…あー、私的には生きているうちに書いた作品なのかなって思ってたんだけど。

五味…なるほど。

前田…そうじゃなかったらもつと物悲しい感じで書いてそうな気がするな。

五味…ホームズが死んでる間に出されたということでもファンにとっても非常にかげがえのない作品なんですよ。十年…、十年ですよ!?

前田…今なら連続して読めちゃうけど、十年って考えたらずごいよね。

五味…十年間、推しが死んでることを考えてくださいよ！

前田…絶対いやだな！

終わってしまった…って自分の中で区切りをつけてたのに、急に過去編が出たら、うわー！ ってなっちゃうし、十年後に完全復活されたら心臓が耐えられない…。

五味…当時のホームズファンはすごく熱狂的でコナン・ドイルの家の前でデモをやったりしたんですよ。

前田…そこまですごいのか。

五味…やばい、ホームズに関する小話が止まらないんですけど、もうちょっといいですか？

前田…いいよ、全然聞くよ。

五味…コナン・ドイルが『シャーロック・ホームズシリーズ』を終わらせたがっていたっていうのは結構有名な話なんですけど。

前田…確かに聞いたことあるかも。

五味…片手間に書いたものが大成してしまったみたいな。だからコナン・ドイルがわりと早くホームズを殺したがっていたっていう節があるので、そう思うと復活させたのにも哀愁が出てきますよね。

前田…なるほど。

五味…ただ殺したがってはいましたけど、恩師であるジョセフ・ベル博士をモデルに書いているので嫌いではないんじゃないかなと…。まあ『バスカヴィル家の犬』を書けたので、嫌い

じゃないかもしれないって思いますね。

前田…嫌いじゃ書けないよね。この作品は。

五味…大好きだけど死んで欲しかったんですね。

前田…うん。ホームズが死ぬ前は本当に忙しかったみたいだしね。

五味…でも一本書くだけで確か五十万くらい…。もっともらえてたかもしれません。

前田…書き上がった後だけでなく、印税もあるしね。

五味…そう、がっぽりがっぽ入ったんですよ。

前田…すごいよね。

五味…やばい、そろそろまとめなきゃですよ。

でもまだ語りたいな。

前田…そういうの聞くの大好きなのでまだあれば聞くよ？

五味…もつと語りたいけど、結局この作品の感想を言うとしたら、

ホームズがひどい男になっちゃう。

前田…(笑)

五味…ホームズのプロローグをしておくですね。ホームズは基本的に友達のが大好きだよ、ってことを最後に言っておきたくて。

前田…うんうん。

五味…ホームズが死んだ後、ワトソン君は奥さんが死んじゃってずっと一人で診療所をやっていたんですよ。ホームズは沢山お金を持っているので、裏から手を回して遠い親戚を通じてワトソン君の診療所を買うんですよ。「またベイカー街に戻ってきなよ、寂しいでしょ」って気遣いのできる男であるということを一応ここで言っておきます。

前田…続きをちゃんと読み切れてなかったのだけれども、読まなき

やなという気になりました。ありがとうございます！

五味…お願いします！

My s P h i l i a を読む方々にも言うておきたいのですけれども、ホームズの全作品を読んでください!! そしてできればパロディものにもできれば目を通していただきたい!!

前田…おぉ。オススメも今のうちに言うておく？

五味…パロディものオススメですか？

『シャーロック・ホームズ対ドラキュラ』っていう古典的なパロディがあるんですけど、ホームズがドラキュラをロンドンから追い出す話です。

逆に超常現象的なものが一切ないのでオススメなのは『シャーロック・ホームズ クリスマスの依頼人』っていうのが私は好きですね。アンソロジーなんですけど、色々な作家さんがホームズのことを書いててすごく嬉しかったです。

前田…わかりました。それも含めて挑戦してみます。

五味…ドラキュラは見つかりやすいですけど、クリスマスの依頼人は見つかりにくいかもしれません。パロディは無理をせずに全シリーズだけでも……!!

前田…(笑)

五味…六十作品くらいしかないで……!!

前田…そう言われると結構あるね。

五味…あとドラマもすごく面白いのでぜひ。

前田…BBC製作の『S H E R L O C K』なら軽く観たことあるか

な。良い変人感が出てた気がする。

五味…でも原作読んでみると意外とホームズは変人でもないんですよ。友達に関する扱いだけがひどいけど、他は女性に対しても結構優しい完璧な紳士という感じなんですけど。

現代版は日本の作品も含め、変人とかにして人間味を盛り上げている部分がありますね。

前田…そうだったんだ。

五味…色々なホームズがいて嬉しいなって感じですね。

前田…(笑)

本当にファンだっというのがよく伝わってきてきますね。

五味…お恥ずかしい……。

前田…こんな感じで大体語れたかな？ まだあるなら聞くけど。

五味…大丈夫です。これが最古典のパロディものっていうと『モルグ街の殺人』があるので言い過ぎですが、やれてよかったです。

前田…そうだね。普通の人にとってもパロディものといえば『シャーロック・ホームズシリーズ』っていう感じでイメージしやすい作品だろうし。

じゃあ読書会はこれで終わりということで大丈夫かな？

五味…はい！

一同…ありがとうございます。

(文責…吉田しおり)

『ヴァンパイアトウナイト!』

月影星乃

怪物、と聞いて、君は何を思い浮かべる？

満月の夜に牙をむく、毛むくじやらの狼男？ 包帯ぐるぐる、呪いのミイラ？ ツギハギだらけのフランケンシュタイン？ それとも生きている死体、ゾンビとか？

待て待て、一番大事な奴を忘れていないか？ 生き血を啜る不死の化け物、そう、俺たち吸血鬼、ヴァンパイア様だ。

魔法が科学に制圧された現代。夜も眠らぬ摩天楼に、最早俺たちの居場所はない。人々は闇夜の恐ろしさを忘れ、ざらついたネオンの元を悠々と闊歩している。

しかし、忘れてはならない。いくら世界を人工光で埋め尽くそうと画策しても、光あるところには必ず闇がある。俺たち怪物は、片隅の漆黒の中に、今も息を潜めているのだ。

いつか返り咲く日を見ながら、自分の居場所を求めて、吸血鬼は今日も夜へ行く――。

「――悔い改めなさいっ、この吸血鬼!」

「ギャー! 痛い!」

全身を刺すような痛みが走り、俺は夢の縁から引きずり出された。目を見開いて飛び起きると、修道女のシルエットが銃口をこちらに向けていた。彼女の背後から、忌々しい太陽光線が降り注いでいる。

俺は慌てて両手で顔を覆い、情けない声で命乞いをした。

「待て待て! 殺さないでくれえ! 急に何だっというんだ、裏切りだあ」

「それはこっちの台詞です。これは一体全体どういうことですか? 説明してください」

銃を下ろしたアビーは、代わりに新聞を広げてみせた。

「とりあえずカーテンを閉めてくれ……」

必死で太陽光から棺桶の蓋で身を守る俺を一瞥し、アビーは無言でカーテンを閉めた。俺は大きく安堵の息をつき、それから新聞の一面を飾っている記事に目をやった。

『セントエリザに吸血鬼現る!』

十月二十八日午前八時一〇分ごろ、セントエリザ市・ブラム通り周辺の路地裏にて、女性の遺体が発見された。セントエリザ市警によると、被害者はルーシー・ウエスト、二十八歳。遺体は全身の血液を失っており、首筋に二つの刺創があるという。

第一発見者の三十代男性は、「まるで吸血鬼に襲われたかのようなった」と話した。

キングストーク市やノースファニユ市でも同様の事件が起こっており、人々の間では吸血鬼が国中を闊歩しているともっぱらの噂に……。

「……は? 吸血鬼だっつて?」

「貴方の仕事でしょう」

記事を読んでぼかんとしている俺に、アビーが再び銃を向けてき

たので、俺は猛烈な勢いで首を横に振った。

「違うって！ 血は吸わないうって約束したじゃないか。お前に知られたら殺されるのに、こんなバレバレな事件を起こすわけがないだろ。だからとにかく銃を下ろしてくれ」

必死の弁解はひとまず成功したようで、アビーは渋々といった表情で銃を下ろした。

「分かりました、一旦信じてあげましょう。でも、貴方でないならば誰がやったというのです？」

「俺以外の吸血鬼がこの街に来たんじゃないか。この記事曰く、他の街でも似たような事件が起きてるんだろ」

俺は新聞記事を指さした。アビーは少し眉を上げ、顎に手を当てた。

「確かに、貴方以外の吸血鬼がこの国に来ている可能性が無いとは言えませんが……しかし貴方、以前に『吸血鬼は縄張り意識が強いから、他の奴が居座つてるところには行かないよ』とか何とかおっしゃっていませんか？」

「そりやそうなんだけども、普通の吸血鬼は大々的に血を吸いまくるからそこに居るって分かるわけ。俺みたいに禁血して教会なんか居候したら、相手からは分からんよ」

アビーはあからさまに不審そうな眼で俺を見てきた。もう少し信用してくれても罰は当たらないと思うのだが。

「お仲間の気配を察知できたりしないのですか？」

「うーん……相手が目の前にいたら同族の気配は感じられるけど、同じ街にいるかどうかまでは無理だよ。この街結構広いし」

俺がそう答えると、アビーは小さく舌打ちをして、役立たず、と

呟いた。おい、聞こえてるぞ。

「そっちこそ、ヴァンパイアハンター様なら居場所ぐらい探し当てられるんじゃないのか？」

「残念ながら、我々ヴァンパイアハンターは現行犯逮捕が基本です」

俺の質問に、アビーは全く残念そうではない顔で答えた。

「……つまり、現行犯じゃなければ分からないと」

「そうとも言えますね」

自分だつて役立たずじゃないか！——危うくそう言ってしまうようになったが、言ったら殺されかねないので何とか飲み込んだ。

「あー、とにかく、俺はやってないよ。二十八日の朝に発見されたつてことは、事件が起きたのは二十七日——昨日の夜だろ？ その日は教会の外に出てない」

「それ、証明できますか？」

「できるわけないだろ。このしょぼい教会には俺とお前しかいないし、お前は呑気に熟睡してただろうが」

俺の返事を聞いてアビーは鼻を鳴らした。あからさまに馬鹿にされてる。

「つまり、アリバイは無いに等しいと。ますます貴方が犯人であるという確信が強まりました」

「おい、本当に違うんだって、信じてくれよ。無実を証明する方法なんてないし……」

こうなつたら情に訴えるしかない、と必死に縋りつく俺を一瞥し、アビーはやれやれとばかりに首を振ってこう言った。

「ありますよ」

「え？」

俺が間抜けな声をあげると、アビーは俺を指さして続けた。

「真犯人を見つければ良いのです。貴方が」

「……俺に探偵ごっこをやれつてか？」

「その通りです。嫌なんですか？」

嫌だと言ったら即射殺されそうな雰囲気である。これが恐喝つてやつか。

「いや、良いけどさ。もし俺以外の吸血鬼がいるならお灸をすえてやりたいいな。いくら禁血中とはいえ、この街は俺の縄張りなんだから」

「それは良かった。ですが、貴方のようなお馬鹿さんが一人で事件を解決できるとは私も思っていない。なので、私も少しは協力してあげましょう」

ものすごく馬鹿にされている。だが、俺一人で犯人探しができるとは思えないのも事実。日光が駄目だから、昼間の捜査は是非アビーに任せたいところだ。しかし――。

「何でそんなに俺に協力的なんだ？ 怖いぞ」

「あら、失礼ですね。最近、『もう人間社会に俺の居場所はないんだあ』とかなんとか泣き言を言っていたでしょう。ですから活躍の場を設けて差し上げようかという親切心ですよ」

「……本当にそれだけか？」

コイツが俺にタダで優しくするとは思えない。警戒する俺に、アビーはあっけらかんと答えた。

「まさか。この被害者女性はうちの教会員です。数少ない信徒を失ったことは、我が教会にとって大打撃ですからね」

本日は雲一つない快晴である。あの吸血鬼が外に出たがらないわけだ。私は天を仰いでうーん、と大きく伸びをした。

ブルム通りは野次馬でにぎわっていた。私は人混みをかき分けつつ、一直線に黄色いテープの張られた事件現場に向かった。

普通ならば、ただの一般人である私に事件の詳細を知ることには不可能だ。だが、私には一つ策があった。

「ハワード警部」

テープの向こう側でこちらに背を向けているのっぽの男にそう呼びかけると、彼は肩をびくりと震わせて振り向いた。

「ああ、シスター・ハーシング！ 驚かせないでください」

声の主が私だと分かると、ハワード警部の怯えたような目はたちまち安堵の色に変わった。

ハワード警部は我が教会の教会員の中で一番と言っても良いほどの熱心な信徒だ。真面目で敬虔、信徒としては文句なく素晴らしい人物である……が、この男には一つ欠点がある。それは――。

「丁度良いところに来てくださいました。ほら、被害者のウェストさんはシスターの教会によくいらしていましたでしょうか？ 是非シスターにお話しせねばと思っていたところです。シスターならば、何か糸口を掴んでくださると信じています」

――私を信頼しすぎていることである。シスターなんて犯罪に対してはまるで素人なのに、どうやら警部は私のことを万能の聖女だとも思っているらしい。

まあ、今回ばかりは好都合だ。存分に利用させていただこう。

「お役に立てればよいのですが。——ウェストさんの首筋には傷があったとか。写真などありますか？」

「そうなんですよ。まるで吸血鬼の牙のような——ああ我が主よ、何と恐ろしい！」

大げさに主に祈り始めた警部を横目に、私は彼の差し出してきた遺体の写真を受け取ろうとした。その時、写真の端が人差し指に掠つてしまい、私は思わず声をあげた。

「痛っ」

「シスター！ 大丈夫ですか？ やはり吸血鬼の呪いが——」

「少し切っただけです。ご心配なく」

大仰な反応をしている警部をたしなめる。小さな切り傷ができてしまったが、紙で指を切るなどよくあることだ。私は気持ちを切り替えて写真を眺めた。

事前情報の通り、首元に二つの傷があった。想像していたよりも損傷が甚だしい。錐を無造作に刺したまま乱雑にかき回した、といった印象だ。

記事を読んだ段階では、注射器で人間が血を採取した可能性——抜いた血を何に使うかはさておき——も考えていたが、注射針ではこんな傷にはならないだろう。

「死因は失血死なのですか？」

「そうですね。頸動脈に傷があることから、吸血鬼に噛みつかれた瞬間にほぼ意識は失っていたでしょうが」

……どうやら警部は、完全に吸血鬼の犯行だと信じ込んでいるらしい。一般市民ならともかく、警察官がこれで本当に大丈夫なのだろうか。

「全身の血液が抜かれていたそうですね」

「はい。見て下さい、遺体はベンチの上に寝かされていたのですが、ベンチや下の地面に付着している血液は少量でしょう？ 全身の血を失った死体なのに、ですよ。これは吸血鬼が、被害者の身体中の血を全て吸いつくしてしまつたに違いありません！」

警部はヒステリックに悲鳴をあげた。……市民の安全をこの人に任せておいて良いのか、いよいよ不安になってきた。

私は死体があったというベンチを確認した。確かに、全身の血液が無くなっていたにしては血の量が少ない。

「何か分かりましたか、シスター？」

警部が期待を込めたまなざしで見つめてきた。プロの貴方が分かってないのに今来た素人の私に分かるわけないでしょうが、と言いつつそうになったのをこらえ、私は大げさに嘆息してみせた。

「申し訳ございません、これだけでは何も掴めそうにありません。

また何か新しい情報がありましたら教えて下さい」

「勿論です、シスター！」

力強く領いた警部に軽く手を振り、私は現場を後にした。あまり情報は得られなかったが、まあ収穫が無かつたわけではない。

現状だと、やはり吸血鬼の仕業という線が濃厚な気がする。他の街でも同様の事件が起きていることを鑑みるに、やはり放浪の吸血鬼がいるのだろうか。……アイツが犯人でないというのを信じるならば、だが。

「シスター・アビー！」

名前を呼ばれて振り向くと、酒屋の入り口からショートヘアの女性が大きく手を振っていた。

「モーリスさん」

彼女、クイン・モーリスもまた、故ルーシーやハワード警部と同じくうちの教会員である。

「新しいフルボディの赤ワインが出来たの。良かったらちよつと飲んでみない？」

そう言うと、モーリス夫人は試飲用の小さい紙コップにワインを注いで私に差し出してきた。

「あら、そうなのですか。せっかくですから一口頂きますわ」

私は紙コップを受け取った。私の宗教は特に酒類を禁じていない。修道女である以上積極的に飲酒することこそ控えているが、実のところワインはかなり好んでいるのだ。

紙コップを覗き込むと、そこには赤みを帯びた、不透明な黒い液体が揺れていた。紙コップに口を付けて一口飲むと、重厚感のあるスパイシーな風味が喉を落ちていった。

「どうかしら？」

「とても美味しいです。やはりフルボディのワインは飲みごたえがありますね」

「でしよう？ 自信の新作よ。名付けて、『ヴァンパイアの生贄』！これは売れるわよ！ アビーも一本いかが？」

……商魂が逞しいようで何よりだ。まあ良い。せっかくだから我が家の吸血鬼への捧げものにしてやろう。

『ヴァンパイアの生贄』を一本購入して酒屋を後にする。さて教会へ帰ろう、と早足で歩き始め、パン屋の前を通り過ぎようとした時、ふと明日の朝食用の食パンが切れていたことを思い出した。

立ち止まってパン屋の扉をくぐり、トレイとトングを手に持った。

陳列棚を見回して食パンを探していると、ある商品が目にとまった。

「……『ドラキュラ・ラスク』……？」

私は商品を覗き込んだ。紅色のラスクが数個入ってラッピングされており、説明書きには『トマトを練りこんだ血の色の生地、ガリックで味付けしています。今日のおやつは吸血鬼気分！』と説明書きが添えられている。吸血鬼気分って、ガリックは吸血鬼の敵だろうに——いや、そういえば実際はどうなのだろう。本当は意外と食べられるかもしれない。せっかくだからアイツで試してみようか。

少し迷った挙句、私はラスクと食パンをトレイに乗せてレジへ向かった。吸血鬼への追加の供物だ。

「いらっしやい」

私の気配に気が付いた店主が奥から出てきた。私はラスクを指さして彼に尋ねてみた。

「このラスクは新商品ですか？」

「もうすぐハロウィンだからね、前々からレシビは考えていたんだ。そんな時に例の吸血鬼事件だろ？ これはもう便乗するしかない！ ってね。色んな店が吸血鬼グッズを推してるよ。飲食系はうちとモーリスさんの酒屋ぐらいみたいだけだね」

「……そうなのですか」

どうやらこの辺りでは便乗商法が流行っているらしい。別にどんな商売をしようと自由ではあるが、流石に昨日の今日では不謹慎ではなからうか。

パンの入った袋を抱えて店を出る。事件の情報よりも土産物の方が多くなってしまったな、と考えながら、私は家路を辿って歩き出

した。

「ただいま戻りました」

「おう、おかえり」

アビーの声を聞きつけ、俺は上昇する灯油タンクの液面から目を離し、立ち上がって振り向いた。

「あら、何やら油臭いと思ったら。もう石油ストーブを出すのですか」

「いいだろ、地下室は寒いんだよ」

俺はそう言いながら再びしゃがみ込んだ。タンクが満杯になりそうなところでポンプのつまみを開ける。以前アビーに、今時手動式の灯油ポンプかよ、電動式を買え、と文句を言ったが断られたので、未だに手動式を使っている。

タンクのキャップを閉めながら、俺は油の匂いの中に血の匂いが混じっていることに気が付いた。

「血の匂いがする。どこか怪我でもしたのか？」

俺がそう聞くと、アビーは物凄く嫌そうな顔をした。何故だ。

「……昼間、紙で指を切りました」

「それだけなら何でそんな顔するんだ……」

「目ざとすぎて単純に気持ち悪いです。というか、下手したらセクハラですよ」

心底不愉快そうな声である。こっちは心配してやっただけなのに酷くないか？

「……そりゃあ俺たちからしたら食べ物の匂いなんだから敏感にもなるさ。お前が匂いだけで隣人の夕食を当てると同じだ。特に、ここしばらくは吸ってないから余計に鼻が利く」

俺は赤いポリタンクと灯油タンクを持って立ち上がった。

「そんなことより、夕飯にしようぜ。もう作ってあるからさ」

「そうですね。頂きましょう」

「はいはい。これ置いてくるから待ってろ」

そう言つて俺は地下室へ戻り、ストーブに灯油タンクをセットしてからキッチンへと向かった。居候する以上家事ぐらいはやれ、とアビーに言われているのだ。最近では我ながら腕が上がったと思う。アビーからも中々好評だ。

俺は料理を盛りつけた皿をダイニングまで運び、アビーの前に皿を並べた。それから、対面の席に俺の『夕食』——鉄製のマグカップと、水の入ったグラスを置いた。

「ありがとうございます。——主よ、わたしたちを祝福し——」

アビーがいつものように長つたらしい食前の祈り文句を唱え始めたのを横目に、俺はマグカップを手を取った。マグカップの中には、底が見えないほど大量の黒い錠剤が入っている。俺はマグカップを手を取って錠剤を口に含み、それから一気に水で流し込んだ。

古来より、吸血鬼は血液の代用品として赤ワインやトマトを嗜む、というのは人間たちも良く知っていることだろう。しかし我々がそれらを選んでいった理由は、ただ色が赤くて血っぽい、というその一点のみである。つまり所詮ただの気休めに過ぎず、血の代用というには程遠かった。よって、生きていくためには結局動物の血を啜るしかなかったのである。

だが、科学の発展により人間たちは血液の成分を解明した。そしてその中でも我々吸血鬼に必要な栄養素、それこそが今飲み干したサプリメントに含まれる鉄分だ。

「一々人間や動物を捕まえて血を摂取しなくともこれだけで生きていける。良い時代だな」

「吸血鬼全員が貴方のような思考ならば助かるのですがね」

「俺みたいな血を吸わない吸血鬼、最近は結構増えてるぞ。お前たちハンターが職を失う日も近いな」

俺はフン、と鼻を鳴らして嫌味を言ったが、アビーは全く動じずにお茶を啜った。

「我々ハンター側も吸血鬼の血液離れについては把握していますけれども、別に血を吸おうが吸わなろうが吸血鬼には変わりありませんからね。ハンター協会に首を持っていけば普通に賞金が出ますよ」

「そんなあ……人間は野蛮だ……」

ひっそりと生きているんだから放っておいてほしい。ただでさえ吸血鬼は絶滅危惧種になりかけているんだから、乱獲はやめていただきたいのだが。

「貴方を見つけたのが私で良かったですね。私は優しいハンターですから、人を襲わないならこちらも手出しはしませんよ」

そう言われて、俺はアビーと出会った時のことを思い出した。禁血し始めたばかりの頃、とうとう耐えられず近くにあった牧場に侵入し、家畜の牛に襲い掛かろうとしたところを見つけたのである。全力で土下座して謝罪したら何とかお許しと住処を貰えたのだが、もしあの時狙っていたのが人間だったら、問答無用で首を持ってい

かれていただろう。

「そうそう、忘れるところでした。良ければこちらもお召し上がりください」

その時、唐突にアビーが何かを食卓の上に置いた。どうやらワインボトルのようだ。

「これは……赤ワインか？」

「品名は『ヴァンパイアの生贄』だそうです。新商品だそうです」

「おいおい、あんな事件があったばかりなのに悪趣味だな。便乗商法ってやつか？」

俺はボトルを手を取った。暗い赤色の液体は、なるほど確かに血に似ていなくもない。

「伝承上では、吸血鬼は赤ワインを好むと言いますが、貴方は以前の代用品だと言っていましたね。お好きなわけではないのでしょうか」

「いや、血には劣るだけで嫌いなわけではないさ。そういえばサプリメントに頼り始めてからは飲んでいないな。久しぶりに頂こう」俺はワイングラスにワインを注いだ。華やかな葡萄の香りが鼻腔をくすぐる。グラスに口をつけると、濃厚な風味が口の中に広がった。

「中々美味いじゃないか」

「それは良かった。お土産はもう一つありますよ」

そう言つてアビーは、今度は小さな包みを取り出した。どうやらラスクのような。アビーが袋の封を切った瞬間、ニンニク臭を嗅ぎ取った俺は思わず顔を顰めた。

「……おい、吸血鬼はニンニクが駄目なことくらい知ってるだろ

う。嫌がらせか？」

「なるほど、本当に弱点なのですね。勉強になりました」

「別に食べたなら死ぬわけじゃないけどな。匂いが苦手なんだ。悪いが早く片付けてくれ」

「この程度の量のニンニクでも匂いが分かるのですか。さきほども思いましたが、犬並みに嗅覚が敏感ですな」

そう言いつつ、アビーはラスクを一口齧ると、これ見よがしに美味しそうな顔をした。畜生、トマトは結構好きなのに。ニンニクなんてものが使われてさえないければ……。

恨めし気にアビーの手元を見つめていると、アビーがふと思いついたように言った。

「そういえば被害者は若い女性でしたが、やはり吸血鬼が若い女性の血を好むというのは本当なのですか？」

「いや、その辺は個々の好みだよ。昔、七十歳以上の爺の血しか吸いたくない、なんて奴と会ったことあるしな。俺は貧乏舌だから特に選り好みはしないよ。まあ、動物よりは人間の血の方が好きだが——それにしても、全身の血を飲むなんて変わり者だな」

「変わり者、とは？」

「俺たちが血を吸う理由は、食事以外に繁殖目的でもあるのは知っているだろう」

そう言うと、アビーは頷いた。

「はい。血を吸われた人も吸血鬼になってしまふのですよね。それこそ、我々ハンターが貴方たちを殲滅しようとする最大の理由だから」

「殲滅って……。まあとにかく、仲間を増やしたいわけだよ。でも、

吸血する時点で殺したらそこで終わりなんだ。仲間にしたいなら死なないぐらいの量、大体三分の一ぐらいで吸うのを止めるもんなんだよ」

「食欲の方が勝れば飲み干すこともあるのでは？」

「それだけ腹減ってたら普通は動物を狙うんだよ。動物を仲間にする必要はないから、飲み干して殺しちゃっても問題ない。だから変わり者って言ったんだ。人間の血を吸いつくすなんてリスクが高すぎる。もしやらかしたとしても、せめて死体は隠すよ」

俺がそう答えると、アビーは考え込むような顔になって黙ってしまった。俺はごちそうさま、と言って椅子から立ち上がった。

「さて、夜は俺の出番だな。まあ、せいぜい吸血鬼仲間が見つかるよう努力するよ」

教会の扉を開けた瞬間、俺は無意識に目を細めた。

眩しい。太陽よりはましたが、これでは昼間と変わらない。何故人間はどこもかしこも明るくしたがるのだろうか。全くもって不愉快である。

ところで、同族を探すといっても、居場所の検討など全くつかない。だが、あんなに大々的に血を吸うような奴なら案外簡単に見つかるかもしれないな。

とりあえず、まずは事件現場に向かおう。犯人は現場に戻ると言うしな。そう決めた俺はプラム通りの方へ足を進めた。教会から件の通りまでは一〇分とかからない。

漂ってくる血の匂いを頼りに現場に到着すると、そこにはまだ警官がいた。深夜までご苦労なことだ。

流石にこのままでは現場に入れてもらえないだろう。俺は周囲に誰もいないことを確認し、自分の姿をコウモリに変えた。俺たち吸血鬼はこうしてコウモリに化けることができる。この姿で上から現場を見せてもらおう。俺は警官たちの真上にある屋根にぶら下がった。

しかし、考えてみれば現場検証は昼間にアビーがやっているだろうから、俺が見るべきものはあまりないだろう。その代わりに、俺は警官たちの会話に耳を傾けた。

「――しかし、ハワード警部は全く役に立たないな」

「ああ。何を話しても吸血鬼の仕業としか言わん。そんなもん実在するわけがないのにな」

……どうやら、ハワード警部なる人物はあまり部下からの信頼を集められていないようである。

実在はしてるんだけどなあ。目の前で元の姿に戻ってみせようかと思っただが、そんなことをしたら大変だ。

しかし、流石に昨日の今日に事件が起きたばかりの場所ともなると血の匂いが強い。このままでは我慢できなくなってしまいそうだ。仲間の気配も特に感じないし、さっさとこの場を離れた方が良さそう。俺はこっそりと飛び立った。

現場から離れ、俺はまた周りに人がいないことを確認してから元の姿に戻った。

ぐう、と腹の音が鳴る。だめだ、血の匂いを嗅いだら腹が減ってきてしまった。すれ違う仕事帰りらしき人間たちを見て思わず喉が

鳴る。いかん、このままでは本当に俺が吸血鬼事件の犯人になってしまう。

こういう時は鉄分ジュースが良い。俺はここから一番近いコンビニを目指し、近道である路地に入った。

路地に一歩足を踏み入れた途端、暗闇が俺を包み込んだ。やはり暗いところは安心する。

それにしても、未だに血の匂いが鼻に残っている気がする。俺は鼻をこすってみたが、匂いは消えなかった。禁血期間が長すぎて、とうとう禁断症状が出始めたのだろうか。

さっさとコンビニに向かおう、と足を進めようとした時、目の端に人影を認めて俺は立ち止まった。

……不良らしき青年だ。シャツターに何か描いている。怖い。絡まれたら厄介だ。俺はなるべく目を合わせないように早足で通り過ぎようとした。

すると、足に何か当たった。慌てて下を見ると、どうやらペンキ缶を蹴っ飛ばしてしまったらしい。

その時大きい舌打ちが頭上から聞こえたのでそちらを向くと、青年が俺を睨みつけていた。シャツターには赤色のアーティステックな書体でヴァンパイア、と書かれていた。こんなところにまで吸血鬼ブームが来ているのか、などと呑気に考えていると、もう一度舌打ちが聞こえたので俺は急いで頭を下げた。

「す、すみません」

謝罪してから顔を上げると、彼はもう俺に興味を失くしたらしく、落書きを再開していた。俺は再度早足になり、急いで裏通りを出た。

あの道、いつもは誰もいないのに。何故今日に限って怖い人間がい

るのだ。吸血鬼なんかよりあっちの方がずっと恐怖じゃないか。最早光の下どころか、暗闇にすら俺たちの居場所はないらしい。

無事に裏通りを抜けた俺はコンビニの看板を目指した。この辺りは深夜に出歩いている人は少ない……と思っていたが、ここにも先客がいた。またもや不良の若者だ。しかも今度は複数人でたむろしている。

この辺り、こんなに治安が悪かったのか。今度から、外に出るのは深夜ではなくもう少し早い時間帯にしよう——そう決意し、彼らを見捨てて店内に入ろうとしたが、一瞬だけその中の一人と目が合ってしまった。

「あ？ 何見てんだよオッサン」

オ、オッサン……？ 俺はまだ四百五十七歳だぞ！ 見た目も二十代前半の人間ぐらいのはずだ、失礼な。

しかし、自慢の牙を使えない今、俺はくたびれたポロシャツにジーパン姿の、そこら辺にいる貧弱な若者だ。すみません、と口ごもりながら急いで彼らの横を通り過ぎ、コンビニの中に入る。背後から下品な笑い声をした。本当に治安が悪いなこの街。

ドリンクコーナーの前に行き、いつも飲んでいる鉄分ジュースを探す。しかし、該当の棚は空っぽだった。あれ、売り切れだろうか。

「鉄分ジュースですかあ？」

「え？ ああ、はい」

俺が困っていると、ポニーテールの女性店員が横から声を掛けてきた。彼女には見覚えがある。いつも深夜帯にいる店員だ。

「丁度補充するところだったんですよ。お客さん、いっつも買ってますよね」

「ああ、ありがとうございます」

どうやら向こうも俺を認識していたらしい。……裏で『鉄分男』みたいなあだ名を付けられていたらどうしよう。

新たに補充された鉄分ドリンクと、ついでにトマトジュースも手に取る。夕食の時にあのラスクを見てから、無性にトマト味が恋しくなっていたのだ。

レジに商品を持っていくと、女性店員はそれを見てクスクスと笑った。

「お客さん、鉄分にトマトって、吸血鬼みたいですねえ」

「えっ」

凶星をつかれ、俺は腑抜けた声をあげた。店員は笑いながら続けた。

「ほら、すぐそこで事件があったじゃないですか。吸血鬼にやられたとか何とか。もしかしてお客さんが犯人？ なーんて……あ、二百九十八円になりまーす」

「はは……」

俺は力なく笑いながら代金を支払った。……アビーだけでなくコンビニ店員にまで犯人扱いされるとは。

「ありがとうございます」

しばらくこのコンビニに来るのはやめよう。あと、帰りは明るい道を通って帰ろう。怖い人間よりは人工光の方がまだ良い。

そういえば、結局吸血鬼は見つからなかったな。今宵の外出は無駄に精神を削られるだけに終わってしまった。

おそらくアビーはもう寝ているだろう。事件の話は朝になってからだな。とりあえず、帰ったら掃除と朝食の支度でもするか。そん

なことを考えながら、疲れ果てた俺はとぼとぼと教会への帰途にいった。

「それで、お仲間は見つかりましたか？」

早朝、起きてきたアビーは開口一番にそう尋ねてきた。

「いや、見つからなかった」

「この無能」

……シンプルな罵倒を浴びせられた。コイツ、朝は低血圧で機嫌が悪いのだ。

「そっちこそ、昨日の調査で何か分かったのかよ」

俺がそう聞くと、アビーは被害者の詳細について教えてくれた。首の傷の状態、現場に残された血の量。なるほど、確かに新聞には載っていない情報が豊富だ。それだけかよ、と少し思ったが、俺よりは情報量が多いので何も言えない。代わりに、俺は昨晩帰ってから考えた思いつきを話すことにした。

「そもそもだ、俺たちもその警部もはなから吸血鬼が犯人だと決めつけているが、人間の可能性が消えたわけじゃないだろ」

俺がそう言うと、アビーは納得がいかないという顔で眉をひそめた。

「人間だとしたら、どうやってほとんど血を零さずに抜いたのですか？ 注射器を使うには傷口が大きすぎると思いますよ」

アビーの問いに、俺は待つてましたと得意顔をして答えた。

「あれだよ、灯油ポンプ」

「はい？」

アビーはピンと来ていないらしい。俺は腰に手を当て、話を続けた。

「最初、俺が必死でポンプの赤いところを押したら、お前がめちやくちや馬鹿にしてきたことあっただろ。サイフォンの原理を使えって」

サイフォンの原理というのは、二つの容器の水面の高さが違う場合、水面が同じ高さになるまで高い方から低い方へと水が流れる——というものらしい。だから、ポリタンクを段差の上にも置けばポンプを押すのは最初の数回だけで良いのに馬鹿ですわねえ、と以前アビーに散々こけにされたのである。

俺の言いたいことを理解したらしく、アビーはふむ、と頷いた。

「ベンチの上の死体から、地面に置いた容器に血を流して移したという訳ですか。それなら細いチューブが一本あれば可能ですね。ポンプが付いていないので、最初は口で吸い出さなければいけません」

「そう考えると、吸血鬼の仕業つても案外間違いないかもな」俺が茶化すと、アビーは無表情で片眉を上げた。つまり奴だ。

「貴方のお話には一理あると思います。一旦人間が犯人だと仮定しましょう」

「そりやどうも。でも、わざわざ吸い出した理由までは思いつかなかったんだ。人間の考えることはよく分からんからな。お前は何か案あるか？」

俺の問いにアビーはしばし考える素振りを見せ、それからこめかみを抑えつつ口を開いた。

「――考えられるのは二つですね。まず一つは、吸血鬼を犯人に仕立て上げるため。さきほど貴方が言った方法なら、傷口は一つで良いはずです。それなのに傷が二つあったのは、吸血鬼の噛み痕に見せかけたかったからではありませんか？」

「でもさ、吸血鬼が犯人なんて確信してるのはお前みたいなハンターか、警部さんみたいな迷信深い奴だけだろ。大半の人間は本気で信じちゃいないと思うぜ」

俺が反論すると、アビーは軽く口の端を上げて微笑んだ。

「あら、それだけじゃないと思いますよ」

「え？」

他に吸血鬼の存在を信じそうな奴がいるだろうか？ 俺が思考を巡らせていると、アビーは俺の顔面に絆創膏の巻かれた人差し指を突き付けてきた。そういえば昨日怪我してたな。

「貴方たち吸血鬼です」

「え、俺たち？ 俺たちを疑心暗鬼にさせて得する人間なんているか？ そもそも大半の人間が存在自体知らないだろ」

考えてみたが心当たりがない。俺がぼかんとしていると、アビーが小馬鹿にするような笑みを浮かべた。

「鈍いですね。貴方が今回の調査に乗り気だった理由は二つあったでしょう。一つは自身の無実を証明するため。もう一つは何でしたか？」

「そりゃ、俺の住処で俺以外の吸血鬼が暴れてるなら、少し釘をささないか、と思っただけだ」

アビーは俺の回答に満足したらしく、ご満悦の様子で頷いた。

「そう、貴方たちは縄張り意識が強い。普段は大人しくしている貴

方のような吸血鬼でも、領地侵犯されたとなれば表に出てきます。犯人の狙いはそれだったのです」

「俺みたいな隠遁吸血鬼を炙り出したかったってことか？ そんなことしてどうするんだよ」

俺が抗議すると、アビーはまだ気づかないのですか、とため息交じりに呟き、それから呆れたような口調でこう言った。

「貴方たちを見つけることで大儲けする人間がいるでしょう」

「大儲けって……」

誰だそれ。俺は宙に視線を彷徨させた。するとアビーが無言で自身を指さしたので、俺は泡を食って後ずさりした。

「はあ？ お、お前……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？」

「この馬鹿。そんなわけないでしょう。私だったらそんな回りくどいことをしなくても、寝ている貴方の心臓に杭と銀の弾丸をお見舞いするだけで良いんですから」

物騒な発言をされて俺は縮こまった。今のは脅しか？

しかし、自分でないのならばどうということだ、と少し考え、俺はやつと気が付いた。

「あー……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？」

「そう、ヴァンパイアハンターは吸血鬼の首が収入源です。ご隠居吸血鬼は確保が難しい。これは逆に言えば、まだ他のハンターに狩られていない吸血鬼がたくさん潜んでいるということでしょう。それらをおびき寄せて捕まえられたら大金が手に入りますからね」

それらって、そんなモノみたいな……。俺たちにも人権はあるんだぞ、多分。

「しかし、隠れ家から引つ張り出すだけじゃ捕まえられんだろ――

あ、久々に外の人間を見て耐えられなくなった吸血鬼が血を吸うのを狙うとか？」

「そうだと思います。ただ、それだけでは心もとないですよ。現に、貴方は血を吸ってないわけですから」

「それもそうだな。とりあえず思いついたから試してみたのか？」
「とりあえずの思いつきで人を殺すとはとんでもない人間だ。しかし、アビーは俺の言葉に首を横に振った。」

「いえ、すでに他の街で同様の事件が起きていて、今回が三件目であることを考えると、前の二件で成功した方法を使い続けている可能性が高いでしょう」

「それはそうかもしれないが……。でも、心もとないって言ったのはお前だろ」

俺がそう言うと、アビーは軽く頷いて言った。

「ええ。そこで回収した血の出番というわけです。吸血鬼は血の匂いを嗅ぐと食欲が沸いてくるのでしょうか？ 貴方もそう言っていますよね」

「ああ。でもどう血を使うんだ」

俺が聞くと、アビーはにっこりと微笑んだ。

「ネズミ捕りですよ」

「は？」

「昔ながらのネズミ捕りの仕組みは、餌でおびき寄せたネズミを捕まえるというものでしょう。あれと同じです」

「……つまり、血を餌に俺たちをおびき寄せて、我慢できずに近くの人間に襲い掛かったところを捕まえよう、と？」

俺の言葉にアビーはその通りです、と返してきた。おいおい、ネ

ズミと同等の扱いなのかよ、俺たちは。

でも、他の街で成功してることとは引っかけた奴がいたということになる。そんなアホが仲間にいるとは思いたくない……。が、俺も鉄分ジュースが無ければ引っかけたかもしれないので、あまり人のことは言えない。

「あー、それで、その罠はどこに設置したんだ？」

「そうですね……。例えば酒屋のモーリス夫人。ワインに血を混ぜておいて、飲んで血の味を思い出した吸血鬼を狙う、とか」

「うーん、あのワインからは血の味も匂いもしなかったぞ。あれは真正銘ただの赤ワインだ」

俺は昨晚飲んだワインの舌触りを思い出しながら言った。アビーは腕を組んで少し首を傾げた。

「では、パン屋はいかがでしょう？」

「あのラスクか？ 吸血鬼に食わせたいなら、ニンニクをトッピングするわけないだろ。絶対食べないぞ」

「……それもそうですね。と、なると……。何でしょう。何か心当たりはありませんか？」

そう聞かれて、俺は頭を捻った。

「心当たりって言われてもな。俺が罠を見つけていない可能性もあるだろ」

「そうでしょうか？ 私なら、吸血鬼が現れそうな時間帯と場所を狙いますよ。貴方が行った場所を思い出してみてください」

アビーに言われて、俺は夜に出会った人々を思い出した。

あのコンビニ店員か？ 彼女が実はハンターで、俺に目星をつけて鎌をかけようとあんなことを聞いたとか——いや違うな、それだ

と血の出番がない。

「コンビニ前の不良集団も関係ないだろう。血の匂いはしなかったし、ただ俺がオッサン扱いされただけだ。」

「それ以外、吸血鬼が行きたくなるような場所にいた人物となると――。」

「――あ」

「思いつきましたか？」

「路地裏だよ。路地裏でシャッターに落書きしてた奴がいた」

「そうだ、あの時、確かに俺は血の匂いを感じていた。直前に事件現場を見たせいで禁断症状でも出たのかと思っただが、そうではなく本当にあの場には血があつたのだ。」

「俺はシャッターに描かれた落書きの意匠を思い出した。赤色で書かれた『ヴァンパイア』の文字を。」

「被害者の血はペンキ缶の中だ。消される前にシャッターの落書きを調べた方が良さそうだ」

「俺がそう言った瞬間、アビーは部屋を飛び出した。警部に電話をかけた行ったのだろう。」

「どうやら俺の出番はお終いのようだ。そういえば、居場所が無いと嘆く俺を心配した、なんてアビーは言ってたな。確かに少しは社会に貢献できたかもしれないが、明日からはまた引きこもり生活だ。結局、俺に残された居場所はこの教会の地下室だけらしい。」

「頭を使って疲れたし早めに寝よう。アビーが戻るのを待たずに俺は地下室へと帰り、扉をしつかりと閉めて棺桶に横たわった。」

『自称ヴァンパイアハンター逮捕！』

「……自称扱いなんだな」

「まあ、ヴァンパイアハンターは公に知られている職業ではないですからね。――主よ、感謝のうちにこの食事を――」

「事件解決の翌日。夕食を食べ終えたアビーが、いつも通り食後の長台詞を唱え始めた。今日は何故かアビーが早めの夕食を要求してきたので、まだやつと日が沈みきつたぐらいの時間だ。アビーが折っている間に、俺は新聞記事の続きを読み進めることにした。」

「えーと……取り調べに対し、容疑者は容疑を認めているものの、『俺はヴァンパイアハンターだから、これは正義の為の必要な犠牲だ』などと供述しており、警察は精神鑑定の検討を――おいおい、妄想扱いされてるぞ。お前、一応ハンター仲間なんだから。こういう時に助け合ったりとかしないのか」

「俺がそう聞くと、食後の祈りを終えたアビーはとりすました顔で口を開いた。」

「むしろライバルが一人減って大助かりです。まあ、そもそもこんな手段を使わないと吸血鬼一人捕まえないような落ちこぼれが消えたところで、ハンター協会には何のダメージもありませんが」

「お前、相変わらず手厳しいなあ。……ところで、さっきからずっと聞きたかったんだが」

「何ですか？」

「とぼけた返事をするアビーに向かって、俺は羽織っているマントを両手で広げてみせた。」

「起きたら服がこれしかなかったんだが、一体どういことだ？」

赤い裏地のマントに、真っ黒のタキシード。俺がアビーに出会う前に来ていた、吸血鬼の正装である。教会に居候を始めてからは、こんな格好で人前に出たら不審者だ、とアビーの手によってクロージェットの奥にしまい込まれていたはずだ。どうして突然出てきたのだろう。

「今日が何の日かご存知ですか？」

「今日？」

俺は机に置かれた卓上カレンダーに目をやった。十月三十一日――。

「――ああ、ハロウィンか」

「はい。一年に一度、人間が貴方たちの真似事に勤しむ日です。今日だけは、その服装を怪しむ人はいませんよ。それに――」

アビーが窓に近づき、そのままカーテンを開けた。通りは大勢の人間で賑わっている。狼男にミイラ、フランケンシュタインにゾンビ。怪物もどきがひしめく中で、明らかに数が多い仮装があった。

「連日の吸血鬼事件の影響か、今年は吸血鬼の仮装が一番人気だそうですよ。吸血鬼関連の商品も飛ぶように売れているとか。貴方がその姿で出歩けばスター間違いないです。何てったって本物ですもの。貫禄が違います」

……若干おちよくられている気もするが、どうやら彼女なりに俺のことを気にかけてくれていたのは本当だったらしい。俺は椅子から立ち上がった。

「そういえば、お前は仮装しないのか？」

「私はこのままで。シスターの仮装です」

「なるほど、お前も本物ってわけか」

俺が笑うと、アビーもいたずらっぽくニヤリと笑った。聖職者にあるまじき笑顔だ。あの警部が見たら泡を吹くだろうな。

「ほら、早く行きましょう」

急かすアビーの後を追う。彼女が教会の扉を開いた瞬間、いつもより一層まばゆい人工照明に目が眩んだが、今日は不思議と気分が良い。

光に照らされてシルエットになったアビーがこちらを振り向く。

修道服のベールがふわりと揺れた。

「今夜の主演は貴方ですよ、吸血鬼さん！」

ミスフィリア 第23号

発行年月 2021年11月
発行元 埼玉大学推理小説研究会

ホームページ URL

<http://mcs.xrea.jp/>

メールアドレス

mcs.postbox@gmail.com

Twitter

<https://twitter.com/McsPostbox>

無断印刷・転載厳禁



MysPhilia Vol.23